

第二章 大間町の歴史

第一節 縄文時代以前の大間

郷土の形成 約二億四七〇〇万〜六五〇〇万年前に下北半島の基盤が形成された時代、大間町はもちろんのことと**経緯**と、下北半島の全体は、まだ海の中にあつた。それ以降、大規模な火成活動の繰り返しと隆起運動によつて、下北半島地域は海上に現れて陸地化する。そのころは海底火山活動の時代でもあり、大間地域の基盤岩である大間層や奥戸集塊岩層などは、二六〇〇万年前のこの時代に形成された。

そして約二〇〇〇万年前に至つて、いわゆる氷河時代が到来する。氷河期の海面の低下と間氷期における海面の上昇によつて、現在の大間町の地形がほぼ出来上がったばかりでなく、一〇〇万年前ごろに形成されたと思われる津軽海峡によつて、大間町は本州の最北端の地として位置づけられたのだった。

さらに氷河期は海面の低下によつて、北海道と本州とを生物が往来する陸橋化を生み、北方系生物の南下、南方系動物の北上を促す。大間町を北限とする南方系動物のサルは、この時代にたどり着き、一時期、下北半島の田名部盆地の一角が海進によつて沈み、下北半島が一種の孤島状態にあつたことから、そのまま棲み着いてしまつたのである。

先史時代 紀元前五万〜二万年ごろ、下北半島の尻屋崎一带にナウマンゾウやオオツノシカが生息していた**の大間町** ことが化石の発見によつて知られているが、このころの下北半島は津軽半島と陸橋によつて結ばれていて、陸奥湾は盆地だったと推定される。そのことから、最北の大間地域にもこれらの旧動物の往来があつ

たろうと推測されるが、いつごろからわが郷土に人間が住み着いたかという問題とともに、確かなところは明らかではない。

しかし、一〇〇万年前からの大氷河時代の前後六回にわたるといわれる氷期と間氷期を通じ、旧石器時代の人や旧動物たちは、間違いないこの大間の地を往来したことであろう。旧石器時代の人々の生活を知る手掛かりは、下北半島においては東通村の物見台遺跡と東北町の長者久保遺跡などがあり、大間地区ではこの時代の動植物の化石も人類の遺跡も発見されていないが、海峽海底地形や海岸地形などから、旧動物や旧石器時代の人類が往来や北進を阻まれて、この大間地区で生活するようになったであろうことをしのぶことができるのである。

そして、わが国で狩猟、漁労、果実や貝類の採集生活が始まったとされる紀元前八〇〇〇年ごろの縄文時代草創期にも、大間地区での人の生活は明らかではない。それは、その一〇〇〇年後の縄文時代早期にも、さらに一〇〇〇年後の縄文時代前期に至っても同じである。これらの時期は、わずかに下北半島各地の遺跡から発掘された出土品や大間地区周辺の大畑町涌館遺跡、佐井村八幡堂遺跡、風間浦村古野・桑畑遺跡などから、大間地区にも居住していたであろう新石器時代の人々の生活を想像するのみである。

大間地区に限っていえば、縄文前期にもわずかに見られるが、紀元前三〇〇〇年以降の縄文時代中期から後期に至ってようやくその時代の遺跡が姿を現し始め、縄文時代晩期、そしてそれ以降の弥生時代に入ってから遺跡によって、われわれの祖先の生活を垣間見ることができるのである。

大間町内の 大間町には現在、二五か所の遺跡が知られている。これらのものは、時代の重複しているものが**縄文遺跡群** 多いため、時代別に縄文遺跡を明確にピックアップすることは難しいが、『大間町文化財調査報告』第四集によれば、縄文時代の遺跡は一四か所と明記されている。この中で縄文時代前期から後期のものと推

定される遺跡を挙げると――。

材木遺跡Ⅱ大間町大字奥戸字材木川目四六にあり、遺跡の種類としては散布地である。丘陵の末端に位置し、その範囲は一五〇〇平方メートル以上と推定されている。現状は畑地となっているが、その一部は荒地となっていて、出土品である縄文土器や石斧、石鏃などの石器のほとんどは散逸してしまっている。

小川代遺跡Ⅱ大間町大字奥戸字小川代一四にあり、遺跡の種類としては、縄文後期と推定される配石遺構である。比較的小規模なものだが、二〇〇平方メートル以上はあるとされ、現在は畑地となっている。近年、近くの畑から土器や石器が多数出土している。小川代川の左岸には、まだこのような遺構が残っているものと思われる。

焼畑遺跡Ⅱ大間町大字奥戸字焼畑五二にあり、遺跡の種類としては散布地である。畑地・神社境内・山林にまたがる丘陵に位置し、その範囲は一万平方米程度と推定される。縄文後期の土器と二枚橋期の弥生式土器が出土している。

冷水遺跡Ⅱ大間町大字大間字冷水一四にあり、遺跡の種類は散布地である。畑地・牧草地・宅地にまたがる海岸段丘に位置し、その規模は三〇〇〇平方メートル以上あるとみられる。出土する縄文土器の中には、縄文前期と推定されるものもあるほか、後期・晩期に至るものまでがある。

大間平二号遺跡Ⅱ大間町大字大間字大間平二〇―四にあり、遺跡の種類は散布地である。畑地・山林・荒地にまたがる丘陵に位置し、その規模は五〇〇〇平方メートル以上あるとみられる。ここからも縄文前期の土器や石斧、石鏃などの石器が出土し、重要な遺跡とみられている。

白砂遺跡Ⅱ大間町大字大間字奥戸下道にあり、遺跡の種類は散布地となっているが、配石遺構跡も発見され

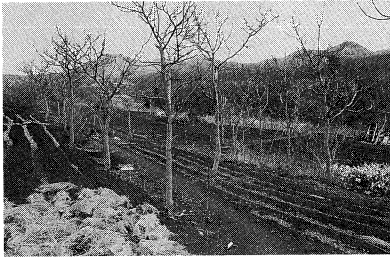


写真2-1 材木遺跡



写真2-2 小川代遺跡

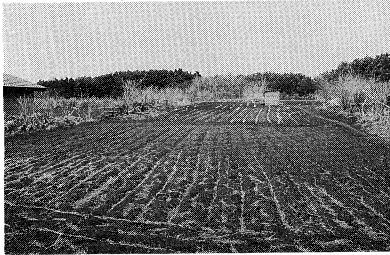


写真2-3 焼畑遺跡



写真2-4 冷水遺跡

た。大間から奥戸へ向かう途上の左側の草地周辺がこの遺跡であり、縄文前期から後期に至る土器・石器が出土した。また、縄文時代のものばかりでなく、弥生から奈良・平安と続く時代の出土品もある。

小奥戸(1)遺跡Ⅱ大間町大字奥戸字小奥戸三九六にあり、遺跡の種類は散布地である。昭和六十三年(一九八八)度の調査で発見された遺跡で、標高二〇メートルの海岸段丘に位置する。出土品には、縄文時代前期から後期の土器・石器、弥生時代の後北式土器、平安時代の土師器・擦文土器の土器片などがある。

小奥戸(3)遺跡Ⅱ大間町大字奥戸字小奥戸四〇四にあり、遺跡の種類は散布地である。海岸段丘の南西斜面の沢に面した畑に遺物が散布していて、平成二年(一九九〇)度の試掘調査では、縄文時代早期中葉のものと思われる尖底土器まで出土した。縄文後期とみられるものには、土器片、磨製石斧・石筥^{へら}・不定形スクレイパー(削器)などの石器が出土している。

戦後初めて調査された、大間崎に所在するドウマンチャ（大間平）貝塚がそれである。

昭和二十五年（一九五〇）に試掘調査されたとき出土した土器は、縄文時代晩期を代表する大洞B式を中心に、大洞A式・C₂式の土器であり、石器では石匙さき、骨器ではクジラの肋骨ろっぽうで作られた鋏はさが出土した。わずか六平方メートルの試掘調査だったにもかかわらず、この貝塚からはおびただしい魚骨・獣骨も発掘され、魚骨ではマダイ、スズキ、海獣のトド、アシカ、クジラ、獣骨ではニホンジカ・イノシシ、鳥類ではトンビ・カモメ・キジ・サギなどの骨が多く見られた。貝類ではアワビ・サザエ・スガイ・クボガイ・イシダタミ・レイシなど、いわゆる岩礁性のものが多かった。

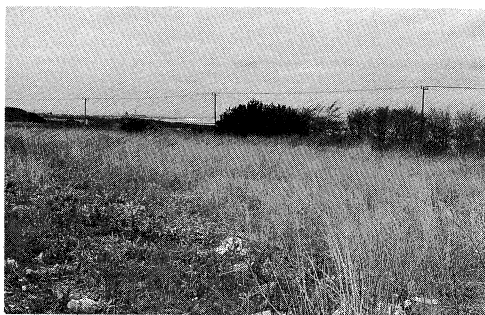


写真2-5 ドウマンチャ遺跡

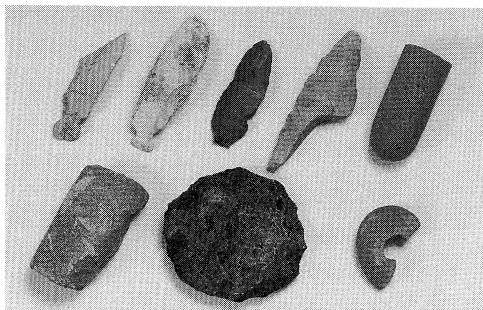


写真2-6 小奥戸(1)遺跡出土品

以上の八つの遺跡のほか、二ツ石(1)遺跡・船橋遺跡・黒岩遺跡などを大間町の縄文遺跡として挙げるができるが、いずれも全体として明確でなく、不明の部分が多い。

縄文前期から後期の遺跡に続く縄文晩期の遺跡には著名なものがあるから、さらにそれを眺めてみよう。

縄文時代晩期の 縄文時代晩期に入ると、大間町の遺跡 これまで挙げてきた大間町の遺跡群に比べて、もっと大きなスポットライトを浴びる遺跡が現れる。下北半島では

最初の試掘調査はこの程度で終わったが、昭和三十八年このドウマンチャ貝塚は、再び小規模ながら発掘調査される。このときは、縄文時代後期末の土器や晩期の大洞B式の土器や石器、土製品、骨角器のほかに自然遺物が出土したが、注目されるのは、その土器の形態である。普通、縄文時代晩期の一般貝塚遺跡では、供献用の浅鉢や注口土器ちゅうこうどく、また土偶や飾り物などが多いのに対し、このドウマンチャ貝塚はそれが少なく、その代わり、深鉢が圧倒的に多く、食料を煮炊きする用具が主体となっている。

このようなことから、一般貝塚が定住集落の遺跡であるのに対し、ドウマンチャ貝塚は夏季を中心とした季節的漁業集落ではなかったかと推測されている。大間崎に近い平坦な台地が冬季に住むのにふさわしくない場所であることを考えると、その可能性はきわめて高いといえる。このことはマガイやアシカ、トドなどの骨が多いことから裏付けられていて、春から夏にかけての漁期の臨時集落としてのドウマンチャ貝塚の存在がクローズアップされるのである。

また漁獲の方法として、東北三陸地方などでこの時代に行われていた銚もちや釣り針の漁法がここでは行われず、ヤスと呼ばれる網刺突具が使われていたであろうことも、その出土品から推測される。

ドウマンチャ貝塚の遺跡のほかに、この時代の遺物を出土する遺跡を挙げると――。

奥戸遺跡Ⅱ大間町大字奥戸字奥戸村六一―一にあり、一〇〇〇平方メートル以上の規模から、縄文晩期のものとして推定される土器や石棒が出土している。

大間遺跡Ⅱ大間町大字大間九一―一にあり、稲荷神社の境内とその周辺三〇〇〇平方メートル以上が遺跡となっている。主として弥生時代・鎌倉時代のものが多いが、縄文晩期の大洞・A式土器も出土し、鹿骨製骨篋かこせいかつてい、釣り針、ヤス、貝輪なども出土する貝塚遺跡である。また、この遺跡は青森県内では、

この時期唯一の鉄片が発見されたことでも知られている。

奥戸^{うわかち}上道遺跡^{じょうだういせき} 大間町大字大間字奥戸上道四七―三一にあり、海岸段丘の西斜面一帯の原野に位置する遺跡である。段丘端の土取り部分に遺物が散布しているため、かなり破壊されたものが多いが、縄文晩期の土器が出土している。

これらのほか、二ツ石(4)遺跡からも縄文晩期の土器片が出土しているし、先の縄文前期から後期の部分で挙げた小奥戸(3)遺跡・冷水遺跡などからも縄文晩期の土器片は出土している。

以上のように、縄文時代の各期を大間町にある遺跡を通して眺めてきたが、この本州最北端の地に少なくとも前期以降、私たちの祖先が漁労活動を中心に居住し、やがて次の新しい時代――弥生文化の時代への推移を迎えるのである。

第二節 古代の大間

一 弥生文化と続縄文文化

北上する 普通、歴史の教科書で記される弥生時代とは、北九州に稲作中心の弥生文化が入った紀元前三世稲作文化 紀ごろからとされ、出土する土器（弥生式土器）の形式に基づいて前期・中期・後期の三期に区分されている。

九州から近畿・中部・関東・東北へと北上したこの稲作文化の普及は、いかに圧倒的な速度があったとはいっても、本州の北端である青森県にまで伝わるには、ざっと四〇〇年ばかりの時間を必要とした。とすると、水稻農耕の普及を基盤とし、大陸文化の影響によって成立した新しい弥生文化に象徴される弥生時代は、わが郷土・大間町から見れば、先史時代と有史時代とを結ぶ時点に位置するといつていいであろう。

しかし、先史時代の弥生文化が東北地方北部から北海道西南部にまで大きな影響を与え、それが現在の日本文化の基層になっていることは、今日の考古学の常識となっている。また、青森県全体でも、弥生時代前期から稲作が行われていたのではないかと想像させる遺跡からの出土品もあって、弥生文化と東北地方北部との交流は、やはり明確に先史時代に位置づけて考える方がいいのかもしれないが、ここでは弥生時代も大間町の古代という

範囲に入れて眺めていきたいと思う。大間町や近隣に散在する弥生時代の遺跡からは、有史時代に入った古墳時代以降の古代を知る貴重な資料が数多く見られるからである。

南下する

本州の弥生時代とほぼ同時に始まった北海道の続縄文文化は、弥生時代以降も引き続き発展し、**続縄文文化** その中の後北式・北大式土器と呼ばれる土器が三世紀ごろから東北地方に南下してくる。これらの土器には稲作農耕の痕跡が認められず、青森県では弥生時代後期といわれる念仏間・天王山式土器系のものにも、弥生文化の最大の特徴である稲作の影響が全く見られない。このことは、一体何を示しているのだろうか。

下北半島を含む青森県、東北地方北部にまで弥生時代の早い時期から稲作による米の生活が広がっていたことは、ほぼ確実な事実だが、だからといって、すべての地域で米中心の生活が行われていたわけではない。ことに海岸部は、現代でさえ稲作に適さない地域であることを考えると、米を食べることはあっても、それは津軽地方などの肥沃な平野から運ばれてきたものと考えの方が妥当である。そして青森県の海岸部の弥生人たちは、従来どおりの狩猟・漁労を基本とした生活を送り、稲作を中心とした弥生文化より、縄文文化を継承する続縄文文化を生み出し、引き継いでいったと考えられる。

またもう一つ、弥生時代前期と中期の気候は、現在とほぼ変わらないとされているが、後期以降の寒冷化が東北地方北部の稲作を平安時代ぐらいつままで不可能にしたのではないかとすることも指摘されている。既に弥生時代前期から水田が造られ、水稻農耕が行われていたとみられる津軽地方の遺跡でさえ、弥生時代後期から八〇〇年余り、水田跡ばかりか、稲稈痕の土器や炭化米の出土は皆無なのである。

このような面から見ても、歴史の教科書でいう稲作文化とは切り離せない弥生文化と東北地方北部の弥生時代とは、大きな質的な違いがあり、わが大間町の弥生時代の遺跡とされるものも、北上してきた先史時代の弥生文

化の遺跡というよりは、有史時代に入って南下してきた北海道の続縄文文化遺跡としての色合いが濃いものであるといっている。大間町の弥生時代を、本節に組み入れるのは、以上のような理由からである。

青森県内での稲作の始まり 本州の北端に位置する青森県に弥生時代前期にまでさかのぼる水田跡が発見されたのは昭和六三年（一九八八）と、つい最近のことである。津軽平野の南西、岩木山麓の砂沢遺跡がそれだが、発見された水田跡は六枚あり、これより七年前に確認された南津軽郡田舎館村の垂柳遺跡の弥生水田より北にあり、さらに二〇〇年も古いものであった。

もっとも、それまでにも、青森県内で稲稈痕の付いた土器や炭化米が出土した遺跡はいくつもある。三厩村宇鉄II遺跡・弘前市清水水源地遺跡・尾上町五輪野遺跡・田舎館村田舎館遺跡・同村高樋遺跡・平賀町井沢遺跡・三沢市天狗森貝塚・八戸市是川堀田遺跡・脇野沢村瀬野遺跡・川内町宿野部^{しな}榎ノ木平遺跡などがよく知られ、ほとんど県内全域に広がっているばかりでなく、津軽平野北部の亀ヶ岡遺跡から発見された炭化粃は縄文晩期末のものと同推測され、弥生時代前期以前にも米は青森県にあったと注目を集めた。

しかし、これが青森県内で稲作が行われていたということは別問題であり、水田跡の発見が待たれていたわけだが、垂水遺跡、続いて砂沢遺跡での水田跡の発見により、弥生時代中期、そして前期に、青森県でも稲作農耕が行われていたことがわかったのである。そして、それと同時に県内各地で発見された稲稈痕のある土器や炭化米が東北地方南部などからもたらされたものではなく、紛れもなく県内で作られた稲作によるものであるとする考えが一般的となった。

平成四年（一九九二）に八戸市・風張遺跡の、時代的にはさらにさかのぼる縄文時代後期の竪穴住居跡から炭化米が検出されたことが話題を集めたが、青森市・三内丸山遺跡の発掘が進んだ平成六年には、これまでの縄文

観を塗り替える事実が次々と発見され、注目されてきている。これらはまだ慎重に考証されなければならぬものにしても、本州の最北に位置する青森県と稲作とは、想像以上に古い時代から結び付いていることは事実であろう。

下北半島での 津軽平野で稲作農耕が始まった弥生時代前期の下北半島は、どのような状況にあったのだろうか
弥生時代前期 か。先にも述べたように、この時代、平野部では稲作農耕の生活が盛んになっても、海岸部では縄文時代と変わらぬ立地条件の中で、従来と変わらぬ狩猟・漁労の生活形態が継続されていたとみるのが普通である。しかし、この時代の下北半島の遺跡から発掘された出土品を見ると、ここにも新しい弥生文化の波がひたひたと押し寄せているのがわかる。

脇野沢村の瀬野遺跡は、弥生時代前期の円形大型の竪穴住居が発見されて注目を集めたが、発掘された土器の中から稲粃痕のあるものが検出され、縄文時代と異なるコメの文化の伝播でんぱがうかがえる。川内町の宿野部遺跡でも弥生時代前期の稲粃痕の付いた土器が発見され、下北半島が決して他の地域に取り残された地域でないことがわかる。大畑町の二枚橋遺跡からも粃圧痕とみられる土器が出土したが、これは稲粃ではなく、エゾノサヤヌカグサではないかといわれている。このように、はっきりとした米の文化の伝来を示すことはできないが、明らかに弥生時代前期の各種土器が発見されている。

このほか弥生時代前期の下北半島の遺跡には、むつ市の梨ノ木平遺跡・大川目遺跡があり、ここから発掘される土器は、縄文時代晩期の特徴が強く残る弥生時代の最も初期の土器類だといわれる。また、これと同時期の遺跡として知られる東通村の前坂下遺跡からは、砂川式土器の時代の住居跡が発見されているし、川内町の檜川代遺跡からは、砂沢式土器から二枚橋式土器直前のもと思われる土器が出土している。

以上のように弥生時代前期の下北半島の遺跡を眺めてみると、縄文時代の伝統を残しながらも、新しい時代の文化が次第に広がり、稲作こそ地形・気候により行われていなくても、米を食事のメニューの一部とした生活を当時の人々が送ったであろうことが推測できるのである。

下北半島での 弥生時代中期に入ると、青森県の平野部では、稲作農耕が前期に比べてもっと盛んに展開され弥生時代中期 ってくる。この時期の下北半島の遺跡を眺めてみよう。

まず挙げられるのは、弥生時代前期に引き続き大畑町の二枚橋遺跡である。ここから発掘された二枚橋式土器と呼ばれる土器は、この時期を代表するものであり、さまざま種類があるが、前期を代表する砂沢式土器に続く重要な時代指標となっている。下北半島を中心に北海道渡島半島まで広く分布し、北海道南部の恵山文化と共通する内容を持つものとして知られる。

この遺跡から出土する石器類も北海道西南部によく見られるもので、恵山式土器文化期の石器であることを考えると、この時期の下北半島と北海道との交流の深さをしのぶことができる。

次に挙げる脇野沢村の瀬野遺跡も、前期から引き続きこの時期の重要な遺跡である。ここから前期の竪穴住居跡が発見されたことは既に述べたが、数多く発見された田舎館式土器とともに、農耕儀礼用に用いられたであろうとされる多頭石斧せきふが知られている。この石斧は関東地方では弥生時代以前から存在するが、おそらく弥生文化の波及とともに伝来したものであろうとされている。

さらに大間町の隣村・佐井村の八幡堂遺跡も弥生時代中期の土器を出土する。器形や文様から見ても、二枚橋土器から田舎館式土器にかけてのものといわれるが、津軽半島の宇鉄Ⅱ式土器として理解されている。また、川内町の宿野部遺跡も、前期に引き続き重要なこの期の遺跡として挙げなければならない。特に小竪穴遺構が、北関

東の女方遺跡の土器の二次埋葬施設と同じであることが注目を集めている。

このほか弥生時代中期の遺跡としては、むつ市の川代遺跡・金谷沢遺跡・雨御前遺跡などが知られるが、前期に比べて下北半島と北海道や津軽半島との交流が見られ、人々の生活に儀礼の形態がうかがえる。

下北半島での 弥生時代後期の下北半島を代表する遺跡は、東通村の念仏間遺跡である。現在ではこの時代の弥生時代後期 土器を念仏間式土器と呼ぶようになった。最も特徴のある土器は、重菱形文と磨消縄文を組み合わせた文様帯の壺形で、これらの念仏間式土器は下北半島では数か所に分布している。土器の文様構成ばかりでなく、その胎土・焼成などから田舎館式土器より流動化した文様に大きな特徴があり、磨消縄文から撚糸（ねんし）文器への変化が認められ、本州北部の弥生時代後期の一型式となっているわけである。

脇野沢村の外崎沢遺跡は、縄文時代の竪穴住居跡や土器・石器を出土した遺跡として知られているが、その上層部から弥生時代後期の土器や石器も出土した。これらの土器は、甕（かま）形・浅鉢・壺などに分類されているが、その器形・文様からいずれも念仏間式土器として位置づけられている。また川内町の邪馬尻（よまじり）遺跡と、これに隣接する檜川川代遺跡からも念仏間式土器が出土している。檜川川代遺跡の方は主体が縄文時代後期の土器で、念仏間式土器は少量だが、邪馬尻遺跡の方は念仏間式土器の方が主体である。

しかし、この念仏間式土器を出土した遺跡からは、北海道の続縄文文化中期に当たる後北式と呼ばれる土器が全く出土していないことが注目される。北海道の続縄文文化は年代順に恵山式土器・後北式土器・北大式土器に分けられ、それぞれが細分されているというものの、各時代とも東北地方北部との交流があるはずだが、念仏間式土器の時代が終わってから、恵山式土器に続く後北式土器が南下してきたことが推測されるのである。そして下北半島の弥生時代後期は、この念仏間式土器の時代をもって終末へと近づき、いよいよわが郷土・大間町の



写真2-8 大間遺跡出土品

味を持っている遺跡といえる。土器ばかりではなく、出土した石器の中には、豊漁を祈願するための祭祀に用いたと思われる刻文のある石棒や不定形ナイフのような石器もあるが、その主体は撚糸文系の弥生土器と後北式土器の遺跡である。

もう一つ、この時期の大間町を知る重要な遺跡として、大間貝塚を忘れてはならない。この貝塚は弥生時代前期から中期に至る砂沢式土器や二枚橋式土器を出土することでも知られているが、後北式に続く北海道の続縄文土器の北大式土器や古式の土師器も出土して

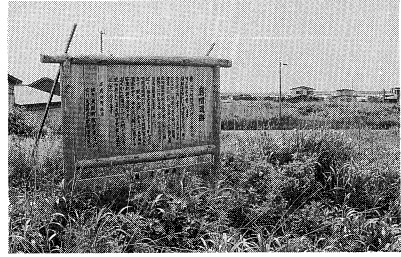


写真2-7 烏間遺跡

遺跡が登場する。

弥生時代後期の 大間の遺跡 弥生時代終末期の下北半島の土器は、大間町の烏間遺跡からすのまの土器に代表される。この土器は念仏間式土器に後続するもので、津軽地方の烏海山遺跡のものと同時期にあるため、烏海山式土器と呼ばれているが、青森県での最後の弥生式土器といつていいであろう。

烏間遺跡はあらためて紹介するまでもなく、大間崎の先端に位置する本州最北端の遺跡であり、北海道とは最短の距離にある。この遺跡から出土した土器は、二枚橋式土器から古式の土師器はじきまでの土器が知られているが、念仏間式土器時代には見られなかった北海道の続縄文土器の後北式土器も出土し、北上してきた西日本からの弥生文化と南下してきた北海道の古代文化とが入り混じった遺跡として重要な意

いる。この北大式土器は、口縁部に表面から内側に棒状の道具で突き刺して施文する突瘤文帯とつぼまを特徴としており、これらの土器は北海道西南部から津軽海峡を渡って南下し、下北半島・津軽半島の両地点を基点として東北地方北部に広く波及していくのである。

また、この大間貝塚は、動物遺存体の時期別出土によって弥生時代の時期別に、その漁労状態を推測することにも役立つている。すなわち、砂沢式土器から二枚橋式土器の時代には、マダイ・カサゴ・アイナメといった魚類やオットセイ・アシカ・ニホンジカといった動物が豊富に遺存体としてあるのに対し、北大式土器の時代には魚類の出土が非常に少なく、弥生時代の終末期には大間地方の漁労活動が不調だったことがわかるのである。

二 東北北部の古墳時代

空白に近い 弥生時代が終わりを告げ、いわゆる古墳時代と呼ばれる有史時代を迎える時期は、東北地方北部**古墳文化** ばかりではなく、日本全体が歴史学的にも考古学的にも、ほとんど空白に近い時代である。邪馬台国の女王として知られる卑弥呼ひみこの登場が後一八九年といわれ、北海道砂原の地名が興ったのが後二五〇年とされているが、その当時の文献はわが国にはなく、やがて大和朝廷が日本全体を支配するようになる四世紀後半まで、その空白は続くのである。

しかし、稲作農耕を基調とする弥生文化がそれぞれの地域に土地の所有をめぐる闘争を生み出し、権力を持った豪族の発生を促すようになり、それらが巨大な古墳の造成に力を入れる、いわゆる古墳時代の到来は、必然の成り行きであった。四世紀ごろから近畿地方では前方後円墳が造られるようになり、これが古墳時代の始まりと

されているが、この新しい文化は、四世紀の後半になると東北地方の南部にまで達する勢いで北上している。

古墳は当時の権力者の墓であるが、その規模は大きく、これまでの縄文時代や弥生時代の社会構造とは異なった権力を背景とした構築物である。あまりにも有名な大阪府堺市の仁徳陵古墳は全長四八〇メートルという規模な前方後円墳であり、当時の仁徳帝の権力の大きさを知ることができる。この時代には近畿ばかりでなく、それぞれの地域に、権力の象徴としての古墳が築かれるようになるのである。

東北地方最古といわれる会津大塚山古墳は全長一一四メートルの規模を持ち、堂々たる前方後円墳として知られているが、ここからは三角縁唐草文帯二神二獣鏡や刀剣、ガラス玉など、西日本的色彩の強い副葬品が出土している。これは四世紀後半のものともみられているが、五世紀に入ると宮城県の名取雷神山古墳が東北地方最大規模の古墳として現れ、さらに時代が下ると山形県・秋田県などの日本海側、さらに岩手県にも古墳が造成されるようになってくる。こうした古墳分布の拡大は、そのまま当時の中央の文化が東北地方にまで波及してきたことを示すものといっていであらう。

ところが、本州の最北に位置する青森県には前方後円墳は一つも存在しない。県内で最初に発見された古墳は八戸市鹿島沢と、それに隣接する円墳だが、いずれも規模は小さく、時代も古墳時代末期のものか、八世紀ごろの奈良時代に入ってから造築と考えられている。ほかにも八戸市の丹後平古墳群、下田町の阿光坊古墳群、南津軽の尾上町原古墳群などがあるが、小規模なものであり、大和朝廷の影響もこの最北の地には小さかったことをうかがわせる。

大和文化と 東北地方南部までは猛烈なスピードで北上してきた大和朝廷の権力も、東北地方北部まで浸透するのには長い時間を必要としたのは、この地域が『古事記』や『日本書紀』に記されているような、

北海道文化

中央の権力とは異種の蝦夷えみしの居住地とされていたことにも大きな原因があろう。東北地方北部に古墳時代末期の小規模な古墳が造築されていた時代のこの地方に関する文献はほとんどなく、むしろこの時代は大和文化の北上より、弥生時代が終わってからもなお継続して盛んだった北海道の続縄文文化の南下の方が東北地方北部に大きな影響を与えていたのではないか、という見方が一般的である。

これは先にも述べたように、本州に稲作を中心とした弥生文化が普及した後もなお、縄文時代と同様の狩猟・漁労などを基盤とした伝統文化を継承した北海道文化と呼んでもいい続縄文文化と東北地方北部の結び付きを示すものであろう。特に後北山G1-C2式土器と呼ばれる土器が青森県全域に広く分布していることがそれを表している。

北海道からの南下のルートとして考えられるのは、北海道の汐首岬から下北半島の大間崎、あるいは尻屋崎であり、また、北海道の白神岬から竜飛岬も一つのコースであったろう。いずれにしても、この時代の北海道文化の南下について、わが郷土・大間町は重要な位置を占めているのである。そして北海道の続縄文文化の南下が土器などの物だけでなく、北方住民の移動、南下を伴っていたと考えられるところから、当時の大間町は、北方民族と北方文化の集散地であったといえなくもない。

以上のように見ると、空白のように見える東北地方北部の古墳時代は、南下してくる北海道の続縄文文化と北上してくる古墳文化とが合流し、交錯し合う華やかな時代であったともいえる。

青森県内の 先にも述べたように、青森県内には日本の古墳を代表する前方後円墳こそないが、小規模ながら**古墳と遺物** もいくつかの古墳群があり、それぞれの出土品から、当時の本州最北の地の状況をわずかながらもつかがい知ることができる。

青森県内で発見された古墳でよく知られているものには、既に紹介した八戸市の鹿島沢古墳群・丹後平古墳群、下田町の阿光坊古墳群、南部尾上町の原古墳群などが挙げられるが、規模は小さくても、東北地方南部の末期古墳に比べて決してひけを取らない豊富な出土品がある。いずれも七世紀後半から八世紀初めにかけてのものと思われるが、古墳別にもその特色と出土品を列挙してみると次のようになる。

鹿島沢古墳 青森県で最初に発見された古墳で、鹿島沢の五基と隣接する根城宇大久保の五基の円墳が知られている。出土品には甕形の土師器や鉄鏃、直刀、鹿角製の柄がある刀子、青銅製の釧、ガラス玉、金銅製の毛彫馬具などがある。

丹後平古墳 発掘調査によつて、二四基の円墳と土壙墓二九基が発見された。出土品には土師器環・須恵器甕などの土器、蕨手刀、刀子、環頭大刀などの武器、耳環や玉類などの装身具、馬具類、砥石、紡錘車などと豊富である。中でも、獅子嚙式三累環頭大刀把頭は朝鮮半島で作られたものといわれ、その伝来のルートを考える上でも貴重なものとして知られている。

阿光坊古墳 円墳が九基発見されていて、現在のところ本州最北の古墳群とされている。出土品には、武器類、鉄斧、玉類、土師器などがあるが、赤色顔料で彩色された土師器の高塚が特に有名である。

原古墳 津軽地方で初めて発見された古墳だが、ほかの古墳のような円墳ではなく、一二基発見された古墳群はすべて馬蹄形であるとされている。出土品には蕨手刀やガラス玉などがある。

古墳文化に このように青森県内の古墳群は八戸地方を中心に上北郡や津軽地方にまで分布しているが、県内伴う出土品の南部にだけ存在し、今後の調査によつてはさらに北部での発見の可能性はあるというもの、下北半島や津軽半島など県内北部には、今のところその存在が確認されていない。

しかし、青森県北部に古墳の発見がなくても、四世紀から七世紀にかけての古墳文化に伴う遺物は、各地の遺跡から出土している。青森市の細越館遺跡からは坏・壺・甕などの土師器が、天間林村の森ヶ沢遺跡からは須恵器が知られ、下北半島に入ると、わが郷土の大間遺跡が弥生時代後期に続いて古墳文化に伴う遺物を出土する遺跡としてクローズアップされる。大間遺跡は先にも述べたように、北海道の続縄文土器である北大式土器の出土で知られる遺跡だが、古墳文化に伴う古い形式の渦巻文が施された土師器や鉄鍬が出土しているのである。

このような出土品を見ると、青森県北部が古墳文化の影響が全くなかったということは考えられない。青森県南部の古墳周辺には、わずかながらも当時の農耕集落遺跡が存在し、既に五世紀ごろから土師器や須恵器を所有した小豪族、あるいは集団の首長たちが支配する社会が成立していたならば、青森県北部でも、少なくとも古墳文化やその集団との接触があったと思われる。確かに東北地方南部までは順調に北上してきた古墳文化が、青森県地域の東北北部に至ってそのスピードが鈍ったとは考えられるが、縄文・弥生時代とは異なる政治権力を基盤とする地域集団が成立していくことは必然的成り行きであり、それは当時、異民族とみられた東北北部の蝦夷の族長たちにとっても例外ではなかった。権力基盤を背景とした古墳文化の北上は、古墳そのものが発見されるとされないにもかかわらず、着実に北上し、県内南部と北部とでは大きな差があったとしても、前進を続けるのである。

北海道式古墳 東北地方北部にわずかながらも足跡を残した古墳文化がさらに北上を続けた事実、津軽海峡と**北大式土器**を挟んで位置する北海道の石狩平野に分布する古墳群によって証明される。これらの古墳群は、北海道式古墳とか古墳様墳墓と呼ばれ、円墳または楕円形墳である。

石狩川の本流や支流の豊平川・茂漁川流域に所在する元江別古墳群・対雁遺跡・柏木東遺跡などがこの北海道

式古墳であり、いずれも青森県内の古墳群と共通する埋葬施設を持っている。東北地方北部の末期古墳と比べて、時代的には新しいものと推定され、それぞれに年代差があるものの、出土する擦文土器などから八世紀を中心に九世紀に及ぶものと推定されている。出土品は蕨手刀・直刀・刀子・環状装身具・勾玉まがたま・須恵器・擦文土器・銚か帯金具などで、これも東北北部の古墳から出土する遺物と共通する。

このように、東北地方北部で造営された末期古墳文化が津軽海峡を渡って北海道の石狩川流域に出現するようになるには、どのような北上ルートをたどったかははっきりしないが、先に述べた北海道の続縄文文化の南下と逆のコースをたどったとすれば、下北半島の大間崎、尻屋崎、また津軽半島の竜飛崎が再びクロースアップされてくる。

そして東北北部に末期古墳が造営されている時代に、北海道では後北式土器に続く北大式土器文化が繁栄し、津軽海峡を渡って南下してきたことを考えると、北大式土器を出土する下北半島の浜尻屋遺跡と大間遺跡は、その重要な中継点だったろう。さらに大間遺跡が東北北部の末期古墳文化に伴う遺物を出土する遺跡としても、北海道の北大式土器を出土する遺跡としても貴重な遺跡であることを考えれば、わが郷土・大間町は、本州の古墳文化の北上と、北海道の北大式土器文化の南下の両方を受け渡す窓口のような位置にあったといえなくもない。

古墳時代と 空白と謎に満ちた古墳時代と呼ばれる古代の東北地方北部を概観してみると、文献的には不明ながら、意外に華やかで活動的なイメージが浮かび上がってくるが、これを当時の日本中央の政治や経済・社会と重ね合わせてみることも、大間町の通史を理解していく上で必要なことであろう。

あらためて紹介するまでもなく、日本の状況を伝える最初の文献は中国の歴史書であり、紀元前二〜一世紀のころのことを伝える『漢書』が最古である。この「地理志」によれば、日本人は「倭人」と呼ばれ、その社会で

は数多くの小国が分立していたことが記されている。既にそのころ、これらの小国が前漢の領土である朝鮮半島の楽浪郡に使いを送っていたことも知られているが、その後、紀元後一〜二世紀のことを伝える『後漢書』東夷伝にこれらの小国の中の一つである奴国なぐにの王が後漢の光武帝に朝貢し、印綬を受けたことなどが明記されていることは、日本史を学んだ人なら、だれでも知っているだろう。

そして後漢が減び三国時代の『魏志』倭人伝によれば、二世紀後半の日本には大きな戦乱が起こり、やがて邪馬台国の女王・卑弥呼を中心とした小国の統合体が生まれ、卑弥呼は魏の皇帝から「親魏倭王」の称号を受ける。しかし、三世紀後半に魏が減んでから五世紀初めまで、中国の歴史から「倭」に関する記録は姿を消した。そしてその空白の一世紀余りの時期に、日本では大和政権による国土の統一が進められていったのである。

瀬戸内海沿岸から近畿地方にかけて古墳が造られ始めたのも、この三世紀から四世紀初めにかけての時期である。この古墳が、弥生時代の共同墓地とは異なる大きな権力を持つ支配者の墳墓であることは、既に述べた。そして、そのころの下北は、まだ弥生文化の影響を受けながらも、気候や地形によって稲作に不向きな地域として、従来の狩猟・漁労を中心とする生活が行われていたのであった。

五世紀以降 古墳時代と呼ばれる時代を和銅三年（七一〇）の平城京遷都に始まる奈良時代までとすれば、この**社会背景**の時代はまだまだ続く。大和やその周辺の豪族たちが連合してつくり上げた大和政権は、次第に勢力を拡大し、四世紀後半から五世紀初めにかけて朝鮮半島に進出して、百濟くだら・新羅しららを圧倒し、高句麗こうくりとも戦ったことが広開土王碑文に記されているし、朝鮮半島の進んだ生産技術や鉄資源を導入する。それと同時に、朝鮮半島から渡来してくる人々が持っている特殊技術で各種の産業を発達させ、さらに大和朝廷の勢いを強めた。

このような背景と諸文化の発達に伴って、豪族たちの間では文字の使用が始まり、六世紀に入ると百濟くだらから五

経博士が渡来するなど、儒教思想の摂取をはじめ、医学・易学・曆学などの諸学術、中国や朝鮮半島で盛んになった仏教まで伝えられるようになる。こうした大陸文化の伝来によって、大和政権がますます強力で豊かになっていったであろうことはいうまでもない。しかし九州から東北地方南部まで、その勢力範囲に治めたかに見える大和政権も、まだまだ完全な政治体制を整えていたわけではなかった。

六世紀に入っても、筑紫国造磐井の反乱があったり、蘇我馬子による崇峻天皇の暗殺など、不安定な動きがあり、後を継いで即位した女帝の推古天皇が甥の聖徳太子を摂政として国政の改革を推進し、国家の形を整えたとはいうものの、七世紀中期の大化の改新、後半の壬申の乱など、律令国家の形成まで、さまざまな激動を繰り返すのである。

こうした日本中央の激動の中で、東北地方北部は、わずかながら大和政権の末期古墳文化の影響を受けながらも、むしろ北海道の続縄文文化と北方住民の南下に伴って、非稲作農耕地域社会を形成する地帯だったと想像されている。

三 大和政権の北進と蝦夷

蝦夷六人へ いわゆる古墳時代と呼ばれる四世紀から七世紀の間に、東北地方北部、下北半島に関する歴史的の冠位授与 な資料は、わずかに二、三しかない。それを奈良・平安時代まで範囲を広げても、この地方に直接関係するものは十指に満たないであろう。そして普通、日本歴史の古代年表で最初に出てくる東北北部の記述は、斉明元年（六五五）に津軽の蝦夷六人が難波宮で冠位を与えられるというものである。

これは国家の正史である『日本書紀』の中で「柵養の蝦夷九人、津刈の蝦夷六人に冠各二階を授く」と記されているもので、大化の改新後、皇族や豪族が個別に土地や人民を支配する体制を改め、新しい地方支配の体制をつくるために戸籍・計帳を作り、班田収授法を実施した直後のことである。もともとこれより早く『日本書紀』には、大化二年（六四六）正月の条に蝦夷帰順の記述が見えるから、既に七世紀半ばには、津軽の蝦夷の一部は大和朝廷に服属し、朝貢関係を持っていたとも考えられる。

しかし、服属して朝貢するとはいつても、津軽蝦夷の側だけが朝参し、貢物をするという服従関係にあるわけではなく、貢納に対しては大和政権側からの賜物があったはずだから、これは一種の交易関係と見ることもでき、蝦夷側にも大きなメリットがあったと思われる。このとき冠位を受けた津軽蝦夷六人は、それぞれ首長的な存在の人たちだろうが、政治的にも経済的にも大和朝廷と利害が一致する朝貢関係を結んだともいえる。

ところが蝦夷と呼ばれる人々は、これらの津軽蝦夷のように、大和朝廷に対して服属する者ばかりではなかった。むしろ大和政権に対して抵抗する蝦夷の方が多く、この時代以降、わずかに残されている史料のほとんどは、大和政権の蝦夷「討伐」すなわち東北侵攻の記述ばかりなのである。

阿倍比羅夫 大和朝廷に従わず抵抗を続ける蝦夷に対して、大和政権はたびたび討伐を試みている。『日本書紀』の**蝦夷討伐** 紀¹では、阿倍比羅夫^{ひらふ}による蝦夷征討に大きくスペースを割いているが、その最初は斉明四年（六五八）の「阿倍臣船師一八〇艘を率いて蝦夷を討つ。罫田^{あきだ}・淳代^{ぬしろ}三郡の蝦夷恐れて一時に降伏。淳代・津軽二郡の郡領を定める」である。

越国^{こし}の国守として赴任していた古来からの名族・阿倍氏が日本海側から大船団を組んで攻め、罫田と淳代に勢力を持つ蝦夷を征討した記録だが、これには既に大和政権に帰順している津軽蝦夷が協力し、最初に淳代の蝦夷

を降伏させ、続いて強力な齋田の蝦夷も従えた。そしてさらに阿倍比羅夫は北進し、津軽蝦夷の拠点といわれる有間浜で渡島の蝦夷とも交流し、大いにもてなして帰順させる。渡島の蝦夷が北海道の蝦夷かどうかはともかくとして、津軽の蝦夷とは友好関係のある、もつと北方の蝦夷までを従えたことになる。

阿倍比羅夫の北征はこれだけでは収まらない。さらに翌年、またまた一八〇艘の大船団を組んで、まだ帰順しない蝦夷征伐に出発する。そして飽田・淳代二郡と津軽、そして胆振鉏の蝦夷を集めて大饗宴も催し、従った蝦夷の集団同士の間を固結を図り、津軽半島北部までの蝦夷のほとんどを大和政権に帰順させるのである。

このように阿倍比羅夫の蝦夷討伐を見てくると、秋田県沿岸から津軽へと本州の日本海側ばかりが中心のようにも見えて、下北半島にはあまり関係がないかのように思えるが、北海道南部から下北半島一帯と津軽半島北端とが渡島蝦夷の勢力範囲であったことを考えると、これらの北征は一応蝦夷の集団全体をフォローし、その帰順のめどをつけたということがいえるかもしれない。

肅慎人との 阿倍比羅夫の北征の中で蝦夷征伐より当時の中央の人々に強い印象を与えたと思われるものに、**交流と戦い** 肅慎との戦いがある。肅慎というのは、古く中国でアジア東北地方の極遠の地に住んでいた伝説の民のことであり、時代が下って三国時代には挹婁と呼ばれ、さらに隋の時代以降は靺鞨と呼ばれるようになった、ツングース系諸部族の中に包括される民族である。

日本の古代年表に記されている斉明六年（六六〇）「阿倍比羅夫船二〇〇艘を率いて肅慎を討つ」とある肅慎も、このツングース系の北方民族集団であり、六、七世紀には間宮海峡からサハリンを経由し、北海道のオホーツク海沿岸、北海道北部の日本海沿岸地域に達し、そこを拠点として、早くも大同十年（五四四）には佐渡に來航している。佐渡では、この見慣れぬ肅慎人の異様な風体や風習から「鬼魅」と呼ばれて恐れられたという。

しかし肅慎の渡航は、侵略や戦闘が目的であったわけではない。彼らは軍備はしてはいくものの船団は商船ともいえるもので、交易が主目的であったともみられている。異民族との物々交換のため、トラブルは付きものであり、阿倍比羅夫との戦闘も誤解によるものだったかもしれない。もともと阿倍比羅夫も肅慎を討つたために出動したのではなく、三度目の蝦夷征伐、または交流のために渡島蝦夷の拠点あたりに来たとき、渡島蝦夷と肅慎との交易交渉がもつれて険悪な状態になっていて、渡島蝦夷の要請によって、肅慎と交戦したともみられる。しかし、いずれにしてもこの戦いで阿倍比羅夫は勝利し、渡島の蝦夷たちをも従え、戦利品の熊皮を大量に朝廷へ持ち帰ったというから、予想以上の大戦果を挙げたことになろう。

阿倍比羅夫の三度にわたる蝦夷征伐は、肅慎との戦いというおまけまで付いて終わり、阿倍比羅夫も越国守から大宰府の長官へ任じられた。そして以後、八世紀に入るまで、大和政権の蝦夷征伐も中断されるのである。

オホーツク式 肅慎との戦いが古代の中央の人々にとって、蝦夷征討よりもっと強い印象を与えたことは既に**土器の南下** 述べたが、肅慎・靺鞨と呼ばれる北方民族の南下は、北海道で栄えた在来の縄文文化とは全く異質のオホーツク式土器文化の成立と南下という面から眺めても、大きな意味を持っている。

阿倍比羅夫と戦って敗れた肅慎が、北海道のホーツク沿岸地域と北海道北部の日本海側沿岸地域に沿海州・サハリン方面から南下して、そこを拠点とし、日本海を還流するリマン海流・対馬海流に乗って航海したらしいことは、佐渡への来航でも知られるが、佐渡ばかりではなく、この肅慎の軍備された商船団はたびたび日本海側を南下し、大和朝廷の勢力の弱い本州の各地に寄港したのであろうことは容易に想像できる。

オホーツク式土器文化は、こうした肅慎・靺鞨など北方系民族集団が北海道北辺で繁栄させたものであり、主として深鉢形の器形で円形の刺突文、沈線文、粘土紐による貼付文などが施文されている土器や牙製・骨製の彫

像・彫刻など大陸系の文物で知られる。また豚や犬の飼育、オホーツク海沿岸部の漁労・狩猟の生活が、北海道北辺に分布する遺跡から明らかにされている。

そしてここで最も注目されることは、このオホーツク式土器文化と下北半島の関連だろう。平成四年（一九九二）になって確認された脇野沢村の瀬野遺跡から出土したオホーツク式土器の二片が、空白の下北半島の古代史に新たな資料を与えたからである。渡島蝦夷の勢力範囲にある下北半島を考えると、阿倍比羅夫が渡島蝦夷の要請によって肅慎の船団と戦った事実がすぐ思い浮かぶし、少なくとも肅慎が日本海側を航海中、水や食料の補給地、あるいは野営のための寄港地として、脇野沢の瀬野遺跡に立ち寄ったであろうことは、容易に想像できる。

肅慎・靺鞨と

大和政権の蝦夷征討のための北進を記述するうちに、現在のロシア領沿海州に居住するオロチヨ

アイヌ・蝦夷

ンの先祖ともいわれる古代北方民族との戦い、その文化の南下にまで範囲が広がっていたが、これらの北方異民族とアイヌ・蝦夷と呼ばれた人々について、もう少し詳しく言及してみよう。

肅慎・靺鞨と呼ばれている古代北方民族がツングース系諸部族の中に包括されていたことは既に述べたが、中国の漢の時代の地理書『山海経』^{せんかいきやう}によれば「遼東ヲ去ル三千余里、穴居シテ衣無ク猪皮ヲ衣ル、冬ハ膏ヲ以テニ塗ルコト厚サ数分、用テ風寒ヲ却ル。其人皆工ニ弓ヲ射ル、長サ四尺、勁彊ナリ、箭ハ箬ヲ以テ之ヲ為リ長サ尺五寸、石青ヲ鏑トナス」と述べているように、大陸の極辺に住む未開人とされている。阿倍比羅夫が戦った肅慎がこれであるかどうかはわからないが、『日本書紀』に見える肅慎とは、一定の民族というよりは北方異民族の総称と思われる。

北方異民族といえは、当時の大和政権は蝦夷をもそのように眺めていたはずだが、『日本書紀』では両者は明確に区別され、蝦夷以外の北方民族を肅慎と総括して呼んだようである。先に引用した『山海経』には、サハリ

ンの古代ギリヤーク民族の玄股についても触れていて、魚皮の衣を着ると記しているが、『日本書紀』が蝦夷以外の北方民族をすべて肅慎と称しているとすれば、古代ギリヤーク民族も肅慎ということになるかもしれない。

また阿倍比羅夫は肅慎を打ち破った後、戦利品とともに肅慎人四七人を連れ帰ったことも『日本書紀』に記されているが、「石上の池の辺に於て須弥山しゅみせんを作る。高き廟塔びやうとうの如し、以て肅慎四七人に饗あへたまふ」とあり、戦いに勝利するばかりでなく、肅慎を饗応するという大和朝廷の権威を異民族に示す外交ぶりも展開している。

毛人と表記 一方、七世紀初めごろまで東北地方から北海道にかけて住む辺民を中央の人々は「エミシ」と呼ばれた蝦夷エミシ、中国の古書から借りた表記法の「毛人」を当ててきた。七世紀中ごろになってからは「蝦蟇」となり、それが「蝦夷」となるのは、中国風の中華思想、すなわち漢民族が自己を世界の中心である文化国家として、周囲の文化的後進民族を「東夷・西戎せいじゆう、南蛮・北狄ほくてき」としたように、差別意識を込めて「東夷」の「夷」を「蝦夷」に当てるようになった七世紀末からである。

最初の「毛人」という表記は、先に挙げた漢時代の地理書『山海経』の中でも、古代ギリヤークの東に毛人国という毛深いアイヌの住む国があることを記していて、それが北海道であるという確証はないが、そう考えるのも順当というものだろう。そして阿倍比羅夫が兩三度の北征を続けていた当時、北海道の北部から大陸文化の影響を受けた北方民族が南下し、北海道の住民と交流していたことは、ほぼ事実だし、アイヌの英雄叙事詩ユーカラには北方民族の来襲に対して、アイヌが連合して戦ったことも語られていることを考えると、渡島蝦夷を助けて阿倍比羅夫が肅慎と戦ったことが象徴的に思い出されてくる。つまり阿倍比羅夫の三度目の北征は、既に帰順していた渡島蝦夷アイヌを応援して、北方民族肅慎と戦ったとも考えられる。

となると、蝦夷はアイヌということになるが、戦前までアイヌ白人と異民族と考えられていた誤解が現在は

否定され、アイヌが日本人と同じ蒙古系の人種であることはほぼ間違いないとされ、アイヌⅡ和人Ⅱ同民族となり、アイヌが蝦夷か否かという問いかけ自体が意味のないものになる。いずれにしても『山海経』がアイヌの住む国を指す毛人国と、蝦夷を毛人と表記した古代日本中央の人々の符合は、当然のこととはいうものの興味深いものがある。

エミシから 現在のアイヌと日本人とが表面上大きく異なるのは、縄文時代以降の進化の問題だといわれる。

エビスへ 縄文時代のわれわれの祖先は、みな蒙古系諸人種に近い縄文人として、アイヌも蝦夷も倭人もなかった。変化が始まったのは、弥生時代に入ってからである。

現代の日本人の進化した方向は、西日本型の弥生人を経てシベリア・北蒙古系諸人種に近い土井ヶ浜・三津人の影響を受けたのに対し、アイヌは縄文人の伝統を根強く受け継いで縄文人の方向へ進む。つまり、稲作中心の農耕や文字や産業技術を摂取していく弥生人↓現代日本人への流れと、自然物を採取する生活を守り、文明との接触から遠のけられていた縄文人↓アイヌへの流れの違いがあったといえるであろう。

このように見ると、現在の日本人とアイヌとの違いは、単に日本人の地域差にすぎない。東北地方を眺めてみても、南部へ行くほど西日本の影響を強く受け、北部になればなるほど弥生文化の影響は弱くなり、縄文文化の伝統を根強く残す地域であったことは、これまで見てきた通りである。

そして、西日本文化の影響が少ない東北地方から北海道にかけての辺民たちを七世紀初めごろまで中央の人々は「エミシ」と呼んできた。そのエミシにもさまざまな部族があったらしく、斉明五年（六五九）の遣唐使の活動を伝える『伊吉連博徳書』によれば、唐の高宗の問いに「遠きものを都加留つがといい、次のものを鹿蝦夷あらしといい、近いものを熟蝦夷にぎえびすという」と記されている。都加留とは津軽蝦夷のことであり、このときは既に大和朝廷から冠

位を受けていたことは、先に述べた。

このほか渡島蝦夷やその一族ともみられる胆振鉏いぶりさきの蝦夷などは、大間の隣村・佐井村を拠点としていた部族ではないかといわれる。そしてやがて先にも述べたように、日本でも高まってきた中華思想に伴って「エミシ」という呼び名は、次第に「エビス」と変わっていくのである。

四 奈良・平安時代と蝦夷

律令国家の形成と展開 大和政権の政治の仕組みは五世紀末ごろから次第に整い、六世紀末から七世紀にかけて聖徳太子の摂政による推古朝で冠位十二階の制が定められ、憲法十七条が制定されるなどの前進があり、やがて大化の改新によって、中国の唐を模範とした律令による中央集権国家体制が形成されていく。

八世紀初頭の大宝元年（七〇一）には大宝律令が發布され、律令政治の仕組みはほぼ完成し、全国は畿内・七道の行政区に分けられ、その下に国・郡・里が設けられて、それぞれ国司・郡司・里長が置かれるようになった。この分類でいくと、青森県は東山道の中の陸奥むつ国の北端に位置し、国としての広さは未知の部分も含めて最大のものである。そして和銅三年（七一〇）に元明天皇が奈良に平城京を築き、「匂うが如くいま盛りなり」と歌われる奈良時代が始まり、より充実した律令国家が展開されていく。

この時代には国内資源の開発も進み、周防すおうの銅、陸奥の金のように各地に鉱山が開かれるなど、奈良・大和を中心とした畿内ばかりでなく、国全体の産業も大きな進展を見せた。さらに唐に倣って、和銅元年（七〇八）の和銅開珎わどうかいぼんをはじめとして、銭貨の鑄造も盛んに行われるようになり、その流通を奨励するようになったが、当時

の一般の人々は錢貨の代わりに稲や布を使うことが多く、錢貨の流通は都とその周辺にとどまった。

しかし奈良時代も、充実した国力を背景にした順風満帆の時代というわけではない。社会の変動にに応じて政界の動搖は続き、藤原広嗣ひろつぐの乱など、藤原氏と皇族、他氏族との争いが起こったり、僧道鏡の専横などによる混乱から律令政治の見直しが迫られるようになってくる。そして桓武天皇かむは旧勢力の強い長岡京を経て、延暦十三年（七九四）に平安京へ遷都して華やかな平安時代の幕を開くのだが、この時代になっても、現在の青森県である東北北端の地域は、蝦夷の反乱が続く後進の地域でしかなかった。

相次ぐ蝦夷 阿倍比羅夫の三度にわたる北征によって、ほとんどが大和朝廷に帰順したかに見えた東北地方の**たちの反乱** 蝦夷たちは、半世紀の後の奈良時代、そしてそれから一世紀後の平安時代に入っても大規模な反乱を繰り返すようになる。日本の古代史の年表を眺めていくと、東北地方に関する史料は数えるほどしかないが、少ない文献に記されている事項は、すべて蝦夷関係の動向だといっても過言ではない。

まず、八世紀初めから一〇世紀ぐらいまでの朝廷と蝦夷の反乱に関する事項を羅列すると、次のようになる。

和銅二年（七〇九）三月、陸奥国・越後国の蝦夷を征討するために軍を派遣する。

養老四年（七二〇）一月、渡嶋津輕津司從七位上諸君鞍男ら六人を靺鞨国に遣わす。同年九月、陸奥国の蝦夷が反乱し、按察使上毛野広人を殺す。

神龜元年（七二四）、出羽の蝦夷を征伐する。

宝龜五年（七七四）七月、海道かいどうの蝦夷が反乱し、桃生城を侵す。

宝龜七年（七七六）五月、出羽国志理波村の賊が反乱し、官兵敗れる。

延暦八年（七八九）三月、陸奥国の蝦夷が反乱し、諸国の軍、多賀城に会し賊地に入る。征東軍、賊師阿豆あて

流^る為らと戦い、敗北。

延暦十三年（七九四）六月、坂上田村麻呂、蝦夷を征す。この年平安遷都。

延暦十六年（七七九）十一月、坂上田村麻呂、征夷大將軍となる。

延暦二十年（八〇二）九月、坂上田村麻呂、蝦夷を討つ。

弘仁二年（八一）五月、坂上田村麻呂薨じ、文室綿麻呂^{ふんやわたまろ}征夷大將軍が出羽で蝦夷を討つ。

貞観十七年（八七五）十一月、渡嶋の荒狄^{あらし}反し、水軍八〇艘をもって秋田・飽海両郡の百姓を殺略する。

元慶二年（八七八）三月、出羽秋田城下の夷俘^{えいぶ}が反乱し、城郭・郡院・民舎などを焼損する。元慶の乱。

寛平五年（八九三）五月、出羽国渡嶋の狄と奥地の俘囚^{ふじう}が戦闘いたさんとする。

天慶二年（九三九）四月、出羽国俘囚が反乱する。

服属と離反を このように、奈良・平安時代の朝廷と蝦夷との戦いは執拗なまでに繰り返され、奈良時代末期繰り返す**蝦夷**にはむしろ蝦夷の方が勢いが強かったような印象さえ与える。特に太平洋側に築かれた桃生城

や多賀城を蝦夷の大軍が侵犯するなど、服属したかに見えた淳代や津軽の蝦夷をはじめとする各地の蝦夷の律令国家に対する反旗には、悔ることができないものがあつたといえるであろう。

もつとも『続日本紀』には、養老二年（七一八）八月乙亥条に、出羽ならび渡島の蝦夷八六人が上京して馬一〇〇疋を献じて授位されたことが記されているから、朝廷と蝦夷は常に敵対していたわけではなく、服従したり離反したりを繰り返していたのである。その証拠の一つが、先に羅列した養老四年「渡嶋津軽津司従七位上諸君鞍男ら六人を鞅鞞国に遣わす」という『続日本紀』の記述である。

律令制下では「司」というのは大体、六位ぐらいの役人であり、渡島から津軽にかけての津の管理が主任務の

「津司」が朝廷に派遣されて靺鞨国を視察した記録だが、これは明らかに渡島・津軽の蝦夷が朝廷の役人になっていることを示すもので、律令国家の東北経営は確実に前進していたともみられる。靺鞨国とは沿海州の渤海のことと思われるが、先に述べたように肅慎を代名詞としていたツングース系の北方民族の国であり、朝鮮半島の経営に失敗して、唐への連絡を絶たれた形の当時の朝廷が、新たな外国ルートを模索していたことを示す。そういう意味で蝦夷たちは、日本の外交の舞台でも活躍していたのだった。

神亀四年（七二七）、渤海王から派遣された寧遠將軍高仁義ら二四人が蝦夷国との境に着いたところ、高仁義將軍をはじめ一六人が殺害されるという事件があった。残りの八人が難を逃れて出羽に着いたとき、朝廷ではこれらの生存者を厚くもてなし、以後、渤海との交流がより密接となり、ここを通じて中国の唐と日本との関係が保たれたことを考えると、この外交ルートがいかに重要なものであったかがわかる。

坂上田村麻呂 平安時代に入っても、奈良時代に引き続いて蝦夷の反乱が繰り返されたことは既に述べたが、**と安達小佐丸** この時代でクローズアップされるのは、坂上田村麻呂と文室綿麻呂という二人の征夷大將軍による蝦夷征伐である。ことに延暦二十年（八〇一）の坂上田村麻呂の東征は、下北半島にまで及んだとみられ、

伝説的要素は多いものの興味深い足跡を残している。



写真 2-9 坂上田村麻呂

「坂上田村麻呂、東夷を征し、長駆半島に入り徳化をしく、夷民これに服す」と『東北太平記』に記述されている。「長駆半島」は下北半島のことではないかといわれ、脇野沢への来討が広く語り伝えられてきた笹沢魯羊の『下北半島史』によれば、この半島は宇曾利蝦夷の住居したところであり、田村麻呂はこの蝦夷を平定して徳政を施したことになる。

そればかりか、この宇曾利蝦夷の安達小連の女を寵愛し懐妊させている。そして田村麻呂が帰国した後、女は三児を分娩し、將軍を慕って狂死し、その遺体は鯛島に葬られた。

さらにこれには後日譚があり、坂上田村麻呂が薨じて征夷大將軍となった文室綿麻呂が同地を訪れ、田村麻呂の遺児たちを召し出して長男に坂上佐井麻呂の姓名を与えて佐井の木ノ石に住ませ、二人の女兒にもそれぞれ名部子、伊佐子の名を与えたという。そしてこの三児の伯父であるサイユウ夷にも安達小佐丸の姓名を与え、この安達小佐丸は、後に下北半島の長となるのである。

これらのことは、実際の史料に明記されているものではない。文室綿麻呂が征夷大將軍として蝦夷討伐をしたのは、岩手県北部から青森県東南部にかけての閉伊・爾薩体地方であり、下北半島にまで足を伸ばした確証はない。しかし、これが単なる伝説であったとしても、平安時代に入って律令国家の東北経営がさらに北進を続け、服従や離反を繰り返しながらも蝦夷がその支配下に組み込まれていったことは事実であろう。

渡島の蝦夷 渡島の蝦夷については、これまでたびたび述べてきたが、阿倍比羅夫が肅慎との交戦で渡島の蝦夷と元麁の乱 夷を救って以来、この最北の蝦夷たちは長く朝廷と貢納関係を結んできた。しばしば離反を繰り返す津軽や淳代の蝦夷とは異なり、平安朝に入っても変わらずに朝廷と貢納関係が続いていたのである。

宝亀十一年（七八〇）に陸奥の夷俘伊治公皆麻呂が反乱を起こし、その平定に朝廷が苦戦し、根拠地である秋田城が放棄されようとしたときや、貞観十七年（八七五）に渡島の荒狄が反乱を起こし、水軍八〇隻をもって秋田・飽海両郡の百姓二一人を殺し、物を奪った渡島蝦夷の唯一の反乱のときの二度ばかり不穏な動きが見られたが、これも一部の渡島蝦夷の一時的な行動であったとみられる。そして最初は越国の管理下にあった渡島蝦夷は、和銅五年（七一二）以降、越国から分けられた出羽国の国主の管轄下に入り、貢納関係は出羽国府を通じて行わ

れていたようである。

ところが、この出羽国で元慶二年（八七八）、平安時代最大の危機と呼ばれた反乱が起こった。国司の苛政に反抗した夷俘が蜂起して出羽国の主城・秋田城に火がかけられ、国司側は劣勢に陥る。そしてこのとき、これを救ったのが津軽・渡島の蝦夷たちだった。実際には津軽の蝦夷は分裂していて、反乱軍に加勢するものもあり、この戦いを困難なものにしていたらしいが、三〇〇〇人という渡島の蝦夷の奪闘によって勝負が決まったのである。その後、寛平五年（八九三）にも渡島の蝦夷と奥地の俘囚との係争があつたことも伝えられているが、平安時代中期以降、渡島蝦夷の名は歴史から消えて、少なくとも津軽半島部分はすべて津軽蝦夷の中に編入され、北海道は律令国家と隔絶する。下北半島の蝦夷たちがそのどちらに位置したかは明らかでないが、いずれにしても渡島蝦夷が朝廷の東北経営に果たした役割は大きかったといえる。

前九年の役、 一〇世紀から一一世紀にかけては平安京の貴族文化が華やかな時代であり、「この世をばわが後三年の役 世とぞ思ふ望月の欠けたることなし」と歌った藤原道長を中心とする藤原氏の摂関政治の全盛期でもある。しかし、地方では荘園の発達に伴って武士団を擁する豪族の台頭が著しく、陸奥では安倍氏が強大な勢力を持つて国司と争っていた。

この争いは出羽の豪族清原氏の応援を得て、陸奥守源頼義が安倍氏を滅ぼす前九年の役として名高いが、そこには下北半島の蝦夷、渡島蝦夷の助けがあつたものと思われる。笹沢魯羊『宇曾利百話』の中の「蝦夷四題」に「前九年役に宇曾利の蝦夷が官軍に応じて、源頼義、義家父子を援けて阿倍頼時を討取っているが、宇曾利は半嶋の総称にて、其の中堅は矢張り佐井の夷であつたかと思われる」と述べているように、阿倍比羅夫北進の折に津軽の有間浜で饗宴を受けた胆振鉏の蝦夷の奪闘を特定しているのである。討たれた安倍氏も夷俘の長として奥

六郡の支配権を認められていた「東夷の酋長の後裔」であり、前九年の役も蝦夷同士の戦いが大きな比重を占めていたことがわかる。

結果として出羽の豪族清原氏が陸奥・出羽両国で大きな勢力を持つようになり、本拠を陸奥に置いて出羽の奥地外ヶ浜という青森県津軽半島陸奥湾沿岸の地まで支配し、おそらく対岸に位置する北海道の蝦夷とも交流しただろうと思われる。もっともこの清原氏は一族の内紛が生じ、永保三年（一〇八三）からの後三年の役で、平泉に拠点を置く藤原清衡きよひらを助けて介入した陸奥守源義家によって平定され、東北地方は藤原氏の平泉政権に取って代わられる。

東北地方に華麗な平泉文化をもたらした三代一〇〇年に及ぶ奥州藤原氏の政権も、表面的には何の関係もなく、恩恵にも浴さなかつた下北の蝦夷の力が根底にあつたということがいえるかもしれない。

五 古代の下北半島の生活と文化

青森県下の 律令政治の展開に伴って社会の基礎的な産業である農業は、鉄製農具や農業技術の発達により、
古代住生活 飛躍的に進歩し、人々の住居も従来の竪穴住居から平地式の掘立柱の住居が普及し始めたのが奈良時代の初めである。しかし、それは都とその周辺のことであり、関東地方から東北地方南部まで平地式掘立柱住居が現れるようになるのは、平安時代中期以降となる。

従って、青森県など東北北部の地域に新しい住居様式が普及するのは、もっと遅れて平安末期以降、中世に入つてからのことであり、特に古代の下北半島地域は、方形の茅葺き竪穴住居の生活が続けられていた。

青森県下でこの時代の竪穴住居跡が発掘された遺跡は六〇〇か所以上あり、奈良時代のもが三〇か所程度だから、平安時代のもが圧倒的に多い。津軽地方では黒石市の浅瀬石遺跡、南部地方では上北町の松原遺跡などが知られているが、奈良時代には数軒の集落を構成した竪穴式住居跡なのに比べ、平安時代には三〇軒以上、多いものになると六〇軒を超える集落を形成し、増改築しているものもあるから、原始時代から相当に進歩した住生活がうかがえる。

住居は柱にスギ・クリ・アスナロなどの木が使われ、間取りもちゃんと行われていて、壁面に備え付けられた竈からは煙出しの煙道部もある。床は土間のままだが、そこに藁や敷物を敷いて寝食したものと考えられる。そして中には神を祀る祭壇まである住居もあって、想像以上に高度な住居といえる。平安時代に入ってから、住居の外部に環状や半円状の溝を巡らすものもあり、雨や雪解け水の排水用、または風除け、防備用などの役を果たすものと考えられている。

笹沢魯羊と 昭和八年（一九三三）の六月から八月にかけて、現在のむつ市内の竪穴住居を踏査した笹沢魯羊 竪穴住居群 は『字會利百話』の中で、そのおびただしい数を次のように述べている。

「長崎館十三ヶ所、同所より最花に至る二十八ヶ所、最花五ヶ所、同所より田屋平六ヶ所、斗南ヶ丘西端十ヶ所（中略）、目名向山八ヶ所、メクラ沢十一ヶ所、同所の西続き二十一ヶ所、目名新田七ヶ所、同所北寄十ヶ所、鹿橋六ヶ所」。これは同書の竪穴踏査数の注釈に当たる部分だが、本文の中では「田名部に新谷千軒の名があるが、新谷平の竪穴群を唱ったものらしい。阿蘭屋平にも作り、土手内上の長崎館から最花に及ぶ大区域にて、西の一部は妙見堂あるによって妙見平とも呼ばれ、また斗南藩移住の際に市街を開設したによって斗南丘とも呼ばれるが、此の丘陵一带に竪穴百数十ヶ所を見られた」と記されている。

いずれにしても、これらの竪穴住居跡は平安時代以降のものだが、下北半島のむつ市だけでも、まさに無数といえるほどの遺跡が発見されているのである。しかし、これらの竪穴住居跡は、すべて現存するわけではなく、戦後の農地改良や住宅地造成によって消滅してしまったものがあるのが惜しまれる。

むつ市以外の竪穴住居跡についても笹沢魯洋はいくつか触れていて、東通村の目名城址の宇曾利蝦夷館については「空壕を三重に繞らして左を大沢口、右と小沢口と称し、頂上には土塁址を存して、其の内側に竪穴が七ヶ所あり、外側にも南の方に竪穴が一ヶ所あった。疑ふ迄もなく蝦夷館即ちチャシ（要塞）である。高館宋女は宇曾利蝦夷の優れた長の一人であったらふ」と述べている。

また、このころの下北半島の竪穴住居は、宇曾利蝦夷の住居であり、竪穴の屋根は茅草で葺いたものが多かったが、海岸近くではさらに幅広の昆布で二重葺きにしていることなど、興味深い記述もある。

下北半島の 笹沢魯羊や中島全二らによって踏査された下北半島の平安時代の竪穴住居跡は、以後、太平洋戦
竪穴住居跡 争によって中断され、戦後の昭和二十五年（一九五〇）から二十六年にかけて、東通村の稲崎遺跡・ムシリ遺跡・将木館遺跡しやうぎだてなどの発掘調査があり、それからまた一〇年近くの空白の時代が続いた。

その後、昭和三十五年に脇野沢村の岩陰遺跡、昭和四十四年にむつ市の第一田名部小学校校庭、昭和五十五年に東通村のアイヌ野遺跡と銅屋(3)遺跡、昭和五十七年にむつ市の最花南遺跡などの調査から竪穴住居跡や遺物が発見されたが、これらの発掘調査はほかの地域に比べて非常に数少なく、今後に残された研究課題が多いといわなければならない。しかし、これらの数少ない調査からも貴重な古代の下北半島の住生活を垣間見ることができ、東通村の稲崎遺跡は、本州で初めて擦文土器を出土する竪穴住居跡が発見された遺跡として知られ、竈や土壘どぐら柱穴などが発見された。将木館遺跡は、最初「関東地方の竪穴住居と大差がない」といわれたが、その後の調査

で竪穴住居跡二軒、小竪穴遺構三個、掘立柱建物跡、溝状遺構などまで発掘された。アイヌ野遺跡は竪穴住居跡七軒が確認されているが、発掘された一軒の住居跡は床面積が四三・一平方メートルあり、比較的大型なものといわれる。銅屋(3)遺跡は竪穴住居跡三軒と溝状遺構で、住居の一つには、竈からの煙道が壁面を掘り込んで作られているものも発見された。第一田名部小学校校庭遺跡からは竪穴住居跡一軒が部分的に発掘されたほか、土壇や溝状遺構などが発掘され、最花南遺跡からは、約三〇平方メートルの竪穴住居跡がほぼ完全に発掘されている。これらの各竪穴住居跡は、それぞれ古代の下北半島における人々の住まいがどのようなものであったかを想像させてくれるが、さらに、これらの住居跡や各地の遺跡から発見された遺品によって、当時の人々の生活や文化がおぼろげながらもわかってくるのである。

日常の生活 奈良・平安時代に東北地方北部に新しく登場してくる土器は土師器や須恵器である。青森県で発掘された最古の土師器は、青森市の細越館遺跡から出土したものとされ、五世紀ごろのものと考えられている。須恵器の方も各地の遺跡から発見されているが、奈良時代ぐらいまでは県内では生産できず、他地域から移入して使われていたらしい。しかし、この須恵器も一〇世紀中ごろになると県内で生産されるようになり、下北半島や北海道にまで供給されるようになった。五所川原市の前田野目窯跡がそれである。

土師器の方は、奈良時代までは轆轤ろくろを使用しないで生産されていたが、平安時代にはその使用が始まり、把手て付鉢形土器のように青森県独特のものまで作られるようになった。いずれにしても高度な技術を必要とする土器や、耐用度の高い土器が青森県内で生産され使用されるようになったのである。

日常の容器として使用されたものは、これらの坏・碗・壺・甕・高坏などで、米などの蒸器である甑こしきも発見されているから、東北地方北部でも米食が広く行われるようになったと考えられる。県内各地の竪穴住居跡やこ

の時期の遺跡から発見されたこれらの土器は、後に詳しく述べる擦文土器とともに出土する場合が多いが、この時代には北海道から南下してきた北大式土器やオホーツク海沿岸地域から南下してきたオホーツク式土器とも共存したものと思われる。

土器以外の日用品としては、下駄・草履・草鞋などの履き物類、発火具の火鑽白、糸巻用具の防錘車、工具の斧・山刀・鑿・錐・鋸などもあり、下北地方ではまだ未発見というものの、木製の鋏や鉄製の鋏・鋤などの農具も発見されている。食糧としては、米・アワ・ヒエ・麦・豆などが農作物として収穫され、クリ・トチ・麻などの実なども食用として確保されていたことがわかる。

擦文土器の 地域的特色 擦文土器は九、一〇世紀ごろになってから青森県から北海道にわたって広がる特色ある土器である。この土器は、北海道で縄文文化の後に栄えた続縄文文化の時代に主として使われた続縄文土器が終わるころ、大和政権の北進とともに北上してきた土師器の影響を受けて成立した土器とされている。

青森県内で擦文土器が出土する遺跡は五〇か所以上を数えることができるが、北海道では竪穴住居跡から擦文土器が主体的に発見されるのに対し、青森県内では主体は土師器であり、擦文土器は少量付随する形で出土している。焼成前に木片などの工具によって土器の表面を整形する際にできる擦文を地文として、これにさまざまな幾何学的文様を施した擦文土器は、分布する地域にも偏りがあつて、津軽・下北半島・青森市などの陸奥湾沿いの地域と津軽地方の岩木川流域に多く、その他はきわめて少ない。

そういうところからみて、北海道との交流が深く、縄文時代以来の狩猟・漁労を主な生業としながらも、アワ・ヒエ・麦・豆・米などの農耕も行った人々に使われた土器ということがいえるであろう。そしてこれは系譜的に見て、北海道の近世アイヌ文化の祖形的内容を持つともいわれている。

下北半島以外の青森県の擦文土器を出土する遺跡には、青森市の三内遺跡・築木館遺跡つきのだて、蓬田村の大館遺跡・小館遺跡、碓ヶ関村の古館遺跡などが知られているが、その中には稲粃痕の付いたものや炭火米が出土していて、稲作が行われていたことが考えられる。また岩木川流域の石上神社遺跡から発掘された土師器には、北海道の擦文土器によく似た刻印が押されているものが多く、土師器と擦文土器との深い類似性を象徴している。

下北半島の 擦文土器群 下北半島にも擦文土器を出土する遺跡は数多くある。先にも述べたように、青森県内の奈良・平安時代の各遺跡から出土する土器は、土師器が主体であり、擦文土器は少数でしかないが、堅穴住居跡や貝塚などから発掘された擦文土器は、古代の下北半島の生活をわずかながらでも解明してくれる。

時代的に早いものとしては、東通村の赤平遺跡、わが大間町の大間貝塚などから出土した擦文土器が挙げられる。いずれも断片的な資料だが、大間貝塚の第一次調査で発掘された稲荷神社境内では、第IV層が土師器・擦文土器の包含層であることが確認され、第二次調査の福蔵寺境内の発掘では、マダイ・カサゴの魚骨やアシカ・イルカの骨の包含層の上部から擦文土器が出土した。弥生式土器のところでも触れたが、この辺りは漁労のための季節的集落であり、当時の人々の生活の場所は大間平地域にあったと考えられているというものの、擦文文化は大間崎の先端部にまで広がっていたのである。

平安時代に入ってから堅穴住居跡や遺跡からは、さらに擦文土器の出土が多くなる。先に挙げた下北半島の堅穴住居跡で擦文土器の出土がなかったのは、むつ市の最花南遺跡と銅屋(3)遺跡ぐらいなもので、本州で初めて擦文土器が出土したことで知られる東通村の稲崎遺跡をはじめ、将棋館遺跡、第一田名部小学校校庭遺跡などの堅穴住居跡からは、いずれも少量ながら擦文土器が発掘されている。

このほか、下北半島で擦文土器が出土した遺跡には、東通村の大平D地点、川内町の上野平遺跡、脇野沢村の

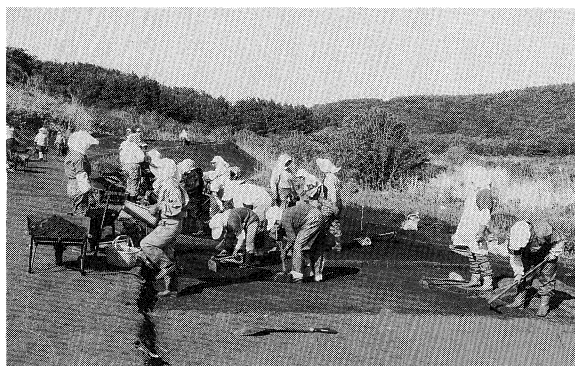


写真 2-10 小奥戸(2)遺跡発掘風景

桂沢遺跡・九艘泊遺跡くそくまりなどが挙げられるが、下北半島の擦文土器について語る上で欠かすことのできないのは、わが大間町の割石遺跡・小奥戸(2)遺跡である。初期の擦文土器を少量出土した大間貝塚より、割石遺跡の方がずっと詳しい研究資料があるので述べてみよう。

割石遺跡の 大間町の割石遺跡は、擦文土器をはじめ、土師器・須恵器を出土する烏間遺跡の南に位置し、大間崎の先端部に近い低位の海岸段丘に堅穴のような形態で存在したとみられる。

戦後の開拓時期にはこの周辺は畑地として使われていたが、やがて荒地として放置され、さらに近年は観光開発が進められたため、遺跡が消滅するのではないかとという恐れも出てきた。出土する遺物のうち、学術上重要なものは、いうまでもなく擦文土器であり、第一類から第五類までの五つに分類されている。明確な綾杉文あやすぎの刻文土器はなく、主体は多條沈線なまめうしと斜格子文なまめうしを頸部から胴部へ施文した土器群で、これらの土器群は下北半島の擦文土器群の中でも古い型式のものともみられる。

擦文土器については、土師器が擦文式土器に変化したとする考え方や、土師器の影響より、北海道の続縄文文化の影響とみる考え方などがあるが、いずれにしても擦文式土器は須恵器を含まない土師器の時代には発生しなかったようであり、須恵器を伴う時代に入ってから擦文式土器が初めて出現するようになったとみられている。

この割石遺跡の擦文土器についてはさまざまな研究発表があり、最初に紹介したのは江坂輝弥氏で、その後、渡辺誠氏が『考古学雑誌』に「下北半島割石遺跡の擦文土器について」を発表した。そして近年、橘善光氏が『うそり』の第二七号に「中島全一蒐集遺物集成(八)」に割石遺跡の土師器・擦文土器片を詳しく紹介し、擦文土器に関する編年の研究が大きく前進することになる。そして割石遺跡の擦文土器は、擦文前期から後期前半に位置する土器群と考えられ、ほかの下北半島の各遺跡から出土する擦文土器とともに貴重な資料として注目を集めている。

製塩土器と 北海道から青森県にかけて擦文土器文化が広がっていた時期は、製塩も盛んに行われ、各地に製**各種鉄製品** 塩土器が出土している。製塩活動そのものは縄文時代の昔から行われ、津軽半島の今津遺跡では縄文時代晩期に製塩土器による製塩が盛んであった。下北半島でも、その時代の製塩土器と思われるものが採集がされているが、明確に製塩が活発に行われるようになったのは平安時代からだと考えられる。

下北半島の製塩遺跡としては川内町の上野平遺跡、佐井村の原田遺跡、東通村の大平D遺跡、脇野沢村の瀬野遺跡、むつ市の下田遺跡、松原遺跡などが知られ、ほとんどが陸奥湾に面しているが、平館海峡や津軽海峡に面する遺跡もあり、詳しく数え上げていったら、平安時代の製塩遺跡は下北半島だけでも相当な数に達するだろう。製塩土器は海水を煮詰めて塩の結晶を作り出すために使用されることはもちろんだが、作られた塩は食用であると同時に収穫した魚類や獣肉の保存用に用いられ、古代人の生活の知恵がうかがわれる。

製塩土器とともにこの時代で注目されるのは、各種の鉄製品である。青森県で鉄器が広く使用されるようになったのは、一〇世紀後半からとみられ、西津軽郡鰯ヶ沢町の空沢遺跡もくろさわでは、製鉄炉跡三四基、鍛冶場跡三基が発見されて大きな注目を集めた。また碓ヶ関村の古館遺跡では、内耳鉄鍋などの各種鉄製品が多量に発見されている。

このほか青森県内の製鉄遺跡は、岩木山麓の大平野遺跡・大館森遺跡などが知られているが、下北半島でもむつ市の高梨遺跡や大畑町の二枚橋遺跡などで発見されている。ただしこの両製鉄遺跡は、未調査のため時代確認がされていない。浜砂鉄を産出する津軽海峽側の地域では、このような製鉄遺跡が発見されていないが、下北地方にも古代の製鉄所があっても不思議でないだけに、今後の調査が待たれる。

墨書土器と 平安京を中心とする華やかな貴族文化やその周辺の生活と比べれば、東北地方北部の人々の生活の向上は、竪穴住居に狩猟・漁労を中心とする原始的なものであったとしても、縄文・弥生時代とは比較にならないほど向上した。その一つに文字の使用が挙げられる。

近年、青森県各地での平安時代の遺跡調査が活発になるにつれて、各遺跡からの文字史料が増加し、主として当時の素焼きの土師器や須恵器の外面に筆墨や篋状の道具で書かれた墨書土器とか篋書土器と呼ばれるものが発見されるようになってきた。墨書土器は、土師器を焼き上げた後に筆墨で書かれ、篋書土器は須恵器を焼く前に篋状の道具で書いたものである。文字の書かれたこれらの土器は、竪穴住居跡や窯跡などから発見されるものが多く、明らかにその当時のその地域の人によって書かれ、作られたものとみている。

書かれた文字は、「寺」「大」「万」「古」「神」「井」などの一文字が圧倒的に多いが、二字・三字のものもあり、「大仏」「坏一口」などといったものも見える。その書が何を意味するかは不明だが、いずれにしても、本州の最北端に位置する青森県にも中央の文字文化が押し寄せてきたのである。これらの墨書土器や篋書土器は、弘前市の小友遺跡、平賀町の鳥海山遺跡、碓ヶ関村の古館遺跡などから発見され、さらに須恵器による硯なども出土しているが、大間町でも篋書土器（須恵器）が出土している。

文字のほかには、これまで土器ばかりだった生活用品に、木器・曲物まがもの・陶磁器といったものまで使用が始まっ

たと考えられ、須恵器窯による工人集団の存在や大規模な製鉄所の存在などとともに、青森県での産業の発達も人々の生活をさらに向上させたに違いない。このようにして本州最北端の地も、平安時代から鎌倉時代へと向かい、やがて中世を迎えるのである。

第三節 中世の大間

一 宇曾利郷の誕生

『陸奥話記』の 中世と呼ばれる時代区分は普通、源頼朝が平家を滅ぼし、征夷大將軍となつて鎌倉幕府を開き、地名・宇曾利 いた建久三年（一一九二）から天正三年（一五七三）の足利幕府滅亡のころまでを指す。そしてそれは、下北半島がようやく異民族の住む異境としてではなく、さまざまな史料の中に登場する時期でもある。青森県全域が「延喜式」が成立した延長五年（九二七）の段階でも、まだ郡郷制に編入されず、陸奥国という大きな単位でくくられ、津軽を除いては内国化が最も遅れた地域であったことは、これまでしばしば述べてきたが、その最北端に位置する下北半島がさらに歴史の表舞台に登場しなかったのは、当然のことであろう。しかし、下北半島一円を意味する「宇曾利」という地名が初めて文献に登場したのは、『陸奥話記』の中で、前九年の役の天喜五年（一〇五七）の戦いを記した部分である。

天喜五年秋九月。進国解以上誅伐時頼之状。傳。臣使金為時毛野興重等甘説奥地俘囚。令興官軍。於是鉞屋仁土呂志宇曾利合三都夷人安倍富忠為首發兵。將從為時。而頼時聞其計。自往陳利害。衆不過二千人。富忠設伏兵擊之嶮岨。大戰二日。頼時為流矢所中。還鳥海柵死。但余党未服。

これは第二節でも触れた宇曾利の蝦夷らが官軍に応じて源頼義・義家父子を助けて安倍頼時を討ち取った折の記述だから、このころは既に下北半島一帯が宇曾利と呼ばれていたことがわかる。しかし、それでもなお平安時代に下北半島が制度としての郡郷制に組み入れられ、糠部郡宇曾利郷として認められていたかは、はなはだ疑問しいといわなければならぬ。

「郷」ではなく この『陸奥話記』の記述をよく眺めてみればわかるように、「於是鉋屋仁土呂志宇曾利合三都郷」との記述 夷人」は「ここにおいて鉋屋、仁土呂志、宇曾利、三都の夷人を合わせ」であり、鉋屋（現花巻市金谷）、仁土呂志（現二戸市似鳥）、宇曾利（下北一帯）の三都（部・郡）であって三郷ではない。おそらく、この文脈でいう宇曾利は、郡郷制に編入された宇曾利郷ではなく、大きく区分けされた「宇曾利の地方」とでもいった呼び方だったのだろう。

確かに宇曾利という地名は、笹沢魯羊も指摘したように「下北半島の総称」であり、この時期よりもっと古く、貞観四年（八六二）に慈覚大師による宇曾利山開基の伝説の時代から呼ばれていたものかもしれないが、文献に初登場のこの宇曾利は、その延長上のものであり、正式の宇曾利郷ではないと考えた方がいいようである。

もっとも笹沢魯羊は『下北半島史』で、はっきりと年代を挙げてはいないが「往古この半嶋は、糠部郡宇曾利郷と呼ばれて宇曾利蝦夷の住居した処である」と規定し、『陸奥話記』からの引用も「鉋屋、仁土呂志、宇曾利合三郷夷人」としているが、これは郡郷制にとらわれない一つの解釈であつたらう。そして笹沢魯羊はこれに続けて「郡名糠部は蝦夷語のヌツ・ケ・ヌブに出づるが如く、ヌツは川が一樣の深さで流れてゐるの意、ケは所又は傍又は岸の意、ヌブは野原又は平原の意であるから、おそらくは今日の馬淵川流域一帯の地形に即した郡名であつたらう。宇曾利の郷名も亦蝦夷語のウソロ、湾又は入江の意に由るもので、オシヨロ（忍路）、ウスリ（烏

蘇里)なども同一意義のものである」と記述している。

つまり、宇曾利が郡郷制による宇曾利郷であるかないかはともかくとして、下北地方は古くから、先進地域の
和人から宇曾利の郷と呼ばれて交流していた一つの地域であったことは、ほぼ間違いないと思われる。

安藤宗季讓状 このようにして歴史に登場してきた下北地方は、中世に入ってから、わずかながらでも「ぬ
新渡戸文書」かのぶうそりのかう(糠部宇曾利郷)」として文献に記録されるようになってくる。正中二
年(一二二五)の安藤宗季讓状「新渡戸文書」には、宇曾利郷内の地名まで記述される貴重な文献である。

ゆつりわたす、つかるはなわのこほり、けんかし天しりひきのかう、かたのへんのかう、ならひにゑその
きた、ぬかのふうそりのかう、なかはまのみまき、みなといけのちとう、御たいくわんしきの事。みまきの
ところは宗季せんれいにまかせて、きたをいたすへきよう、御くたしふみを給はるものなり。しかるをしそ
くいぬほうし、一したるによて、御くたしふみをあいそゑて、ゑいたいこれをゆつりあたふるところなり。
宗季いかなる事もあらんときは、このゆつりしやうにまかせて、ちきようすへきなり。たたし、うそりのか
うのうち、たや、堂なふ、あんとのうらをは、によしとらこせんへ、いちこゆつりしやうをあたふところ
なり。よて、ゆつりしやう、くたんのことし。宗季(花押)

これは、文治五年(一一八九)、源頼朝の藤原泰衡征討に先鋒として軍功を挙げた南部三郎光行に加賜された
糠部の郡領を任せられていた地頭安藤宗季から嗣子の犬法師(師季)に与えた文書であり、「糠部宇曾利郷など
の所領地を如何なるときは、この讓状に任せて知行しなさい。ただし宇曾利郷のうち、田屋・堂(田)名部・安
渡の浦は、女子虎御前に一期(代)だけ与えなさい」という内容のものである。

南部一族と安藤一族については後の下北半島支配の変遷についての部分で詳述するが、ここで重要なのは、傍

点を付した部分の宇曾利郷内の地名の明確な表記であろう。田屋・田名部・安渡の浦が歴史の上に刻まれた最初であり、これまで宇曾利蝦夷が居住する地という異郷のイメージから、次第にその姿を明らかにするのである。

諏訪大明神画詞、安藤宗季讓状「新渡戸文書」と同じような意味で嘉暦三年（一二三二）の「諏訪大明神画詞」

熊野那智山願書

も宇曾利郷内の地名を表すとみられる記述があり、これもこの時代には、ようやく糠部郡宇曾利郷という郡御制が確立していたとみていい興味深い内容である。

日ノモト、唐子、渡島ノ三種各三百三十三ノ島ニ群居セリト、一島ハ渡島ニ混ス。其内ニ宇曾利鶴子別ト前堂宇満伊犬ト云小島トモアリ。

つまり、新しく宇曾利鶴子別という地名が文献に登場するわけであり、これが「宇曾利鶴子別」という一つの地名なのか、「宇曾利」と「鶴子別」とを別々のものとするかという問題があるにしても、既に鎌倉幕府の末期に近いこの時期に、内国化が最も遅れていた糠部郡も鎌倉幕府の統一的な地頭制が広く浸透し、下北半島地域も当時の行政区画がかなりはつきりとした形になっていたのであることは推定できよう。

これより時代はずっと下るが、応仁元年（一四六七）に、先に安藤宗季讓渡状で登場した宗季の嗣子安藤師季の「熊野那智山願書」にも、この地名が出てくる。

熊野那智山願之事、右意趣者、奥州下国弓矢仁意本意、如本津軽外浜・宇楚利・鶴子遍地悉安堵仕候者、

重而突進可申処実也、怨敵退散、武運長久、息災延命、子孫繁盛、殿中安穩、心中所願皆令満足、奉祈申所之願書之状如件。安東下野守師季（花押）

これは熊野那智山に安泰を祈願した文書だが、宗季から与えられた讓状からも諏訪大明神画詞からも一五〇年ほどの時間が経過しているものの、宇楚利・鶴子遍地の地名が記されていることは、郡御制が継続していたこと

を実証する史料といえる。

半島北部は 以上のような『陸奥話記』をはじめ「安藤宗季讓状」（新渡戸文書）や「諏訪大明神画詞」「熊野
伝承の世界 那智山願書」に見られる「宇曾（楚）利」と、その郷内地名「田屋」「田（堂）名部」「安渡の浦」
 「鶴子別」「鶴子遍地」によって、「糠部郡宇曾利郷」は誕生し、中世の歴史の中で内国化が進められるようになったことがわかる。

しかし、宇曾利郷が下北半島一円を指す名称ではあっても、現在の大間町が位置する最北端までがすっかり鎌倉幕府の支配下に治められていたということにはならない。田屋（現東通村）や田名部周辺には、古代国家の支配体制だった郡郷制が及んでいたにしても、津軽海峡沿いの半島北部は、この時代、依然として国家の支配体制に組み入れられることなく、その土地その土地に生活する部族集団の漁労・狩猟・採集・耕作などが続けられていたとみられる。そして、たまたま鎌倉幕府やその支配下の豪族との交流があったとしても、むしろ目の前に位置する北海道との接触の方が圧倒的に多かったろう。

そういう意味で、下北半島は宇曾利郷として歴史の中に登場したというものの、半島北部は、まだまだ古代と同じく伝承の世界の土地であった。ただ大間町の隣村である佐井村は、前節で述べた通り、阿倍比羅夫の北征の折の「胆振鉏いづりさの蝦夷」から登場し、奈良朝時代に全国の地名を仮名二字に統一したところから「鉏さ」が地名となり、それが「佐井」となったともいわれるが、確証があるわけではない。いづれにしても、半島北部の地名については文献に登場することもなく、前節でも述べた通り笹沢魯羊が『陸奥話記』の中で「宇曾利の夷」というのは、下北の夷を総称したのであるが、その中堅をなしたものは、やはり佐井の蝦夷であったと思われる」という記述も、その論拠は明らかではない。下北半島北部の地名が文献に登場するようになるのは、もっと後のことで

ある。

佐井の地名と 佐井の地名についての伝承には『大奥村誌』の沿革概要でも触れられていて、前節でも述べた

大間の起こり 坂上田村麻呂と安達小佐丸の故事を記述している。また、成田竹一訓導が『自力更生の原理』の中で「大間沿革史」を執筆し、やはり同じエピソードを紹介している。

「弘仁年中夷民亦夕判シ將軍文屋綿鷹征討使トシテ半島ニ至ル夷酋サイユフ將軍ノ危急ヲ救ヒ賊酋ヲ誅シテ夷民ヲ撫シ將軍田村鷹將軍ノ遺児アルヲ聞キ召見シテ男ヲ坂上佐井丸ト名ケ北部ノ惣司トナシ女ヲ、サイユウニ妻ハシ安達小佐丸ト名ケ以テ其功ニ報ユ後チ数年夷民佐井丸ヲ襲弑スルニ及ヒ小佐丸具夷酋ヲ擒ニシテ嚴刑ニ処シ佐井丸ニ代リテ半島ヲ管理セリ隣村今ノ佐井村ニ佐井丸ノ居館アリシト云フ蓋シ村名ノ因リテ起リシ所以ナランカ」と『大奥村誌』は述べ、「大間沿革誌」もさらにこの部分を詳述し、その後「小佐丸は北部の長となつて恩威を併せ施し、その子も亦土民の教化に心を用ひ、貞觀年中、時の大智圓仁和尙（慈覚大師）に請ふて、宇曾利山の靈山を開いた」と『大奥村誌』と同様、恐山の開山にまで触れている。

ところが大間については両方とも「往古ノ事績邈焉攷フベカラザルハ独リ吾カ大奥村ノミニテアラサルヘシ」（『大奥村誌』）、「本村は何時頃起つたかは、伝いにも記録にもないので判然としないが、處々から石器、土器等が発掘され、又アイヌの居館とい伝へられている四十八館等のあることから、本村には我等の先祖が当地に来、田畑を耕作し、部落を構成した以前に先住民族即ち、アイヌ族が当地に住み、威を振つたことが想像できる」（『大間沿革史』）と、はっきりしない。

大間の地名が明確になるのは、一五世紀後半になってからであり、それは後のなまき蛸崎の乱で詳述するが、いづれにしても、鎌倉幕府滅亡の時期までは、宇曾利郷と郷内の地名はいくつか文献に出現しても、北部はまだまだ伝

承の世界の中の下北半島だったのである。

二 鎌倉時代の下北半島支配

藤原氏から これまで初めて歴史に登場する下北半島を宇曾利郷と郷内の地名にこだわって、文献と伝承の両
南部氏へ 面から眺めてきたが、中世の時代背景と下北半島への影響、支配力の変遷をたどってみよう。

大治元年（一一二六）、藤原清衡は中尊寺を平泉に建立し、奥州藤原氏は全盛時代を迎える。これと同時に道
路標識である卒塔婆そとばを白河関以東、外ヶ浜まで設置し、その支配は津軽・宇曾利にまで及んできた。嘉応年間
（一一六九〜七〇）には宇曾利郷の田屋に阿弥陀堂を建立し、一体の阿弥陀座像を奉納したのは鎮守府將軍とな
る前後の藤原秀衡である。しかし、それから二〇年後の文治五年（一一八九）、源頼朝は弟義経をかくまったこ
とを口実に藤原氏を滅ぼし、そのときの戦功によって南部光行に糠部五郡を下賜する。つまり下北半島の支配権
は、これ以後、藤原氏から南部氏へと変わったのである。

糠部の範囲は、現在のようなはつきりとした行政区画があったわけではなく、人々が居住する地域を中心に莫
然と線引きされていたものであり、笹沢魯羊の『下北半島史』によれば「糠部の郡領は馬淵川流域一円の地にて、
南は一戸から北は外ヶ浜に達する広漠たる地域であった」というから、非常につかみどころがない。大ざっぱに
岩手県北部から津軽を除く青森県全域ぐらいに考えておけばいいだろう。

いずれにしても、甲斐南部荘（山梨県）に本拠を置く武將がこの広漠たる地を所領したことは確かだが、それ
以後の下北半島の歴史は明らかではない。南部三郎光行は建久二年（一一九一）、糠部に入国したとの伝承はあ

るが、「多くは旧領甲斐南部荘に住して、糠部には一族を留めて土民を治めたと見える」（『下北半嶋史』）ということになる。

大河次郎兼任 南部三郎光行の糠部入国が史実として明らかでないにしても、源頼朝が鎌倉幕府を開き、また**最後の抵抗** 未開の地だった東北北部を完全に掌握するため、いわゆる鎌倉御家人と呼ばれる配下を続々と送り込んできたことは、紛れもない事実である。文治五年（一一八九）七月、二八万余の大軍で平泉を攻めた奥州合戦の幕明けから、北海道をめざして敗走した藤原泰衡の最期までのわずか二か月足らずの間に、頼朝は辺境の東北地方全体を支配する構想を、はっきりと固めていたに違いない。

頼朝は合戦が終わるとすぐに葛西清重を現地に残し、代官として陸奥国の統治を命じたし、津軽には出羽鎮定に功績のあった宇佐美平次実政を惣地頭として派遣している。また津軽の平賀郡岩循の地頭代として曾我時広を送り込んだともいわれ、海運上の要衝である津軽は、特に重要視されていたようである。しかし、荘園などの管理や租税徴収を行う御家人をいかに配備しても、そう簡単に東北地方全体が従うはずはない。奥州合戦が終わって間もなく鎌倉に反旗をひるがえしたのは藤原泰衡の郎従で、現在の秋田県八郎潟の東部に本拠を置く大河次郎兼任であった。

この大河次郎兼任の乱と呼ばれる戦いは、頼朝や鎌倉御家人の支配を不満とする北奥の武士たちの支援もあったためか、鎌倉側の軍勢をしばしば圧倒する勢いで進んだが、建久二年（一一九〇）二月、ようやく態勢を立て直した鎌倉勢に敗れて、兼任軍は北へ逃げ延びる。最後は「多宇未井とうまい」の地で残党も滅ぼされ、兼任ただ一人が生き延びたが、これも一か月後に義経ゆかりの栗原寺（宮城県）で非業の最期を遂げる。

この敗走経路には、さまざまの説があり、「多宇未井」は青森市浅虫に近い善知鳥岬とされているが、下北半

島、さらには北海道の松前までの動きを想定している伝承もある。いずれにしても北海道の蝦夷も住む、当時としては最も中央の政治力が行き届かなかった地域への敗走であり、鎌倉側からいえば進軍だったのである。

鎌倉御家人と 大河次郎兼任の乱は鎌倉幕府を大きく脅かしたが、結果として日本史上初めて、東北地方のは

地頭制の浸透 とんど全域を統一国家の枠の中に組み込むことになる。その抵抗が大きかっただけに、そして

これまで鎌倉側が踏み込まなかった地域を敗走したために、鎌倉軍は未知の部分で踏破したのである。

軍事的な征服のあとに続くのが、踏破した地域への統治であり、源頼朝は奥州惣地頭職権を獲得して東北地方全体を支配し、知行するまでになった。もちろん頼朝自身が出向いて統治するわけではない。奥羽合戦の直後にも増して、鎌倉御家人は東北の地に送り込まれ、その支配を展開することになる。普通、一つの地域を征服した場合、その土地の有力な豪族に統治を任せるといふ形を取るが、東北地方にはそれほど力のある豪族は数少なく、鎌倉から派遣される有力御家人、あるいはその一族による支配が進められる。

もともと鎌倉幕府の成立には、それまでの国司や荘園領主に對抗して所領の支配権を強化・拡大しようとする諸国武士団の新体制をめざす動きが原動力としてあったし、鎌倉幕府成立後は、各地方には守護と地頭が置かれるようになった。守護は治安の維持と警察権の行使に当たり、戦時には国内の武士を統率する東国出身の有力武士であり、地頭は全国の荘園と公領に置かれ、年貢の徴収や現地の管理に当たる御家人である。そして守護は御家人を支配する位置にあったが、東北地方には守護が置かれなかったこともあって、地頭は自由に開発を進め勢力を拡大し、諸国の守護に匹敵する力を持つようになっていった。実質的には、その地域の国司の役人をも支配し、地方行政官としての権力も持っていたわけである。

鎌倉幕府の東北支配は、守護抜き地頭制の浸透によって統一国家の中に組み込んでいく形を取っていったわ

けだが、このことは、その後の糠部郡宇曾利郷、つまり下北半島の支配にも大きな影響を与えた。

安東一族の さて、源頼朝に文治五年（一一八九）、糠部一円の支配をゆだねられた南部三郎光行による下北
下北支配へ 半島の統治は、その後どうなったのだろう。先に述べたように、一度光行自身が糠部入国したとの伝承もあるし、一族を置いて支配したとの推定もあるが、はっきりとした史料は今のところない。そして建久二年（一二〇二）、工藤大和守が下北の地頭となり、地域の開発を行つたらしいが、宇曾利の蝦夷たちの反発を買って、しばしば紛争を起こしたという説もある。

いずれにしても南部三郎光行とその一族による下北支配は、一〇年余りで有名無実の状態となり、地頭として派遣されてきた工藤一族に取って代わられたらしい。この工藤大和守という人物についても、はっきりとしたことは何もわからず、源頼朝から岩手県の盛岡地方の宰領を許された工藤一族の者かと推測されているだけである。そしてその支配は、下北の蝦夷たちの不満を招き、成功しなかったものとみられる。

しかし、その十数年後の承久元年（一二一九）に泉親衡と名乗る者が宇曾利郷に入り、安東一族を唱えて下北半島の統治に乗り出した。泉親衡はその後名も国親と改め、安東国親と称して、以後一〇〇年にわたる下北支配の基礎を築くが、この人物は鎌倉で謀反むぼんを企て、それが発覚しそうになったため、船で下北半島に逃げてきたといわれる怪しげなところがあった。正式に地頭に任命されたわけでもないのに、下北支配に乗り出せたのは不思議といわなければならないが、それだけ先に下北を支配していた南部氏・工藤氏の基礎が弱かったことと、当時、圧倒的に力のあった津軽地方の水軍安東氏の名が、大きな影響を与えていたに違いない。

津軽の安東氏は津軽内陸の藤崎に拠点を置き、岩木川の水運によって十三湊としまなとを基地にして、津軽・下北西半島に広がり、北海道や京都を結ぶ交易を独占する立場にあり、貞応元年（一二二二）ごろから鎌倉幕府によって

蝦夷代官に任じられていたといわれる蝦夷の系譜に連なるほかには類例のない特異な豪族である。

順法寺城と 下北半島を一〇〇年にわたって支配した安東氏と津軽の水軍安東氏との関係がどのようなもので

十三湊新城 あつたのかはつまびらかでないが、いずれにしても泉親衡改め安東国親からその子盛親に至って

その支配力はさらに強まり、宝治三年（一二四九）には、盛親が現在のむつ市城ヶ沢に順法寺城を築いている。

しかしその末路は、謀反人の初代国親の経歴にふさわしく、五代元親のとき、家臣の新井常安に滅ぼされるといふ形を取る。こうした安東一族の下北支配の伝承は、『東北太平記』の中で次のように記されている。

承元二年（一二〇八）秋九月、泉小次郎親衡逃れ来て寛瀾大勇を顕し、衆民らを叩き伏、自地頭と成て安東太郎国親と潜名し、北州桂呂王に娘を娶り、一男一女を設く。一子は安東又太郎盛親と号し、盛親の子を弾正太郎安武、安武が子を太郎左衛門長親といふ。其男二郎太郎元親代、家臣新井八郎常安といふもの元親を射殺し自立して地頭となる。

このようにして、鎌倉時代までの下北支配は、北部の長・安達小佐丸に始まって、南部一族へ、そして工藤一族、安東一族、新井常安へとめまぐるしい変遷を繰り返していくわけだが、南部氏以外はほとんど史料のない伝承の世界の物語にしかすぎない。城ヶ沢の順法寺城築城の権勢だけが、北部の主といわれた安東一族の栄光をしのぼせるだけである。

一方、津軽の安東氏も栄光から衰退への歴史を迎えなければならなかった。鎌倉幕府が全国を掌握し、奥州一円は鎌倉御家人の手によって分割統治されるようになってからも、津軽や南部の北端の地は漁労を主とする蝦夷によって占拠されていたといってもよく、実際には、安東氏によって他地域とは違う「東夷の酋長」としての支配が行われていた。その水軍の勢いや交易による独占については既に述べたが、安東氏の全盛時代は下北の安東氏と同

様、一〇〇年余り続いていたのである。正和年間（一二三二―一六）、十三湊に築かれた新城はその栄光の象徴ともいえるが、元亨元年（一三二一）からの内乱により、その勢力は次第に衰退していく。しかし、その当時、安東氏が宇曾利郷の代官職にあったことは確実で、先に紹介した安藤宗季がその子に代官職を譲る「新渡戸文書」に見られる通りである。

文永の役と 弘安の役 このような下北支配の変遷の中で、初の全国制覇を成し遂げた鎌倉幕府は、大きな時代の試練に出合っていた。創始者の源頼朝は、征夷大將軍となつて七年後には既に没し、頼家、実朝と続く將軍も実質なく、北条執権の時代となつたとき、二度にわたつて外敵の侵入を経験するのである。いうまでもなく文永十一年（一二七四）の文永の役と、弘安四年（一二八一）の弘安の役がそれであり、二度とも大暴風雨によつて救われたというものの、幕府は財政的に大きな打撃を受けることになる。

この蒙古襲来は、西国警戒体制の必要から西日本各地に幕府勢力を強化する方向に力を注ぐことになるが、東北方北部にもわずかながら郷土史料を残すことになった。その一つは永仁五年（一二九七）の五戸郷の検注であり、財政に苦しんだ幕府の徳政令の実施を裏付けるものである。またもう一つは、嘉元四年（一二三〇六）に、現在の弘前市にある長勝寺の古鐘が完成した事実である。「嘉元の鐘」と名付けられたこの鐘は、時の執権・北条貞時をはじめ、安倍季盛、源光氏など、この地方の豪族が寄進したものであり、鐘銘には「皇帝万歳 重臣千秋 風調雨順 国泰民安」と記され、「嘉元四年八月十五日」と刻まれている。このころ凶作が相次ぎ、悪疫が流行したために、豊作と息災を祈願したものといわれるが、ここにも財政難にあえぎ、苦境に立っている鎌倉幕府の表情がうかがえる。

しかし、二度にわたる蒙古の来襲によつて朝廷から全国の荘園・公領内の非御家人武士を動員する権利を獲得

した幕府の中で、北条氏の家督を継ぐ得宗家の勢力が強力となり、旧来の鎌倉御家人と得宗家の家臣である御内人との対立はあったものの、次第に得宗家の専制体制が強まるようになる。青森県の平賀・田舎・山辺・鼻和・西浜・外浜・糠部などの各郡も、最終的には北条得宗領となって、次の南北朝・室町の時代を迎えるのである。

三 南北朝・室町時代の下北

鎌倉幕府滅亡 中世という時代を鎌倉幕府の始まりから室町幕府の滅亡までに一括せず、鎌倉時代と南北朝・と建武の新政 室町時代とに分けて、その背景を眺めながら下北半島全体、そして大間町の歴史に焦点を当てていく形にしたのには、はつきりとした意図がある。つまり、鎌倉時代には、それまで明確でなかった青森県北部や宇曾利郷と呼ばれた地域が史実として、次第に明らかにされてきたとはいえるものの、まだ伝承を中心とする世界の物語でしかなかった。特にわが郷土・大間町に関しては、その地名さえ明らかでない時代である。

しかし、鎌倉幕府滅亡後の南北朝時代から室町時代にかけて、その姿はわずかながらではあっても、史実の上に見れてくる。ようやく本格的に郷土大間町の姿を見据えていく時代になったということだろうか。もちろん史料が豊富にあるわけではない。少ない資料と伝承とをつなぎながら、下北半島全体と大間町の草創期を推測するしかないが、日本全体、東北地方全体、青森県全体の時代背景を頭に入れながら、概観していこう。

さて、蒙古の来襲以後、衰退し始めた北条執権の鎌倉幕府は、それでもかかつてなかったほど全国的にその勢力を広げていたが、承久の乱後、幕府に実権を奪われていた朝廷や得宗家の専制政治に不満を持つ御家人の反発は、次第に大きな力になっていった。こうした中で即位した後醍醐天皇は、親政を復活して、天皇中心の公家政治を

理想とし、意欲的な政策を推し進めるとともに、たびたび討幕の計画を練る。最初のうちは、それらは未然に発覚し、幕府は天皇を隠岐に流すなど制圧することができたが、皇子護良親王もりなごや楠木正成まさむねが兵を挙げ、北条氏に反発する御家人も蜂起して全国的な内乱に突入し、幕軍の将・足利尊氏の裏切りによって、鎌倉幕府は滅亡する。そして後醍醐天皇は京都へ戻り、天皇親政を実現するのである。

北一八郡の国代 元弘三年（一二三三）の執権北条高時らの自害によって終止符を打った鎌倉幕府を攻めた軍
南部又次郎師行 勢は、中央でこそ足利尊氏・新田義貞が主役となるが、東北地方のその後を考えると南部時長・師行・政長の三兄弟がその中心としてクローズアップされる。

もちろん足利尊氏は、鎮守府將軍に任じられ、北条泰家の領地だった岩手県北部から青森県東部の糠部郡一帯と青森市から津軽半島の東海岸一帯の外浜の地頭職を与えられているが、すぐに後醍醐天皇との対立によって、その地位は微妙になってくる。後醍醐天皇も足利尊氏も奥州と出羽という東北の広大な地域を重視していたから、東北北部を足利尊氏が押さえたら、後醍醐天皇はすぐさま北畠顕家を陸奥守に任じ、これを牽制する動きに出る。そして、この北畠顕家が多賀城に入り、南部師行が北一八郡の国代として根城を築くという構図を基に、この時代の下北半島的情勢は大きく揺れ動くのである。

南部氏の北一八郡の国代というのは、陸奥国の最北に位置する糠部郡だけではなく、現在の秋田県の鹿角・仙北、岩手県の久慈・閉伊などの各郡、そして津軽地方までを含む広大な範囲を占める代官職である。北畠顕家を国司とする南部師行の代官というこの体制は、弟政長の活躍もあって、以後、南部氏の北奥制覇へと結び付いていく。かつて源頼朝から糠部一円を任せられた南部三郎光行の糠部入国は伝承の世界だが、今回は明確な史実である。

南部光行の下北支配は明らかでなく、工藤一族から安東一族へと下北支配が変遷してきたことは既に述べた。しかし、たとえ南部光行の糠部入府が伝承であつたとしても、早くからこの北辺の地に南部氏の所領があつたことは事実らしい。南部師行・政長兄弟はそれを拠点に、再び下北支配を確実なものとしたのだつた。

根城の興隆と 南部師行は建武元年（一三三四）、糠部郡に赴任すると、青森県八戸市にあつた工藤三郎の居
南部氏の支配 館に入つて、激動の中世を生き抜いた北奥の名城・根城の築城を始める。この根城は陸奥守北畠顕家が「奥州を支配する根本の城」という意味で名付けたといわれているが、正式には八戸城であつたらしい。しかし、いずれにしてもこの城を南部氏が根本拠点として奥州一円を制覇していったことは確かである。

そのころの奥州は、まさに激動の時代であり、複雑な勢力が入り乱れていた。鎌倉時代を通じてすべて北条得宗領となつていた青森県では、それを支える曾我一族をはじめとする豪族たち、そして蝦夷管領安東一族の強大な勢力がそれである。鎌倉幕府が滅亡してからは、足利尊氏がいち早く旧北条泰家の領地を押さえ、その勢力を北辺に置き、すぐさま北畠顕家が陸奥守となつて南部師行に国代に任じ、郡奉行と軍事警察権を持つ郡検断の両権限を振るわせるという新旧入り乱れた勢力の渦巻きがそこにあつた。そして、その一つ一つを南部師行は弟の政長とともにクリアしていき、ついには北奥の全制覇という形にまで整えていくのである。

まず南部師行が手がけたのは根城の築城だが、その前に糠部の人々が崇敬する神仏に対して土地や屋敷を寄進し、領民に大きな気配りをしている。これも南部氏が古くからこの地に所領を持ったことの証明になるが、領民の支持があつたからこそ、それからの南部氏の活動が比較的容易に進められたのだともいえよう。北条氏の残党をことあるごとに制圧し、ときには安東一族と協調して勢いを広げ、建武の新政（のちの義良親王）―北畠顕家―南部師行・政長の路線は、不動のものになっていく。そして建武二年（一三三五）に南部氏が支配する範囲は、糠部郡

を中心とした青森県全域、秋田県北部、岩手県の遠野にまで及んだのだった。

南北朝から 建武の新政は陸奥国にも大きな変革をもたらしたが、わずか三年足らずの短期間で崩壊する。公室町幕府へ 武諸勢力の要求を満たすことができず、新領土の獲得を期待する武士たちの不満からくる混乱は、北条氏残党の反発、それを討伐した足利尊氏の朝廷への反旗によって最高潮に達する。

もちろん朝廷側も黙ってはいない。京都を占領した足利尊氏を北畠顕家が討伐に向かい、足利軍を九州にまで敗走させ、鎮守府大將軍となつて凱旋するが、足利尊氏は反撃に転じて、摂津湊川で楠木正成らの朝廷軍を破り、すぐに京都を奪い返す。後醍醐天皇は吉野に逃れて皇位の正統を主張したが、足利尊氏は光明天皇を立て、ここに京都の北朝、吉野の南朝の両朝廷が相争うことになる。これ以後が南北朝時代と呼ばれる時期であり、総じて北朝が優勢な状況にあったが、足利尊氏による室町幕府の体制が確立したとは、とてもいえない。

建武式目を定めて暦応元年（一三三八）に征夷大將軍となり、幕府政治を再興した足利尊氏だが、弟の直義との内紛によって幕府は内部分裂を起こし、やがて直義の死によって尊氏の主導権が確立するとはいうものの、足利一門を中心とした守護領国制に基づく幕府体制が確立するのは、三代將軍義満の時代であり、明徳三年（一三九二）の南北朝合体が実現してからである。

以後、守護の領国支配の上に築かれた室町幕府は、強力となった各地の守護大名との紛争と妥協によって均衡を保ちながら維持されていくが、繰り返される戦乱の中で、農民たちの自衛的な組織による武装蜂起である土一揆が頻発するようになり、幕府の権威は低下する。そして幕府体制の中で最重要視されていた管領家の畠山・斯波両家の相続争いをきっかけに、応仁元年（一四六七）、下剋上の社会を大きく助長する応仁の大乱に発展し、やがて群雄割拠する戦国時代へ突入、室町幕府の終焉を迎えるのである。そして、それは好むと好まざるとにか

かわらず、日本の中世の終わりであり、近世への幕明けでもあった。

足利尊氏勢と 南部勢の抗争 このような社会背景の中で陸奥国の糠部郡を中心とした南部一族は、どのような動きを示して

南部師行・政長兄弟は天皇側の北畠顕家に従って、びくともしない北奥の守りを果たしている。

北畠顕家が足利尊氏討伐のために上洛し、これを九州に敗走させた折、南部師行は多賀国府に入って奥羽全体の治安維持に当たったし、政長は根城に残って北奥を治めるばかりか嫡子を北畠顕家軍に従わせて奮戦させるといふ、天皇側にとって大きな力となった。この時点までは、南朝側の鉄壁ともいえる布陣である。しかし再び足利尊氏が京都を奪回し、京都に北朝政権を押し立ててからは、その形勢は逆転した。

吉野に逃れた後醍醐天皇から京都奪回の命が出たとき、南部師行は糠部の軍勢を率いて北畠顕家軍に参加して奮戦するが、和泉国で足利方の大軍に攻められ、奥州軍は全滅、南部師行は北畠顕家とともに戦死する。

根城で留守役だった南部政長・信政らも足利勢の會我光高らに攻められて落城寸前にまで追い込まれている。しかし、奥州を支配する根本の城といわれた根城は落ちなかった。南北朝騒乱の中で、刻々と北朝側が優勢となっていく形を象徴しているが、根城は南朝側の拠点として、かろうじて残されたのである。

南北両朝の合体が実現して室町幕府の支配が確立するようになると、ようやく根城南部八代政光が現在の盛岡の三戸城を拠点とする一族・三戸南部守行の^{あつせん}斡旋によって足利幕府に従うことになるが、それは南部氏の本拠地だった甲斐国の領地をすべて手離す犠牲を払わなければならなかった。しかし、このことによって、名実ともに糠部郡を本拠とする南部氏が誕生するのである。

宇曾利郷の どのような建武の新政から南北朝時代、そして室町幕府へと流れ移る陸奥国の動乱の中で、下北支配の変遷 半島の本州最北部は、どのような状況にあったのだろうか。これまでの糠部郡の慌ただしい動き

は、南部氏が本拠とした根城がある八戸市以南が主な舞台であり、この時代でも宇曾利郷は、華やかな歴史の表面に現れていないかのように見える。しかし、この下北半島にも、確実に時代の波は押し寄せていた。

これまで述べてきた下北半島の情勢は、地元を受け入れられなかった地頭・工藤一族に代わって、安東一族を名乗る国親を初代として約一〇〇年にわたる宇曾利郷統治を行ってきたが、五代元親に至って家臣の新井常安に滅ばされたところまでである。安東一族が行った下北支配も、宇曾利郷を横領するという形だったが、それをまた家臣が横領するという略奪の歴史がここにある。それが南部師行の糠部入部により、また新たな下北半島支配の構図が生まれる。いずれも確証のない伝承の色濃いものだが、そのすべてを史実に関係ないものとして笑い捨てることができない重みがある。

そういう意味で安東一族から横領統治をしていた新井常安に対して、南部師行が随将の武田修理と赤星五郎を派遣してこれを葬り、蛸崎と田名部にそれぞれを置いて下北半島統治を始めたことも、それなりにうなずけるし、南北朝の騒乱、南北朝の合一を経て、正平二年（一三四七）から一〇〇年余り、宇曾利郷には南朝の護良親王の子孫が住み、「北部王家」と呼ばれて下北半島一帯を支配したという伝承も、『東北太平記』などによる物語の世界だけではない現実味を帯びてくる。

源頼朝に糠部一円をゆだねられた南部三郎光行から工藤一族、安東一族、新井常安と続いた下北支配は、再び南部氏に受け継がれ、それは、南部氏が従う陸奥国府の最高権威の血統に移り変わったのである。

五代続いた 護良親王の遺児・八幡丸を北部王の初代として下北半島に奉戴したのは、八戸南部六代信政で北部王の系譜 あった。既に興国六年（一三四五）に、信政は下北の領土を割いて順法寺城を築き、八幡丸、後の良尹王^{ながた}を迎える用意を整え、正平三年（一三四八）には吉野へ伺候し、後村上天皇にその許可を受けている。そしてその翌年、八幡丸を平館から九艘泊に移して順法寺城入りを果たし、ここに良尹王を初代とする北部王家はスタートした。

笹沢魯羊は下北半島の呼び方について「鎌倉時代までは宇曾利郷、吉野朝時代より室町時代にかけて北部^{きたの}、江戸―寛永のころになって北郡^{きたのこが}と称した」と『田名部町誌』で述べているが、北部王の呼び名は、まさに当時の下北半島を統治する者にふさわしいものだったといえる。

初代良尹王は大塔山阿吡寺^{あひじ}を建立したり、順法寺城を修築したりして、北部王家の基礎づくりに励むが、正平二十四年（一三六九）に三七歳の若さで薨去^{こうきょ}し、その子尹義王^{いたよし}が二代目を継ぐ。この二代目は、建徳二年（一三七一）良尹王の墓の近くの大湊に親王山常念寺を建立し、初代の冥福を祈るが、これも二四歳の若さで薨じ城ヶ沢に葬られた。そして三代目を継いだのが義祥王^{よしむね}である。この三代目は尹義王の子ではない。南朝の後村上天皇崩御の後に即位した長慶天皇の末弟・宗尹王^{むねた}が新田義宗とともに越後で戦い、敗走して海上から下北半島の福浦に漂着し、北部王初代良尹王が保護したその人が、義祥王と改名して三代目を継いだのである。

二代尹義王は死の直後に子が生まれるという境遇であり、事実上後継者がいなかった事情もあるが、北部王第三代は、その直系ではない。四代目になって二代尹義王の子義邦王が継ぐことになり、四六歳まで下北を支配するが、その子義純王^{よしずみ}が第五代を継いで三〇年後に異変が起こった。家臣武田藏人による義純王謀殺である。

このことについては後節の蛸崎の乱で詳述するが、一〇〇年余り続いた北部王家による下北半島支配は、五代

義純王で事実上崩壊する。再び三代目の義祥王が第六代に復帰する時期もあるが、ここはひとまず、この北部王五代にわたる下北統治の間の南部氏と津軽の覇者・安東氏の動きを追ってみよう。

南部氏の興亡 南部信政が良尹王を北部王に奉戴したのが正平二年（一三四七）であり、五代義純王が家臣武と安東氏滅亡 田蔵人に謀殺されたのが文安五年（一四四八）である。この一世紀の間の社会背景は、既に述べた通り、足利尊氏が征夷大將軍となった直後の南北朝時代から南北朝の合一、室町幕府の安定期を経て、土一揆の頻発による幕府の權威の失墜、そして応仁の大乱へ至るまでの激動の時代であった。

そして、当時の東北北部で南朝方についていた南部氏が足利軍の勢いに押され、その守備範囲を縮小しながらも、なお根城を本拠とし、足利側に属していた三戸南部の支援によって、かろうじて厳しい状況をくぐり抜けていたことも既に述べた。しかし南部氏は、その間もその後も独自の勢力を伸ばし続けているのである。

確かに足利側の曾我氏に攻められ根城落城寸前までいったことは事実だが、その後、曾我氏を滅ぼして津軽制圧への足掛かりとしたし、三戸南部の仲介で足利幕府に従うようになってからは、祖先伝来の甲斐の所領を全部放棄して八戸へ移住したというものの、北朝方の安東氏との抗争を後々まで繰り返す。そして永享十一年（一四三九）には南部義政は鎌倉に出陣し、管領足利持氏討伐の功により、従五位下に叙せられるという活躍を見ている。つまり、さまざまの興亡があつたにせよ、ますます根城南部は北奥にその健在ぶりを示していたのである。

一方、安東氏はどうだったろうか。当時十三湊を拠点とする日本海交易による繁栄を欲しいままにしていた安東氏は、常に南部氏より優位にあるように見えた。応永三十年（一四二三）には、安東陸奥守は幕府へ馬二〇頭、鳥五〇〇〇羽、鸞眼二〇〇匹、海虎皮三〇枚、昆布五〇〇把を献上するという威勢を見せているし、永享八年（一四三六）には、若狭羽賀寺を再建するという大事業も成し遂げている。しかし、それは財力の面であって、

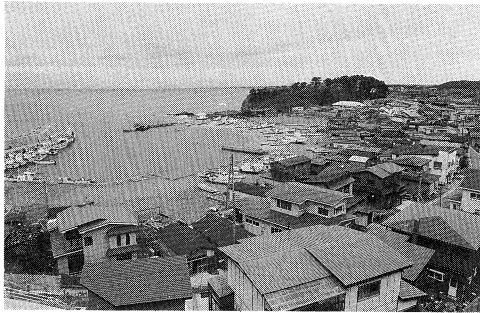


写真2-11 材木集落

たびたび繰り返された南部氏との抗争では、大体が南部氏に圧倒されていた。そして嘉吉二年（一四四二）、十三新城は南部氏によって落城し、津軽安東氏の滅亡へと結び付いていくのである。この間、南部氏は師行から数えて政長―信政―信光―政光―長経―光経―長安―守清―政経と根城城主一〇代を数え、安東氏の方は、宇曾利卿の代官職にあった宗季から数えたと師季―法季―家季―盛季―康季と、その系譜は不明確というものの六代を数えている。

北部王の統治と大間町周辺 北部王家の下北半島支配の時代の東北地方北部や下北半島の情勢は、かなり明確になってきたが、わが郷土・大間町のその時代はまだまだ伝承だけの手探りの世界である。この北部王家統

治が終わってすぐに起こる蛸崎の乱によって、初めて大間・奥戸などの地名が史実に現れるようになるが、それは次節に譲って、ここでは大間町の中で最も古い材木地域の伝承に触れるだけにとどめよう。

下北半島の中で古くから知られるところといえば、脇野沢村の鬼沢、むつ市の大平、東通村の砂子又などが挙げられるが、大間町の材木は、その中でも一二に数えられるほどの古い地名である。大間町制施行四〇周年に作成された『大間町沿革史年表』によれば、

集落集成からいえば、材木集落が最古で、ついで奥戸集落、比較的新しく大間集落が形成されたものと考証される。嵯峨天皇の貞観元年（八五九）、時の征夷大將軍坂上田村麻呂の遺児佐井丸が半島を管理していた当時、えぞの来襲にそなえて津鼻崎に柵として用いたのが「材木」の始ま

りであるといわれる。

とあり、古代にさかのぼる伝承と地名の由来について言及している。

この坂上佐井丸の故事については、これまでたびたび述べてきたが、佐井丸が下北の長として構えた館は『東北太平記』では、

館の楼に登れば、万里の海雲に松前をはるかに眺め……。

とあり、材木の古名・木の石集落に館を建てて北部の総司となった佐井丸の伝承と一致する。実際には材木のどの辺りかははっきりしないが、海岸沿いの赤岩付近、材木集落と隣村佐井村原田集落との中央山の手にある八森山辺りが館のあった場所ではないかと推測されている。そして北部王家が下北統治をしていた時期、既にこの材木地区は大間町のどの地区にも先駆けて、集落形成がなされていたものと思われる。

四 蛸崎の乱と大間町の始まり

武田藏人と 前節で述べたように、北部王家による下北統治は、家臣武田藏人による第五代義純王の謀殺によって終止符が打たれる。このように書くと、いかにも武田藏人が謀反の極悪人のように見えるが、義純王の方にも一端の責任があり、それが康正三年（一四五七）に下北全域を巻き込む戦乱となった、俗に「蛸崎の乱」と呼ばれるもののプロローグであった。

五代義純王は、父の義邦王が南北朝の合一後も足利幕府に下らず、初代良尹王時代からの悲願である南朝の回復に努力していたにもかかわらず、その遺志を継がず、逆に足利氏との親交を結ぶ行動に出る。わざわざ上洛し

て將軍足利義持に接見したともいわれ、応永三十四年（一四二七）、義持の養女を迎えて正室にするという姻戚関係まで結んでしまった。父の義邦王が、四年前に成功はしなかったが南朝のために義兵を挙げるといふ志から見れば、大きな裏切りでもある。そればかりか、新しく館を築いて花御殿と称して奢り、政治もなおざりにするような北部王であった。

家臣の武田藏人は、この義純王に気に入られ、義純王の妹を娶り、名前も純の一字を与えられて信純と名乗ったばかりか蛸崎一帯の地を与えられたのである。そして、才幹武略ともに優れる武田信純は、次第に義純王をしのぐ勢力になっていった。この寵臣が何故、主を謀殺するに至ったのかわからないが、野心以外に無力な主への義憤のようなものがあったとも考えられる。文安五年（一四四八）に義純王が蛸崎巡視の折、舟遊びと称して海上に誘った武田藏人は、義純王を溺死させ、南朝長慶天皇の弟で第三代北部王となった宗尹王を再び第六代北部王に復帰させた。そのとき宗尹王は八八歳の高齢だったというから、単なる飾り物としての意味しかなかったとしても、どこか南朝への思いがしのばれる武田藏人の行動である。

錦帯城築城

武田藏人は義純王から蛸崎一帯の土地を与えられてから拠点の錦帯城を築き始めるが、宝徳三年と蛸崎藏人（一四五二）ごろにそれは完成する。義純王謀殺から三年後だが、このときから蛸崎藏人と名乗り、

錦帯城主として実質的な北部王家の実権を握ったといってもいいだろう。そしてその勢力は次第に大きくなり、八戸の根城南部氏を脅かすまでになっていった。

事実、蛸崎藏人は着々と軍備を整え、南部氏への対抗姿勢を強めていった節がある。その理由として、南朝の回復を図るといふ大義名分を設けていたが、享徳二年（一四五三）に、遠く蒙古や韃靼、はてはロシアから軍馬数百頭を田名部に輸入しているし、武器を安倍五郎重任から譲渡してもらったりしている。そしてどうやら南部

氏への對抗姿勢は、南部氏に滅ぼされた津軽安東との連携プレーもあったようだ。そのころ安東太郎政季は田名部を知行していたし、安東義季は華・奥法二部を治め、藤崎白鳥館を築いて蛸崎藏人との交流もある。さらに康正元年（一四五五）には、蛸崎家臣峰の坊がロシアの要人とともに現在の易国間である湯沢浦に帰国し、軍馬数百頭を輸入している。

このように軍備強化をして八年という歳月の間には、実際に南部氏討伐のために挙兵したこともあった。これは未然に失敗するが、安東義季は津軽奪回を図って大浦郷狼ノ倉高館に拠り南部氏と戦い、敗れて、その子政季は宇曾利に配流されて後、北海道へ逃れている。そしてついに康正二年（一四五六）、蛸崎藏人は勅使三位宰相光康を順法寺城に監禁し、上使築田大膳亮規宗を殺害するという挙に出る。

ここに至って挑発され続けた根城南部十三代政経も黙ってはいられなくなった。蛸崎藏人の暴逆を朝廷に上奏し、勅命を受けると大軍を率いて八戸の湊から討伐に乗り出す。これが蛸崎戦争の始まりである。

悪戦苦闘の 南部政経を総大将とする蛸崎討伐軍は、中津川七郎右衛門が作成した軍用地図に従って、まず大

南部政経軍 畑に上陸し、蛸崎藏人のいる錦帯城の背後に出て、その拠点を突くという計画であった。しかし、運悪く暴風雨に遭い、目的地の大畑には上陸できず、最初から苦戦を予測させるスタートとなった。

一般に蛸崎の乱は、海路から奥戸の浦に上陸した南部軍が奥戸貴太夫の道案内によって、佐井越えに川内町の蛸崎に出て、背後から錦帯城を一気に攻略したと理解されているようだが、そんな簡単な戦いではなかったようである。確かに蛸崎軍は、南部軍が思いもかけない裏側の山から押し寄せてきたため、大きく混乱したらしいが、八年の歳月をかけ、異国からも軍兵を輸入して備えていただけに、立ち直って反撃に出るのも早かった。軍馬やホテレス火薬などの武器もそろえられている蛸崎軍の前に、南部軍の方が劣勢となり、敗色濃厚の場面もしばし

ばあったという。

蛸崎軍の兵たちも勇猛で、南部軍の総大将政経をねらって襲いかかり、政経を守る南部方の側近の武将一八人をはじめとして、主な武将の四一人を討ち死にさせたのだから、その勢いは推して知るべしである。そのため、政経自身も指揮を執るだけではなく、直接、敵兵と刃を交えなければならなかった。そして、最も危なかったのは、この戦争で初めて使われたという槍を持った木の石城主弾正純範らに取り囲まれたときである。

この場面は、南部方の小姓西沢兵馬が石を次々と投げて窮地を救い、政経自らが初めて見る長槍の敵を三日月と号する名剣で討ち取るが、すんでのところだったというのが『東北太平記』の記述である。南部政経の奮戦ぶりを誇張しているとはいっても、討伐軍の悪戦苦闘ぶりもうかがえる。

奥戸貴太夫と 一時は南部軍を打ち破るかに見えた蛸崎軍も、やはり北奥の歴戦の王者である根城南部氏の力
蛸崎軍の敗北 の前には屈しなければならなかった。しかし、南部方の勝利はいかに『東北太平記』で英雄的に語り伝えられようとも、南部軍だけの力によるものではなく、蛸崎軍内部の裏切りが大きい。

早い話が、討伐軍を奥戸から案内し、佐井越えの攻略を実現させた奥戸貴太夫は古くから蛸崎藏人に仕える重臣であるばかりではなく、その妻は蛸崎城下の船間屋金屋四郎兵衛の娘であり、奥戸貴太夫に嫁する前は、城主蛸崎藏人の妾だった。つまり奥戸貴太夫は、城主から妻をもらい下げていたのである。普通なら、このような関係にある重臣が離反するわけではないのだが、先にも述べた勅使の監禁、上使の殺害を蛸崎藏人がするのに及んで、憂い驚き、南部軍の動きを知って、南部方につくことを決意していた。妻子を隣接する佐井村の孫八郎に預け、南部方に密書を送るほどの慎重な準備を重ねての蛸崎藏人攻略が既に戦う前から進められていたのだった。

また、蛸崎城下にあった奥戸貴太夫の妻の父に当たる船間屋金屋四郎兵衛も、南部方のために重要な働きをし

ている。蛸崎の乱は長期化し、後に下北半島全域にわたって展開されるようになるが、金屋四郎兵衛は、食糧をはじめとする一切の戦時必需品を南部方に献じて、さまざまな便宜を図り、蛸崎軍には支援しなかったのである。もちろん蛸崎軍より南部軍の方が有利と判断したからだろうが、この奥戸貴太夫と金屋四郎兵衛の協力がなければ、北辺の地理にも詳しくない南部軍は、進退窮まったかもしれない。

結果的に蛸崎の乱は南部軍の大勝利となって、不落を誇った錦帯城は落城するが、蛸崎藏人は抜け穴から逃れ、船で北海道に渡り、後にその地の豪族となって松前氏を名乗り、明治維新までその地を支配している。

大間の起こり 蛸崎の乱は下北半島を戦乱の渦に巻き込んだが、そのおかげで、それまで明確でなかった郷土と奥戸の発展 大間町の中世の姿がわずかながら浮かび上がってきた。鎌倉時代までは、大間という地名はどの文献にも見いだすことができなかつたが、康正三年（一四五七）になって初めて表れるのである。

それは蛸崎藏人の家臣・兵糧奉行中津川七郎右衛門の作成になる下北軍用地図に記されているものであり、その大間に北州突呂賢とろけけんの兵が三七〇〇人配置されたことが書き込まれている。このことから紛れもなく大間は、現在から五〇〇年以上前に一集落を形成していたことがわかる。そして蛸崎の乱が起るまでは、大間は蛸崎藏人の弟であり、蛇浦城主だった蛸崎主税信久の所轄であった。つまり大間はまだ独立した一つの村ではなく、現在の風間浦村蛇浦の中の一地域としてあったのだと思われる。

三方を海に囲まれているとはいえず、そのころの大間は湊としての機能を持っていなかった。木造帆船が中心だったころの海運は、蛇浦・奥戸浦・佐井湊などのような小さな港こそ必要なのであって、大間のような潮の流れの早い危険な岬を中心とする大型港は、役に立たなかつたのである。だから、当時の大間は、野馬の放牧場であるとともに、軍事的な拠点として扱われるしかなかつたのだろう。

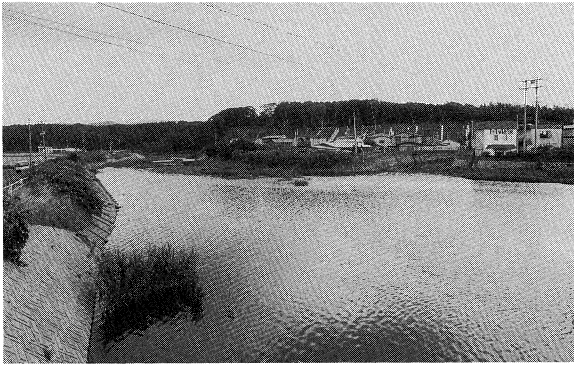


写真 2-12 奥戸川と小川代川の河口付近

一方、奥戸は、大間に比べてはるかに早くから開けた海路の重要な拠点として発展を続けていた。ここは北海道松前に最も近い北辺の地であり、当時の海運向きの良港があるばかりか、ここからは蛸崎蔵人の拠点錦帯城に通じる間道があり、軍用道路として厳しい冬季にも通路が閉ざされることはなかったといわれる。

奥戸も蛸崎の乱によって初めて脚光を浴びるようになったが、それよりもっと以前の南北朝時代の延元年間（二三三六〜四〇）に、既に肥後菊池家の一族の者が奥戸に来ていたことを『大奥村誌』は記している。

延元年中一族ノ奥戸ニ来ルアリ後チ大平ニ移リ新谷氏ト称セリ今猶奥戸ニ菊池氏ヲ唱フルモノアルハ其ノ遺族ニアラザルナキカ徴スルニ由ナキヲ憾ム。

このように蛸崎の乱以前にも奥戸は下北半島の要衝の地であったし、大間が馬の放牧地であった時代から、海路・陸路ともさまざまに機能する歴史を持った地域であった。

大間と奥戸の地名の由来 大間町材木の地名の由来については先に触れたので、**地名の由来考** ここでは大間と奥戸の地名について考えてみよう。

町制施行四〇周年の『大間町沿革史年表』では、両者とも次のように解説している。

奥戸はアイヌ語のオ・ウコツ・ペツで、オは川尻、ウコツは交わる、ペツは所という意味で、大川目と小川代の両川が海岸線の近くで合流したところ、すなわち奥戸（オコツベ）であるという。大間

は大間川の川尻に開けた町で、大間もまたアイヌ語であり、オオは深い、マは澗で、川尻にある深い船澗（港）の意である。

大間については、成田竹一の「大間沿革史」も同じような解釈をしているが、ここではアイヌ語としない。名称の起こりを考えてみるに、間は澗の意にして船の泊る所、或は港の意なり（言海に依る）。大間とは大きな港の意なりと思はれる。即ち当港は西海岸と約二百米離る所に横磯（暗礁なり）ありて、風波を防ぎ、自然の防波堤をなし、船の碇泊に便を与えている故、誰がいふともなく、大きな港、即ち大間といったのであらう。

このように、意味は同じでも地名をアイヌ語とするかしないかに議論が集中するが、どうやらアイヌ語・蝦夷語とする説が圧倒的に多い感じがする。橘南鶏の『東遊記』でも、「ヲコペ、ヲフマ、シリヤ、シツカリ、シシパシ、オイツペなどは皆えぞ詞なり」と述べられていて、最初に挙げた『大間町沿革史年表』と全く同じ解釈となっている。しかし、これとは逆に、下北半島に残る地名のほとんどはアイヌとは関係が薄いという説もあって、大間は古くは「大澗」と記録に残されていて、大きな漁溜まりの澗のことだから、あえてアイヌ語とする必要はなく、奥戸にしても、「おくのへ」がオコツペになまったものとして、アイヌ語ではないとする説もある。

蛸崎の乱後 蛸崎の乱は下北半島全域に及ぶ大戦乱であっただけに、大間や奥戸だけでなく、これまで秘密の下北半島 ベールに包まれていた下北各地の表情を、その乱後も明らかにしていく。そして終戦処理が進むにつれて、もはや下北半島は異民族の住む別天地ではなく、日本の歴史の中にしっかり定着したのだった。

例えば蛸崎の乱平定後、下北半島の各村の名前とその論功行賞ともいべき各村の庄官名を挙げた記録があるが、現北通りの地名は北郷内分一一か村に分類され、ほとんど現在の地名と同じものが記されている。

- 一、二道関改め南北関根（庄官菊池六兵衛）
 - 二、妾塚改め正津川（庄官山名相模改め山波左馬丞）
 - 三、波多郷改め大畑（庄官舟越九八郎）船仲立、長谷十兵衛、近藤嘉内
 - 四、湯本改め下風呂（庄官湯川吉右衛門）
 - 五、湯沢野改め異国間（現異国間）異国船仲立谷坂栄蔵、倭船仲立檜川四郎兵衛、北守周二郎
 - 六、蛇沼改め蛇浦（庄官釘拔要人改め九役要右衛門）
 - 七、蛇浦打出し別村大間（庄官朝異人北主左衛門改め浅井応右衛門）
 - 八、奥戸（庄官奥左衛門次郎）
 - 九、佐井（庄官井野平蔵、鹿浦源兵衛）
 - 十、鬼門崎改め内滝（現牛滝）（庄官盛山新五郎）船仲立小関伝右衛門
 - 十一、破鬼生改め気延（現木野部）
- 以上拾苞カ村金山十二カ所、銀山九カ所、鉄山十カ所、白銅山四カ所
- 以上総支配頭弥山御代官佐井孫八郎
- 大奉行波多因幡事 大畑順左衛門
- この記録から見ると、今、北通り地区と呼ばれる地域で、奥戸と佐井以外は、ほとんど蛸崎の乱以降に改められた村名であることがわかり、この戦乱がいかに下北半島の歴史を大きく塗り変えたかが理解できる。
- 蛇浦から別村 また、この記録によって明らかになったことは、大間村が蛇浦から打ち出されて別村となったことである。先にも述べたように、蛇浦は蛸崎蔵人の弟蛸崎主税信久が統治していた地域だが、

蛸崎の乱後になってその北東部が独立したわけである。

そして、ここで注目しなければならないのは、大間村の庄官に「朝異人北主左衛門改め浅井応右衛門」という人が任命されていることである。浅井応右衛門という人について詳しく知る史料はないが、紛れもなく朝異人、すなわち朝鮮半島から渡ってきた人であることが想像できる。蛸崎の乱では蛸崎蔵人軍で活躍した材木の木の石城主・木の石弾正純範も大元の人だったというから、材木・奥戸・大間・易国間などには、古くから外来人が多く渡来していたということも推定できる。もともと大間に隣接する易国間は異国間であり、文字通り異国との交易港であったことを考えると、正規の交易以外にも、大間崎一帯は他国からの漂着者も多かったに違いない。

このことについて、森勇男氏は『下北半島の歴史と芸能』の中で次のように述べている。

本州最北端の地であり、文化、経済をはじめ、人的分野からも、下北半島はいわゆる「ふきだまり」の地であるといわれる。下北はアイヌの地とばかり決めつけるのは、江戸時代の風潮であり、もともと複雑な構成と歴史を持っているのが下北半島の実態であろうと私はみている。

このように下北半島、特に北通り地域を眺めると、蛸崎の乱後、初めて蛇浦から分かれて別村となった大間村が、朝異人である浅井応右衛門を庄官として、ようやく歴史の上に登場してきた経緯がおぼろげながらも理解できるのではないだろうか。

論功行賞にない もう一つ、この蛸崎の乱後の北郷内一か村の論功行賞の記録で注目されるのは、この中に**奥戸貴太夫の名** 蛸崎の乱で最も功績があったかに思えた奥戸貴太夫の名が見当たらないことである。もちろん、もう一人、蛸崎城下にあつて奥戸貴太夫を支援し、南部討伐軍のために働いた金屋四郎兵衛の名もないが、これは北通り地区ではなく、もっと中枢部で大きな恩賞にあずかっていたに違いない。

しかし、奥戸貴太夫が奥戸村において庄官とならなかつたのは何故だろうか。『東北太平記』が記述する南部軍に対する協力は個人的ではなく、村を挙げて応援するという盛大なものであった。

今日しも奥戸貴太夫が妻子及び村中の女三百余人、狐沢長根の北平というところに大釜多数をすえ、兵糧を焚出し、丸飯となし、魚は骨をぬきかわきを止めんと、生姜しょうがのすり味噌をぬりてあぶりものとし、新しい布に包みて壱人前宛引渡し、多くの荷桶に濁酒、水等を入れて所々に置きければ、官兵に飢渴する者なく、大いに働けり、これ十分見事なる手続なり。

というわけである。しかし単に南部軍を歓待しただけではない。奥戸から錦帯城へつながる間道を案内し、佐井越えの攻略という蛸崎軍を大いにあわてさせた軍功も大きかった。もし南部軍が予定通り大畑に上陸し、正面から錦帯城を攻撃していたら、それに照準を合わせていた蛸崎軍の新兵器にひとたまりもなく敗れたであろうとさえいわれるほどだから、むしろ奥戸貴太夫の取った策は、蛸崎の乱の決定的勝因だったといえるかもしれない。

また、錦帯城攻めの最中にも、順法寺城からの援軍を阻むため、勇猛の桐右角鬼平を奥戸庄二右衛門という一族の者に案内させて差し向けたのも奥戸貴太夫である。これほどの戦功がある奥戸貴太夫とその一族の名が論功行賞にないのは、どのように考えても不思議といわなければならぬ。奥戸の庄官となつたのは奥左衛門次郎だが、この人が奥戸貴太夫の一族なのかどうかもわからず、奥戸という地名は残っていても、奥戸姓を名乗る子孫がこの地方にいないこともまた不思議である。

田名部三〇〇〇 このように蛸崎の乱は、これまでよく知られていなかった下北半島の北通り地域を次第に**石加封と義祥王** 明らかにしていったが、この戦乱の主役は、何といっても、第十三代根城城主南部政経であったことには変わりがない。「明德三年（一三九三）春、陸奥糠部郡八戸に移り、父祖の志を継ぎ南朝に仕え、

南北講和なる後にまで足利氏に降ると肯ぜず、悉く甲斐の旧領を足利に納れて陸奥に退く」と『糠部五郡小史』に記されている南部氏が、時代の流れとはいえ「南朝再建」を旗印に掲げる蛸崎藏人を討伐するという皮肉な結果になるわけだが、このことによって、下北半島における以後の統治支配の基盤を築くことになった。

蛸崎の乱平定によって、南部政経が受けた恩賞は田名部三〇〇〇石の加封であり、それは下北全体の領主であることの象徴でもある。南部氏の下北支配は源頼朝に糠部郡を加賜された南部光行以来のことだから、あらためて下北半島の領主というのも奇妙な感じだが、このときから名実ともに南部氏の完全な下北統治が始まったといっている。

一方、南部氏が護良親王の遺児八幡丸を奉戴し、北部王初代良尹王として下北統治をゆだねたことは既に述べたが、その三代と六代の義祥王のその後はどうなったのだろうか。蛸崎藏人はこの義祥王を担いで南朝再建を旗印としたのだから、南部氏にとっては蛸崎藏人を討つことは、非常に複雑なものがあつたに違いない。しかし、蛸崎藏人の本拠は錦帯城であり、義祥王は田名部「女館」を村松御所と称して居住していたことが幸いであつた。戦いが終わってから義祥王は、南部政経に迎えられて、今は長者山と呼ばれている八戸の桜山に移り、九四歳までの長寿を全うしたという。

護良親王直系の北部王四人はいずれも短命だったが、長慶天皇の末弟に当たり、数奇の運命をたどつた宗尹王改め義祥王は、このようにして運命の不思議な糸に操られながらも南部氏の厚遇を受け続けたのである。

天文学的数字

南部氏に敗れた蛸崎側の財宝を少しのぞいてみよう。北部王第五代義純王に目をかけられ、その蛸崎側財宝の妹を娶り、次第に義純王をしのぐ勢力を持つようになった蛸崎藏人の財力は、『東北太平記』の物語の世界だから誇張があるにしても、まさに驚くべき内容を持っている。中でも、ものすごいのは金であり、

「蛎崎城庫拾貳戸詰物」には、次のような財宝が詰め込まれていた。

- 一、黄金 千三百枚（二重箱）
- 一、金 九京八兆六億六万八千両
- 一、金銭 三百貳拾壹貫文
- 一、銀 三百九拾貫目
- 一、大豆銀 四十六石貳百三十匁に入
- 一、銀銭 三百貳拾貫文
- 一、永楽 七千貳百貫文

ほかのものはそれほど驚く数字ではないが、金には億・兆を超える「京」という単位であり、現代においても天文学的数字で、普通は使われることのない巨額である。蛎崎蔵人に謀殺された義純王が統治を怠って遊興し、阿蘭屋平に築いた花御殿の新屋形庫蔵一九戸の詰物にも、金は「拾兆二億六万二千四百卅両」とあるから、そのころの下北には想像以上に巨額の金があったことになる。いずれにしても、これら蛎崎側の財宝は、すべて戦いに勝利した南部氏のものとなった。

乱後の半島と このようにして中世末期の下北半島を大きな戦乱の渦に巻き込んだ蛎崎の乱は終わったが、この**室町幕府滅亡** によって中世が終わったわけではない。蛎崎の乱が平定されたのは康正三年（一四五七）であり、足利幕府が滅亡するのが天正元年（一五七三）のことだから、これからなお一世紀余り中世と呼ばれる時代は続く。その間の歴史の流れを、下北半島と中央とを並行して駆け足で眺めてみると、戦国の乱世から近世への胎動が鮮やかに感じられる。

蛸崎の乱の終戦処理は、まず順法寺城・錦帯城の破却から始まった。恐山峰の寺も破却され、恐山は一時中断するといふほどの徹底した旧支配勢力の撲滅である。しかし、古い神仏の破却があれば、新しい神仏の招来がなければならぬ。直ちに南部政経は田名部斗南丘に妙見神社を再建し、下北半島領主としての力の誇示と人心の掌握を開始する。

間もなく中央では応仁の乱が起こり、群雄割拠する戦国時代となっても、南部氏の下北支配は着実に進められていった。文明十八年（一四八六）の田屋熊野神社勧請、大永二年（一五二二）の吉祥山円通寺の再興、そして破却されて一時中断した恐山の寺院も、新しく山号を釜伏山とされて再開する。そして天文十年（一五四二）には猿ヶ森八幡宮の建立、元龜元年（一五七〇）には蛸崎八幡宮勧請、翌年、川内八幡宮の勧請と続き、信仰の拠点は整備された。この間に南部利視としみが下風呂へお忍びで入湯するなどの記録もあり、南部氏のきめ細かな下北支配ぶりがうかがえる。

しかし、全日本的な視野から見ると、時代は大きく変わりつつあった。天文十二年（一五四三）にはポルトガル人が種子島に鉄砲を伝え、同十八年にはフランシスコ・ザビエルが鹿児島に来航しキリスト教を伝えるなど、新しい外国の文化が到来するとともに、国内では、永祿三年（一五六〇）織田信長が桶狭間おけはざまの戦いで今川義元を破り、ついに天正元年（一五七三）、足利義昭を降伏させて天下を握ったのである。

五 北奥の文化とアイヌの動向

五〇〇に及ぶ 鎌倉～室町時代のいわゆる中世の文化といえ、新しい武家社会を背景に、新しい宗教、新しい城館、新しい文学、新しい美術が次々に花開いた。しかし、日本の北端に位置する青森県には、鎌倉や京都からの新しい文化の伝播はあっても、自ら生み出すような状況にはまだなかったといっている。この北奥の地は『東北太平記』に基づく物語と伝承の世界の中にしか、その姿を明確にしていなかったからである。

しかし、近年に入って、北奥の中世遺跡の考古学的研究は次第に進められるようになり、単なる想像や憶測ではない北奥の地の生活や文化が少しずつ明らかになってきた。最も未知の地域だった糠部郡の一带、そして、その最北端に位置する下北半島についても、一端が垣間見られるようになったのである。

青森県全体が実質的に日本という国家体制の中に組み込まれるようになったのが鎌倉時代以降であったことを考えると、中世という時代区分は、日本史の中の北奥の地の草創期だったといってもいい。

このような中世の北奥の生活と文化を明らかにする遺跡の代表的なものとして、平安時代の末期から戦国時代にかけて、この地に建てられた城館の数々を挙げることができる。最初のころは、竪穴住居群を大きく空堀で囲む簡単な形のものが多いが、やがて複雑な水堀などが幾重にも囲う館も出現するようになり、さらにそれが掘り立て柱建物をも含む城館へと発展する。これらの遺構は従来「チャシ」と呼ばれてきたが、チャシはアイヌ語で本来、アイヌ人が建てたものを指すため、今では「館」というのが一般的である。

これらの館は、軍事的な防衛施設を意味する砦とりであったり、単なる住居としての居館であったりするが、その

中には蝦夷が築いたものも含まれ、それは蝦夷館と呼ばれている。東通村の将木館やわが大間町にもある蝦夷住居跡などもその一つだが、こうした「館」と称されるものは、青森県内で五〇〇基以上も確認されているのである。

根城の構成

蛸崎の乱の平定によって下北半島の全体を完全に掌中に治めた八戸南部氏の拠点・根城は、先にと中国陶器も述べたように建武元年（一三三四）に南部師行によって築城された城館である。激動の南北朝時代から戦国時代まで、数々の戦乱の中でも一度も落城することなく、中世を生き抜いたこの城は、糠部郡を象徴する最大最強の城であり、北奥の中世を代表する建築物であった。

一般に中世の城郭は、急峻な山岳を利用した山城が多いが、根城は現在の八戸市馬淵川の右岸の標高わずか二〇メートルの低台地に立地し、その地形を巧みに利用して、本丸・中館・東善寺館・岡前館、沢里館の五郭を構成している。築城したのは南部師行だが、本格的に整備し、規模の大きさも決定的にしたのは、甲斐国の所領をすべて譲り、根城に本拠を移した八代政光である。天正二十年（一五九二）に破却され、寛永四年（一六二七）に廃城となったが、二二代の南部直義が盛岡の南部利直によって遠野に移封されるまでの三〇〇年に近い歲月、根城はまさに奥州を支配する根本の城であった。

昭和五十三年（一九七八）以降、八戸市教育委員会によって調査が進められ、掘っ立て柱建築物・竪穴遺構・井戸跡・カマド遺構・道路状遺構などが発見されたが、掘っ立て柱建物跡で増築・改築の形跡が数多く見られ、多年にわたる規模の拡大、整備が積み重ねられたことがうかがえる。出土遺品には中国産の青磁・白磁・染付、国産の唐津・信楽・美濃・瀬戸・志野などの陶磁器や武器・武具類、鋤・鉞などの農具類、調理器、装身具などがあり、室町時代から江戸時代初めまでの年代の長さはあっても、中世の北奥の文化と生活をしのばせる遺品の

数々である。

このような遺品は、津軽の安東氏の居城であり、東北地方最大の規模といわれる福島城や北畠氏の居城・浪岡城、南部氏が落城させたといわれる尻八館などでも、北奥の中世文化を考察させる史料としてさまざまに発掘されている。中でも出土遺物の陶磁器に優れたのが見られるのは尻八館のもので、青磁・白磁、天目などの中国製陶磁器である。大体、一三世紀後半から一四世紀にかけてのものといわれ、中世の北奥に中国の文化が大きく流入していることは、一驚に値する。また、これらの陶磁器は、当時の日本の先進地域で流行していた喫茶と無関係ではなく、中世北奥の地の支配者層の中には既に中国的な文化教養を持ち、中央で流行していた喫茶を実践する人々がいたことを物語っている。

田名部館の 田名部館が築城された時期は明確ではない。建武元年（一三三四）ごろ北一八郡の国代となった**規模と遺物** 南部師行が赤星五郎を田名部に、武田修理を蛸崎に代目として派遣し、それぞれ居館を構えさせたのだから、おそらくこの前後だろうと想像されるが、赤星五郎は延元三年（一三三八）に南部師行に従い、武田信義らとともに泉州石津で足利尊氏軍と戦い戦死する。

蛸崎の乱後、南部政経は新田盛政を田名部館に配したともみられるが、永祿年間（一五五八―七〇）に肥後菊池家の一族が田名部で南部氏の優遇を受け、城ヶ沢に居住した後、田名部館に移り、館主または郡代となったといわれる。居住する主は変わっても、いずれも南部氏の下北支配の一環をなす重要な城館として田名部館は中世の下北半島を代表する城館であった。

この田名部館の所在地は、現在、むつ市田名部の中心地であり、代官山公園となっているが、その名の通り、江戸時代には田名部代官所が置かれ、昭和に入って田名部高等女学校、第二田名部小学校などがあつた場所であ

る。そのため田名部館の遺構はほとんど壊滅状態にあり、一部を除いては、その細部まで明らかにすることはできない。しかし、恐山山塊を背後に控える自然の要塞の地形を利用しての空壕があり、深さ五メートル、平均二〇メートルの幅のものが現存する。そして近年の代官山公園の改修工事によって、わずかながら遺物も発掘された。城郭の大きさは、東西約一一〇メートル、南北約一三〇メートルのものと推定されている。

発掘された遺物の中で陶磁器では、近世に入ってから古伊万里などが多かったが、室町時代のものと思われる白磁・青磁片も採集されているほか、土師器も発見されているため、田名部館の成立は鎌倉時代以前、平安時代にまでさかのぼるのではないかと思われる。空壕を入れても、その総面積が二万平方メートル余りと推定される田名部館は、その規模こそ小さいが、古代末期から近世初めまでの下北半島を知る城郭として、貴重な存在であることはいうまでもない。

鶴ヶ崎山順法寺城 蛎崎の乱で下北半島の主役となった鶴ヶ崎山順法寺城と蛎崎城の実態については、ほかの**の三重濠と遺品** 城館に比べて実証的なものは何もないといっているほど、空白状態である。しかし、鶴ヶ崎山順法寺城の方は、大正時代末期まではその城跡が確認されていて、笹沢魯羊の『下北半島史』には「城は三重に濠を廻はしてあった。城跡は大正の頃迄見られたが、大湊航空隊開設当時敷地に編入されて址を没した」と記されている。

また『東北太平記』によれば、宝治三年（一二四九）に安東盛親が鶴ヶ崎山順法寺城を築き、城の南は陸奥湾に面し、城下は東方清岡雅楽城下、西方八角路入道館まで、人家四五〇二戸、後ろは嶮山重なり合うという広大な規模になっているが、これはやはり物語の表現なのだろう。しかし、この順法寺城は、後に北部王家の本城となる城である。誇張された表現があつたとしても、威風堂々たる城郭であつたことは間違いない。

大湊航空隊用地となって姿を消した順法寺城跡は、以後、調査する手立てを失ったが、城ヶ沢の神明宮の裏手にある窪地がその濠跡であるとの見方があり、昭和五十年（一九七五）になって、むつ市教育委員会が発掘調査を行った。その結果、順法寺城の濠跡と推定される三重の空濠跡が発見されたほか、さまざまな出土品があったが、出土品の中には中世と思われるものは発掘されなかった。しかし、隣接する城ヶ沢小学校校庭から出土した土師器があるところから、順法寺城は平安時代に既に土師器を使用する集団によって築かれた館が存在し、中世に入って三重濠を巡らせて改修した城郭であるとみられている。

確かに『東北太平記』に記されている鶴ヶ崎山順法寺城の「本丸石垣高さ所五間四尺、下き所は三間余、丸数五ヶ所、五重櫓一ヶ所」などという近世城郭の面影はなく、城ヶ崎地域が沖積平野の中の低い台地であるため「後は嶮山重り」といった地形の相違も指摘されるが、この城館は紛れもなく中世の下北半島を支配した北部御本城として実在し、数々の歴史の変遷を経て、大正時代まで明確に城跡を残していたのである。

蛸崎城の繁栄 鶴ヶ崎山順法寺城とともに、錦帯城と呼ばれた蛸崎蔵人の居城・蛸崎城も不明な部分が多い城**示す出土品** 館である。現在の川内町蛸崎の地は、中世の下北半島における最大の戦乱の舞台であったにもかかわらず、その城址は消え去ってしまっている。鶴ヶ崎山順法寺城の方は、大正時代まで城址が残っていたというが、蛸崎城の方は明治時代末期まで、わずかに石垣の一部を残していた程度で、その後はその石垣さえ見ることができなくなかった。

寛政五年（一七九三）の菅江真澄の著作『奥の浦うら』では「小沢という村を経て、なおすすむと殿崎しんさきというところがある。古城の跡に年を経た木立ちがふるびているのは、いつごろであるか。松前の領主の遠い祖先がここに城をつくり、たてこもられたところという」と記されているから、江戸時代には年経た木立ちの古城跡は、

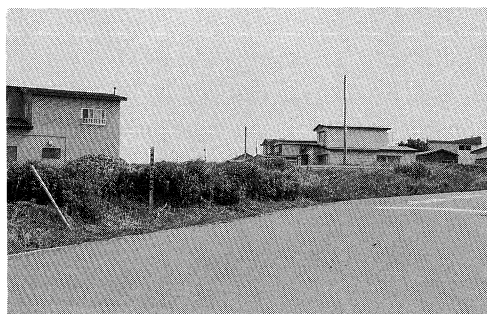


写真 2-13 四十八館跡

この川内蛎崎の地に当たり前のようにその姿を見せていたことになる。

この蛎崎城跡は現在、蛎崎小学校裏手の杉林になっている一帯だといわれるが、そこに明治時代末ごろまで残されていたという城の石垣は、当時、蛎崎集落の人々が行っていった木炭製造の炭焼き釜の入り口をふさぐ石として手ごろだったため、だんだんその姿を消してしまったのだという。城跡ばかりではなく、その城下を構成する屋敷跡地は整地されて畑となり、本城の順法寺城より隆盛を誇ったとされる蛎崎城とその城下は、大正時代初めごろまでに、その面影をどこにも残さないほどに変貌してしまったのである。

しかし、城館の詳細はわからなくても、この一帯からは畑の整地や井戸の掘削などによって、さまざまな遺品が発掘された。腐食した刀剣類や青磁・染付・天目などの破片、そして数千枚に及ぶ古銭など、すべて蛎崎氏の繁栄を物語るものばかりである。また、室町時代の和人と推定される大量の人骨が薪を重ねた状態で畑の中から出土した。蛎崎の乱の戦死者かと思われたが、刀傷などの損傷はないため、直接の関係はないものとされている。

四十八館と アイヌ伝承 下北半島にある中世の城郭は、平野に乏しく、農耕に適さない地域が多いために、小さな規模で点々と存在する。これは津軽半島においても同様だが、特に下北半島は古代まで蝦夷の拠点とし

て中央とは隔絶した地域だっただけに、具体的な名称さえ残さない館・高館・大館と呼ばれる館跡が続くのである。しかし、これらの城館の中には、アイヌ人が構築し居住したいわゆるチャシと呼ばれるものは、一つも存在しない。ただ、アイヌの伝承を伴う館跡がわずかにあるだけである。その一つに、わが大間町の四十八館を挙げる

ことができる。下手浜とも呼ばれるこの城館に伝えられる伝承は、アイヌ対和人の戦いではなく、アイヌ対アイヌの戦いであることも興味深い。つまり、あるアイヌの集団がこの地に城館を築き、その周囲に空濠を巡らして活動を続けていたのを、あるとき、敵対するアイヌ集団が攻撃した。空濠は崩され、館には火をかけられて、あえなく四十八館は落城する。そして、濠はアイヌの死体で埋まり、生き延びたアイヌも、いずこともなく逃げ去ったという。そして、この地には、四十八館を築いたアイヌが残した財宝が隠されているという。

確かに、現在は大間平の一角となっている下手浜の四十八館跡には、空濠の一端が残され、その敷地跡からは土師器・須恵器・擦文土器が出土しているが、いずれの時代のものかははっきりしていない。立地条件を見れば、周囲一带を見渡せる絶好の要地にあり、太平洋戦争の折には要塞地帯となって、砲台などが設置された。その折には貝塚も発見され、この地がアイヌ人たちの漁労生活の拠点であったことが想像できる。そして、この本州最北端の地では、平安時代から中世にかけて、まだアイヌ人同士の壮絶な戦いが繰り返されていたのである。

和人とアイヌ 四十八館のようなアイヌ対アイヌの闘争ではなく、和人とアイヌの闘争伝承も下北半島には**戦争の伝承** くつか残されている。大間町に隣接する大畑町の正津川から大畑川の河口にかけての海岸地帯は、その名も戦敷と呼ばれる和人とアイヌとの戦いの主戦場であった。

この戦いは和人が優勢で、次第に追い詰められたアイヌは、涌館の崖下を流れる大畑川の傍流で全滅し、その死体は傍流へすべて埋められた。この涌館は、和人の城館であったろうと思われる。

また、東通村田屋に残されているアイヌと和人の闘争伝承は、花御殿と呼ばれた阿弥陀堂を建て、そこに移り住んだ藤原將軍の弟夫婦をアイヌが襲って殺してしまう話である。この弟夫婦は、土地の人々に慕われていたこともあって、事件の悲惨さに村人たちは嘆き悲しむ。そして盛岡の殿様に仇を討ってほしいと頼み込み、アイヌ

征伐が行われるというもので、この時期、下北半島では各地でアイヌと和人との闘争が繰り返されてきたことが想像できる。遠く平泉で栄華を誇った藤原一族の伝承と、中世の花御殿の伝承が一つになったような内容だが、この阿弥陀堂の跡地は現存しており、斗南ヶ丘段丘の一角の重要な遺跡の一つとなっている。

このほか、下北半島の東北端に位置する尻屋崎に近い「ハマシラ」と呼ばれる所は、古くからアイヌと和人とが共存して生活していたといわれる。ところが、あるとき易国間に拠点を置く勢力の大きいアイヌの集団がハマシラのアイヌを襲い、ハマシラのアイヌは敗走する。そしてこのアイヌは北海道に渡ってしまったので、残された和人だけで村をつくったという。これはアイヌ対和人の戦いではなく、大間の四十八館と同じアイヌ対アイヌの戦いだが、いずれにしても、アイヌを介在する戦乱が古代から中世にかけてさまざまに展開されていたようである。これらはすべて伝承の域を出ないものだが、今後の発掘調査で解明されていく部分があることを期待したい。

アイヌの足跡 中世の下北半島におけるアイヌの動向は、これまで述べてきたように、非常に資料が少なく、**と中世の下北** そのほとんどが伝承にすぎない。縄文文化以降の江別式・北大式・擦文式など北海道系の文化の流れは、アイヌ文化の足跡であるともみることができようが、下北半島が日本の中央より北海道との交流が深かつたはずであるにもかかわらず、その史料は断片的で、明確になるまでには今後さらに多くの時間を必要とするのが現状なのである。

しかし、古代・中世はもちろんのこと、近世に入ってからアイヌが下北半島に居住していたことは確かで、それは昭和二十六年（一九五二）に行われた東通村岩屋鬼洞門の発掘調査で実証された。

岩屋洞窟から発見された人骨は、北海道アイヌと一致するところからアイヌ人骨とされた。この洞窟からはホタテ貝・シラカバ・鉄鍋などが発見され、その周辺からもクジラ・ノウサギ・シカ・クマなどの魚類や哺乳類の

骨が出土しており、これらの人骨は狩猟・漁労民族だったとも結論づけられている。

このように見てくると、下北半島の古代はもちろんのこと、中世に入ってから、アイヌ人は和人の圧倒的な進出にもかかわらず、半島の各地に集団で住み着き、狩猟・漁労の生活を送っていたことは容易に想像できる。そしてアイヌ人同士、対和人との抗争と共存などを繰り返しながら、近世に至るまで営々とその足跡を残しているのである。多くの物語や伝承に見られるように、北海道から千島列島、サハリンへとその居住地を北上させていくが、アイヌは下北半島とは切っても切れない関係にあった。文字のない先住民アイヌの足跡は、ほとんど明確なものはないが、いずれ多くの研究成果によって明らかにされる日が来るに違いない。そのとき、中世の下北半島は、もつと違う表情を見せることになるであろう。

第四節 近世の大間

一 統一政権と北奥

近代西欧文化 応仁の乱後、室町幕府を衰微させ、約一世紀にわたって続いた戦国の争乱も、一六世紀半ばを過ぎると、急速に統一への気運が高まっていく。

その後の天下統一の軌跡については、あえて触れるまでもないだろうが、永禄三年（一五六〇）、駿河の今川義元を桶狭間で破った織田信長が天正元年（一五七三）に室町幕府を倒し、近世の扉を大きく開いた。しかし、近江に安土城を築き、畿内を制圧し、甲斐の武田氏を滅ぼして、中部地方のほぼ全体を勢力下に置いた織田信長は、中国地方の征服に出発した途中で明智光秀の裏切りに遭い、天下統一事業は中断する。

この信長の事業を引き継ぎ、完成させたのが豊臣秀吉である。天正十三年（一五八五）には四国を、同十五年には九州を平定し、大坂城を築いて本拠とした秀吉は、関白・太政大臣となつてからは関東の北条氏を滅ぼし、さらに軍を進めて東北の諸大名をも服従させ、ここに全国統一を完成する。

このような時代背景の中で注目しなければならないのは、これらの争乱と統一の動きの中で、近代西欧文化が果たした役割であろう。中でもポルトガル人がもたらした鉄砲と、フランシスコ・ザビエルが布教したキリスト

教の広がり、これまでの日本には見られない大きな変革を促した。鉄砲はこの日本の近世の戦乱での「主役」だったし、キリスト教は多くのキリシタン大名を生んだ。ある意味で日本の近世は近代西欧文明がもたらした社会変革であり、それは北奥の地、青森県、下北半島、そして大間町へも、少なからぬ影響を与えていくのである。

北奥の領主権力 織田信長が手がけた天下統一の事業は、豊臣秀吉によって成し遂げられ、北奥の各地も統一

南部氏と津軽氏 政権の傘下に入るが、それは平穩無事な近世への移行では決してなかった。むしろこの時期こそ、東北の戦国時代とも呼んでいいほど、北奥各地の領主たちは入り乱れて権力争いを繰り返していたのである。

天正十五年（一五八七）、豊臣政権は「関東・奥惣無事令」を発令し、東北の領主間の抗争に対して、嚴罰をもって臨もうとするが、陸奥国では伊達氏と蘆名氏、出羽国では最上氏と大宝寺氏などが相争い、津軽地方では大浦為信、九戸地方では九戸政実が南部信直の統制に反旗を翻していた。北奥における南部氏の制覇も、この時期、苦境にあったわけである。

しかし、北奥の諸領主のうち、豊臣政権に最も早く接触し、支配の正当性を主張し、領地安堵の朱印を得たのは南部信直であった。既に「関東・奥惣無事令」が出される以前に、前田利家を通じて豊臣政権と連絡し、南部家存続を保障させていた南部信直は、天正十八年（一五九〇）、南部内七郡の安堵を記された朱印状を受けている。この南部内七郡とは「糠部、鹿角、岩手、志波、和賀、稗貫、閉伊」だといわれ、南部氏の北奥制覇は続くかに見えた。しかし、津軽地方の領有をめぐる、南部氏に公然とした反抗を示し、本格的な戦いを挑んだ大浦為信も決して負けてはいなかった。

「関東・奥惣無事令」では、領主間の争いはすべて私戦と見なされ、違反した者は処罰される定めになっていたにもかかわらず、大浦氏はひそかに豊臣政権と連絡を結び、南部氏からわずかに遅れて、領内に大間蔵内地を

含むとはいうものの、四万五〇〇〇石の知領高を与える朱印状を受けている。このようにして、青森県では、津軽氏を名乗るようになった大浦為信と、南部氏という両雄が近世初頭の領主権力を二分するようになるのである。

九戸政実の乱 天正十九年（一五九一）、北奥における最大の一揆とされる九戸政実の乱が起こった。これは、

と北奥の大名 糠部中錯乱といわれたほどの騒乱であり、豊臣政権を拒否する九戸政実を中心とする同族、農民層まで含む大集団の反抗でもあった。

これに対する豊臣政権側の鎮圧軍も、これまでに類例がないほど大規模なもので、東北地方の各大名はこぞつて九戸盆地に出陣し、ほぼ日本の東側半分の大名が動員されたばかりか、北海道からはアイヌの支配者となった蛸崎氏がアイヌの軍団を伴って攻撃に参加したという。これほどの大がかりな攻勢の前に、さすがの九戸政実軍も抗するすべがなく、壊滅するが、これは北奥の両雄、南部氏と津軽氏が完全に豊臣政権の軍事編成の中に組み込まれてしまったことを意味している。もちろん南部・津軽両氏ばかりでなく、北奥の大名たちすべてがその傘下に入り、それぞれが近世大名への脱皮を余儀なくされたのだった。

九戸政実の乱より早く、豊臣政権による検地や刀狩りなどは奥州各地で強制的に実施されていて、関東・奥惣無事令による知行方検地、妻子定在京、城破りの三原則は着実に進められている。豊臣政権に服従する大名に対しては、その時点で領有している範囲の領地を認められたが、南部氏がもつた南部七郡安堵あんどの朱印状にもこの三原則は明記されており、天正二十年（一五九二）、南部師行が築城以来、八戸南部氏の拠点だった根城も破却されてしまったのである。もつとも破却とは、居城としての機能まで壊してしまうということではなく、堀を埋め立て、柵橋、城門を取り払い要塞としての部分を破却することであって、根城南部氏一族は、寛永四年（一六二七）に第二二代直義が遠野に移されるまで、根城を拠点として活躍していたことが定説となっている。

統一政権下 室町幕府の滅亡から以降、織田信長、豊臣秀吉と続く統一政権下での下北半島に関係のある歴史的事項は、ほとんどこれまで述べてきた北奥全体の動きの中に集約されてしまうほどのささやかな内容しかないが、江戸幕府が開かれるまでのわずか三〇年足らずの出来事を『大間町沿革史年表』を中心に駆け足で眺めてみると、次のようになる。

・ 天正七年（一五七九）、猿ヶ森沿岸一帯に大津波。家屋流出多数。尻屋は離島となる。

・ 天正十六年（一五八八）、下北半島に大地震と大津波。このため地形が変わったという。

この二つは、この時期の下北半島における天災の記録である。その間に南部高信は石川城で死去し、織田信長は本能寺で自刃するという歴史の転換があり、南部信直が二六代を継ぎ、豊臣秀吉は大坂城を築いて織田信長の天下統一事業を引き継いだのだった。

・ 天正年間（一五七三―九二）、下北半島から越中・加賀・能登・越前・若狭方面へヒバを積み出す。

・ 文禄三年（一五九四）、田名部の徳玄寺ができる。

・ 慶長元年（一五九六）、田名部の常念寺ができる。

この三つは、当時の田名部地方の隆盛を示す記録である。奥州一円に大開検地が厳しく行われる中で、津軽の十三湊には及ばなくとも、陸奥湾に面する田名部七湊は大きな発展を遂げた。この田名部七湊については後に詳述するが、この繁栄に伴って、田名部には相次いで徳玄寺・常念寺の名刹が建立されたのである。

・ 慶長二年（一五九七）、南部信直、不來方こずかたの築城に着手、のち、不來方を盛岡と改める。築城には下北の鉄も使用された。

・ 慶長四年（一五九九）、南部信直、盛岡城竣工し移る。

この二つはいうまでもなく、南部氏の盛岡城の築城と移転であり、見識ある近世大名として名の高い南部信直の栄光の記録である。そして、その象徴としての盛岡城に下北の鉄が使用されていたことと、この城への移転が豊臣秀吉が没した翌年、再び新しい天下分け目の関ヶ原の戦いが展開される前年であることも興味深い。

下北半島が ここで当時の日本地図を眺めてみよう。中世から近世にかけて、日本列島の姿はどのようなもの**ない日本図**に思われて描かれたかは、さまざまに残された「日本図」によって見ることができているが、これらの地図には、北海道はもちろんのこと、マサカリ形をした下北半島も描かれていないのが共通している。

近代的な地図の作成方法がなかった時代の日本図と呼ばれる地図には、鎌倉時代末期に成ったといわれる『拾芥抄』に収められている「行基図」をはじめ、一五世紀に朝鮮から来日した申叔舟の『海東諸国記』の中で描かれたもの、豊臣秀吉が所持していたといわれる「扇面図」、そして一六世紀に入ってから「南蛮屏風日本図」「イタリア古写図」などがあるが、時代が下るに従って細密になっているとはいえないもの、マサカリ状の下北半島を見ることはできない。古代以降、北奥の各地が日本の統治者にとって重要視されてきたとはいえず、まだ近世初頭における下北半島の位置や地形は、多くの人々に理解されていなかったのである。

しかし、これらの日本図には、ちゃんと陸奥・津軽は描かれているし、中には津軽海峡を挟んで北海道と思われる陸地があり、そこに松前と記されているものや、アジア大陸の沿岸部に「エソ」と記されているものがあったりして、かなり具体的に北辺の地がイメージ化されてきている。

このような日本図ばかりでなく、ポルトガル人がもたらした世界図によって、日本人はこれまで固定的に持っていた「唐」^{（ちやう）}「天竺」^{（てんじく）}「本朝」という三国世界観から、広大な世界観を認識するようになってきており、世界の中心の日本、そして自国の中でまだ未知の部分の多い北奥の地への関心は、一層高まっていったに違いない。ことに

北奥の地が蝦夷地を経由すると東北アジア大陸と非常に近い位置にあるという認識は、豊臣政権の朝鮮進攻構想の中でも戦略的な意味を持ち、「豊臣秀吉所持扇面図」は、秀吉の大陸進攻の野望をさらに大きく膨らませるものだったとみることもできよう。

関白秀吉の 豊臣秀吉の対外政策は常に前向きで、積極的であった。長崎・京都・堺などの商人に渡海を許し、**野望の終焉** 対外貿易を保護・奨励するばかりでなく、ポルトガル・イスパニア・台湾などに対し、高圧的な外交さえ展開する。さらに中国の明に対しては征服を意図し、そのために朝鮮を服属させようとして出兵したのが文禄元年（一五九二）の文禄の役である。しかし、これは失敗し、慶長二年（一五九七）、再び朝鮮出兵を試みる。これは慶長の役と呼ばれる。

この二度の海外進攻のうち、最初の文禄の役には南部信直も津軽為信も参戦するが、特に南部信直は、その子利直とともに積極的に出陣した。その際、敦賀の道川三郎左衛門の船便を使って田名部から武具を運搬したというから、豊臣政権の朝鮮出兵は、下北半島をも渦中に巻き込む戦乱だったということができよう。

ところが五年後の慶長の役のときは、南部信直も津軽為信も出陣していない。南部信直はその年に盛岡の不来方城築城に着手したばかりだし、津軽為信も浅瀬石城を攻撃し、津軽統一を成し遂げたばかりのときである。豊臣秀吉が既に老いていたとはいうものの、慶長の役に北奥の両雄がそろって参加していないことは興味深い。

いずれにしても豊臣秀吉の海外進攻は、最初から劣勢であった。文禄の役では朝鮮の義勇軍の強い抵抗と明の援軍とによって苦戦を余儀なくされていたし、和議も実を結ばず、無理やりに押し進めたのが慶長の役である。そして、これも翌年、六三歳となった豊臣秀吉が五奉行に後事を託して没したため、全軍撤兵となり、朝鮮と明との反感を買ったばかりか、国内的にも疲弊するという何の益もない侵攻に終わった。

こうして近世の全国統一を果たした豊臣秀吉の野望は、自身の死によって終焉し、朝鮮出兵にも参加せず、東海から江戸に移って静かに実力を蓄えていた徳川家康に、織田信長、豊臣秀吉と続いた統一事業は受け継がれていくことになる。そして、この江戸時代と呼ばれる近世の安定期に入って、下北半島もわが大間町も、これまでになく明確に歴史の上に登場するようになるのである。

二 江戸時代の下北半島

一〇郡一〇万石 南部領（藩）の成立は、天文十八年（一五九〇）に豊臣秀吉が南部信直に与えた南部内七郡の南部領の成立の領地朱印状に始まるが、このとき既に津軽地方は大浦（津軽）為信に与えられていたため、中世のころの北奥を制覇した南部領から見れば、北の領地を失ってからのスタートであった。

しかし、寛永十一年（一六三四）、徳川家光が二代藩主南部重直に交付した南部領は、秀吉時代の南部内七郡ではなく、北・三戸・二戸・九戸・鹿角・閉伊・岩手・志和・稗貫・和賀の一〇郡一〇万石となっている。これは北・三戸・二戸・九戸の四郡が糠部という一郡にくくりにされていたため、実質的に変わりはなく、これまで、下北半島の北端までを含む広大な糠部の地域が細分され、明確な姿を現し始めたということにしかすぎない。そしてこの中の北郡は、現在の上北郡と下北郡を合わせた地域のことだから、下北半島は北郡の中の最北部を示すことになる。

いずれにしても江戸時代に入ってから秀吉以来の南部領は確保されたわけだが、一〇郡一〇万石という数字は表向きの数字であって、南部領内の実際の石高はその倍以上あった。寛永十一年の「領内郷村目録」によれば、

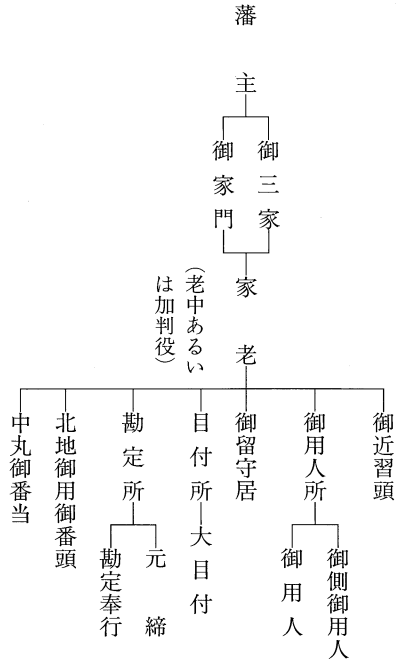
三戸郡の三万六八五八石を筆頭に、計二〇万五五四石となっている。しかし、この中で北郡が占める割合は、一万三二〇石と一〇郡中の最下位であり、その地域の広大さに比べて、いかに米穀の生産が少なかったかがわかる。下北半島だけの数字は知るすべもないが、北郡の中でもその比率はさらに低かったことは確かであろう。ともあれ、このようにして江戸時代の南部領と下北半島は新しいスタートを切るのである。

北郡田名部通 江戸時代に入ってからの下北半島は、田名部を中心にすべてが動いていたといっても、決して**と代官所設置** 過言ではない。マサカリ半島といわれる下北半島にとって、田名部はその付け根にあり、政治・経済・文化のすべてがこの地に集中したとしても不思議ではない。当然のことながら、盛岡に本拠を置く南部藩の代官所も田名部に置かれ、代官が盛岡と田名部とを往復して下北一帯を支配した。

このような背景から下北半島全体を北郡田名部通と呼ばれるようになり、実際に南部藩の行政区画として、北郡田名部通は三四か村、ざっと五〇〇〇石の石高を持つ地域として統治している。先に述べた南部領の中の北郡全体の表向き石高は一万三二〇石だから、やはり下北地方の米穀生産高は、最も低い地域だったといえるであろう。しかし、田名部代官所が当初から建設され、下北一帯に睨みをきかせていたわけではない。寛永九年（一六三二）ごろは、まだ代官所の建物はできておらず、常念寺が三〇年近く仮代官所として使われていて、平屋造りの代官所の建物が館下に完成したのは、寛文年間（一六六一―七三）だったといわれる。

ということとは、南部藩二代藩主南部重直が寛文四年に世継ぎを決めないまま没しているから、おそらくその後のことであり、江戸幕府が弟重信に八万石で盛岡藩を相続させ、次弟の直房に二万石を与えて八戸藩を創設させた以降であるかもしれない。いずれにしても南部藩の地方支配機構が確立したのは、寛文六年（一六六六）から天和三年（一六八三）にかけて行われた領内総検地によるものだから、それまでの田名部代官所は草創期の仮

表 2-1 南部藩の組織



〔『郷土史事典』『岩手県』による〕

この一〇万石になった時点で地方行政組織が確立する。

藩の組織そのものは表2-1の通りだが、地方行政組織は南部藩領を一〇郡三三通に区分し、各通ごとに代官所を置いたのである。北郡内では七戸通、野辺地通、田名部通の三か所が代官所地区であり、下北半島一円は田名部通代官所がそのすべてを支配した。そして天和二年の時点では四二か村・四七〇八石の規模だったと、『邦内貢賦記』に記されている。

『南部史要』によれば、「享保二十年（一七三五）三月、国中十郡を三十三通に分ち、各地の便宜により二十五箇所に代官所を設置し」とあるから、通の数に比べて代官所の数の方が八つ足りない。これは地域が広くない通

住まいであってもよかつたのである。しかし、代官所の建物が完成してからも、代官は二人で半年交代で盛岡と田名部を往復し、下役二人、物書二、三人、役医、与力などが在所して下北地方を支配した。

盛岡南部氏の 八戸藩の創設により二万石を 地方行政組織 減らされた盛岡南部氏だったが、一〇年余にわたる領内総検地の後、新田二万石を得て、天和三年（一六八三）再び一〇万石に増される。これが文化二年（一八〇五）には二〇万石に倍増昇格することになるのだが、

は、一つの代官所が兼ねて支配していたことを示すものだろうが、代官所そのものも時期に合わせて、さまざまに統廃合がなされたようである。

例えば、元禄年間（一六八八—一七〇三）には大畑にも代官所が置かれ、関根村から牛滝村までの一〇か村が統治されたといわれるが、享保六年には一度廃止され、寛保三年（一七四三）になって再び開設したものの、数年で閉鎖されるなどという動きを見せている。この代官所は、後に北方警備のための北浦御番所となり、文政六年（一八二二）には大畑御陣屋となったところである。

南部藩の村政 南部藩は代官による各地方の統治支配を確立するために、代官には大きな権限を与えていた。

と五人組制 地方行政・司法・警察・租税に関する一切を取り仕切ることでできる権限だから、今でいうなら県知事・裁判所長官・警察署長・税務署長の大役を一人で背負っていたということになる。

しかし、一つの代官所が統轄する村の数は多く、田名部なら四二か村もあったのだから、とてもすべてに目を届かせるわけにはいかない。そこで、どうしても村単位の行政組織が必要となってくる。村単位の村長ともいべき「肝入^{きもいり}」を置き、その下に助役に当たる「老名^{おきな}」を二、三人配し、さらにその下に町内会長・隣組組長ともいった五人組頭を付けるというのが村政の構成である。この肝入—老名—組頭の下に、一般の村民である本百姓と水呑百姓^{みずのみ}がいた。肝入は関東地方では名主、関西では庄屋と呼ばれている村政の支配者のことで、老名はその補佐役である。いずれも村民の推薦によって、その地位に就いた。

五人組頭というのは、南部利直の時代に実施したもので、村内二〇石を単位として五人の代表を協議したり順番にしたりして選出し、その五人の長を組頭と呼んだ。さまざまの命令や通知を組合員に連絡し、組の中の相互扶助や災害・犯罪などの防止も呼び掛けるという世話係であり、村政の末端に位置しているというものの、実

質的に村をまとめる原動力となっていた。

南部藩では代官とは別に、町方としての軽犯罪を取り締まる「検断^{けんたん}」を領内の重要地に置き、田名部通では田名部・大畑・川内に配置している。この検断の方が各村の村政に接触する機会が多く、肝入とともに土地の売買などに立ち会い、それを認可したり、五人組頭に直接指令を下したりするのも、その仕事の一つであった。つまり一般の村政は、検断と肝入との折衝により、老名、五人組頭によって運営されていたのである。

流刑地として 江戸時代の下北半島は、蝦夷地に対する北方警備の最前線基地として重要な意味を持っていた。この下北半島が、もう一つ流刑地としての表情も持っていた。特に流刑の地として有名な場所は牛滝だが、ここ以外にも下北半島には、罪の軽重によって、流刑の地となった地域をさまざまに挙げることができる。

文化五年（一八〇八）に徳川幕府の法典である「公事方御定書」を参考にして南部利敬が作成を命じた南部藩の法典「文化律」には、田名部通に関係する追放場所として「一、遠追放 田名部、野辺地、野田、沢内、両鹿角、一、重追放 田名部、牛滝、遠追放の場所江繩下の儘^{まま}にて追放」と記されている。また、南部藩の「御代官心得草」によれば、南部藩の追放場所は四等級に分けられていて、遠追放は牛滝、中追放は七戸、近追放は福岡、軽追放は御城下となっていて、最も重い遠流の罪刑地が下北半島の牛滝なのである。

「文化律」には、このような牛滝配流の記録が事細かに記されているが、当時、絶海の辺境として知られる九艘泊や牛滝の地への流刑は、まさに死罪にも匹敵する極刑であったことは容易に想像できよう。田名部代官所では、この九艘泊や牛滝への遠追放よりは比較的軽い中追放の地域として、大畑・下風呂・大間・佐井の北通地区、川内・安渡の西通地区、尻屋・白糠の東通地区を指定していて、下北半島全体が大なり小なり流刑地としての役割を持っていたようである。

天保四年（一八三三）三月十一日「伝法寺通白沢村黒沢左並知行所御百姓市之助、盗鉄砲いたし御取押相成、田名部之御追放被仰付大間え被遣」という記録は、紛れもなくわが郷土・大間町の江戸時代に、鉄砲の盗難事件の罪人が流刑されたことを示している。

田名部通 寛政元年（一七八九）二月、南部藩には容易ならぬ事件が起こった。世にいう田名部通上地事件**上地事件**である。上地とは領地を江戸幕府に召し上げられることで、田名部通の大半、二二か村が幕府直轄の地となることを意味していた。これは幕府が北方警備の重要拠点として、本州最北端の地である北郡田名部通にねらいを定めたことに原因があった。対象となった田名部通二二か村は次の通りである。

牛滝村・長後村・佐井村・奥戸村・大間村・大畑村・河代村・志利屋村・志利労村・白糠村・泊村・脇野村・川内村・城ヶ沢村・安渡村・田名部村・田屋村・目名村・蒲野沢村・砂子又村、猿ヶ森村・奥内村

この広大な南部藩の北端の部分を北海道の松前藩と同様に幕府の直轄とし、北方警備の戦闘要員を配置する前衛基地とするのが幕府のねらいであった。これに対して、南部藩は大いに驚き、幕府の田名部通召し上げを拒否するために、まず上地命令を受けるために出頭した南部藩家老・奥瀬要人に持たせた文書で次のように嘆願している。

……田名部二郷は、古来由緒有之、先祖共より到規範罷有候儀、別紙懸御目候通御座候、若御用地等に被召上候事にては、替地拝領仕候ても、右古来よりの由緒の地、拙者代に至相放候義、先祖共へ対迷惑至極に存候、乍然于今御用地の筋相蒙不申内以推察御歎申上義、其不敬の義に御座候得共、相蒙候上彼是上候ては、御用儀違背仕候様にて、恐不少奉存候、云々。南部慶次郎
（田名部一件文書）

つまり、この田名部二二か村の地は、古来から由緒ある南部家拝領の地で、当代になって召し上げられること

になると先祖に対して顔向けができないと、土地中止を嘆願したわけである。そして、その古来から由緒ある地であることを綿々として述べた「田名部領土地由緒書」を別に付けて、田名部通は、八戸南部の政経が蛎崎藏人の乱を平定した功績によって朝廷から拝領したものであることを強く訴えた。

土地命令の この幕府の田名部土地命令は結果として南部藩の嘆願が功を奏したのか、鎖国政策を推進した老**取り消し** 中松平越中守定信によって取り消されるが、それに至る幕府と南部藩のやりとりには、北方警備に対する幕府の強硬姿勢と、先祖代々の領土を死守しようとする南部家との間で、必死のしのぎ合いがあったとみられる。『南部史要』によれば、

されど海国警備は、国家の重大事にして、津軽領の青森三馬屋両所には、既に奉行所建設のことに内決したる程なれば、南部領に対しても御用地を命せずとは断言するを得ずとて、幕府の意見頗る強硬なりしも、百万嘆願の末漸く事なきを得たり。

と述べられているから、その推移には容易ならざるものがあったといえるだろう。

しかし、田名部二一か村の幕府による召し上げが取り消されたとはいっても、厳然として北方警備の問題は残っている。南部藩が領土召し上げの代わりに、その見返りとしての何かをなさなければならぬのは当然のことであった。後に大間町周辺の北方警備の部分でも詳しく述べるが、この北方海域に異国船が出没する動きは、この土地事件より前からあり、さらにこの年にはクナシリや目梨などの北辺の地で、和人に対する造反事件が相次いで起こっている。幕府が北方警備に対して敏感になることも当然のことであった。

こうして領地召し上げを回避できた南部藩が、その代わりとして背負わなければならなかったのは軍事負担である。幕府は従来の南部藩一〇万石を倍の二〇万石に増石し、南部藩に北方警備を担当させることにして、松前

へ出兵させることでその帳尻を合わせたのである。倍の加増だといっても、これは名目的な知行高の増加であり、何ら実質を伴うものではなかったが、南部藩としては、この条件を飲むことでしか、由緒ある領土を守ることができなかつた。

南部藩の 江戸時代の歴史の中で忘れてはならないものに、日本史上未曾有の餓死者を出した天明の大飢饉**四大飢饉**がある。天明三年（一七八三）この大飢饉についての記録は数多く残されているが、現代で大冷害の惨状は、まさに目を覆うばかりである。ことに東北地方北部を襲った長雨と寒冷、そして独特の「やませ」の存在が、田畑の実りの全くない凶作の結果をもたらしたのであった。

天明の大飢饉ばかりではなく、東北地方でいう宝曆・天明・天保の三大飢饉の時期は、小氷河期の気候であつたといわれ、そうではなくても米作のおぼつかない北奥では、頼りの稗ひさえ無収穫の状態となる。そしてこれは、単に一般民衆に餓死者を続出させるばかりではなく、藩政の経済に直接大きな影響を与えるものだったことはいうまでもない。南部藩でもそれは例外でないばかりか、本州最北部を領有する藩として、最大の被害を受けたのである。事実、南部藩では、東北の三大飢饉の一つ加えて元禄の飢饉を挙げ、南部藩の四大飢饉と呼んでいる。その時期の下北半島田名部通はどうだったのだろうか。

ここでも一番被害が大きかったのは天明の飢饉である。『下北文化誌』によれば、そのときの田名部円通寺の過去帳の調査として、餓死者の数を次のように挙げている。

天明三年十一月〓死亡者数十六名、同十二月八名

天明四年一月〓二百三十五名、二月百九十五名、三月八十九名、四月七十三名、五月四十八名

計六百六十四名

この数字は、生易しいものではない。天明三年いっばいまではまだ備蓄もあったのか、その数は少ないが、年が明けると一挙に二三五人が一か月の間に餓死したのである。毎日七、八名がばたばたと倒れていく風景がどのようなものであったかは、飽食の時代の現代の人々には想像することもできないであろう。

白米の輸入 天明の大飢饉に次いで大きな被害を東北地方にもたらしたといわれる天保の大飢饉のときは、田と稗作専業 名部通では他地域と比較して、それほど多くの餓死者は出さなかったという。『南部津軽藩飢饉史料』によれば、東北地方の三大飢饉の折には、各地域の犬・猫のたぐいは食料として捕り尽くされ、まさに猫の子一匹いない村落があつたばかりか、死人はもちろんのこと、生きている人間までを殺して、その肉を食したことが記されている。にもかかわらず、下北半島においては、天保の大飢饉の折、何故、比較的良好な状態だったのでろうか。それには二つの原因があつた。

一つは、海港の地として知られる田名部へ、近江商人が白米を運搬してきたことである。これは後に海運の項で詳述するが、田名部湊の海路による交易の繁栄の大きなメリットだったに違いない。天保の大飢饉でも餓死者は続出したが、米どころから輸入された白米によって、幾分は緩和される状況があつたということである。

そしてもう一つは、田名部通の各村が冷害による被害の大きい稲作に見切りをつけて、稗作に切り替えたことであつた。小氷河期という寒冷の気候では稗さえも大きな被害を受けるが、稲作に比べれば、その程度に大きな差がある。下北半島の農民たちは、賢明にも天明の大飢饉の教訓から稗作に切り替え、少しでも餓死者を減らすことに成功したのである。このことは後の下北半島における稲作農業の不振の大きな原因になつたといふものの、当時の状況としてはやむを得ない農作の転換であつたろう。しかし餓死者は少なくても、その寸前の人々は多く、どうやら持ちこたえて春・夏の季節を迎えても、体力の衰えから疾病にかかり、病死する者が多かつたと

いう。

南部藩政の中の 南部藩にとって田名部通は最北の拠点であったことはいうまでもないが、先に述べた上地事田名部通の位置 件に見られるように、北方警備の拠点ともなっていた。また、断崖絶壁の続く九艘泊・牛滝の一带をはじめ、下北半島の各地は流刑地としての意味を持ち、さらに田名部七湊に代表される海運上の要衝としても重要な意味を持っていた。つまり、かつては「秘境」と見られ、異民族の住む地としてしか見られていなかった下北半島は、江戸時代に至って多彩な表情を持つ地域へと変貌していったのである。

こうした背景から、田名部通の中心である田名部は、非常に文化度の高かった地域だといわれる。天明に次ぐ天保の大飢饉において、田名部通が他地域より比較的被害が軽少であったことも、田名部が先進的な動きをしていたことの一つの証拠となるが、享保元年（一八〇一）、伊能忠敬が江戸幕府の命令によって田名部通の沿岸一帯を測量した折、その日記に田名部の印象を次のように記している。

奥北の稀なる処にて、寺院、医師其他表立し、人々学問を好み、詩歌、俳諧を能くす。

もちろん、下北半島全体のことをいっているのではない。中心地である田名部に限っての伊能忠敬の印象は、土農工商の身分制度が確立した社会の中で、学問や芸術が特権階級の間ばかりではなく庶民にまで及んでいることを見抜いていた。身分上では特権階級である士族に次ぐ農民は、相次ぐ飢饉によって貧困にあえぎ、貨幣経済の発達によって、身分上は最下位にあるはずの商人が豊かな生活を送っていたことも、中央の江戸と変わりがない。少なくとも下北半島の中心である田名部は、安定した江戸幕府政権下では、ミニ江戸風の文化が栄えていたのである。

田名部常念寺の寺宝であり、国の重要文化財となっている阿弥陀如来像は、京都の総本山から船便で譲り受け

たものといわれるが、これらがこの地に存在すること自体、田名部の南部藩における重要な位置を示すものであろう。

三 田名部通の中の大間周辺

材木・奥戸・ これまで古代・中世を通じて、現在の大間町の始まりについて触れてきたが、古代はもちろん**大間の成立** のこと、中世に入っても伝承を中心としたものにすぎなかった。先にも述べたように、蛸崎の乱の折の北部軍用絵図の中に初めて、大間・奥戸・木石（材木）の地名が記され、蛸崎の乱後の北郷一か村の中の一つとして奥戸と蛇浦から打ち出し別村となった大間が注目を集めるが、史実的には確実性が薄く、これもまた伝説の域を出ていない。しかし、江戸時代に入って田名部通三四か村の中の北通り地区に、大間村・奥戸村があったことは確かな事実であり、現在の大間町の有史時代は、江戸時代にその曙を迎えたといえるであろう。ところが、いつごろから現在の奥戸・材木地区を含む大間町にわれわれの先祖が住み始めるようになったかは、いまだにその決め手がない。先史時代からの数々の石器や土器が発見されていることから、この地域に人が住み始めた古さは想像されるが、どの時代のいつごろかとの確証は、現在のところまだ見つからないのである。先にも述べたとおり、材木・奥戸・大間の順に集落が構成されていたということは事実としても、これを実証する史料は、これまたない。

ただ、北海道南部の『鹿部町史』によれば、大間の漁師で司馬宇兵衛という人が元和元年（一六一五）に、鹿部村本別地区に大間から移住したことが記録されているから、このときには既に大間が一集落を形成していたと

考えることはできる。そして大間地区より奥戸・材木地区がより古く集落構成ができていたとすれば、少なくとも一七世紀初めには、材木・奥戸・大間は成立していたといえるであろう。

『鹿部町史』の記録によれば、司馬宇兵衛という大間の漁師は鹿部村に移住する前、一〇年以上も出稼ぎに来ていたと記されていて、一人ではなく仲間も一緒にアイヌ人とともに昆布を採取していたというから、後に述べた出稼ぎの歴史は、相当に古いことがわかる。なお、北海道の昆布の歴史は、元弘年間（一三三一～三四）からであるといわれるが、大間の集落形成は、それほど古いものではないとされている。

江戸時代の 江戸時代の大間には、どのくらいの集落があり、どのくらいの人が住んでいたのであろうか。この大間の人口の時期の田名部通各村の戸口動態資料は非常に少なく、わずかに笹沢魯羊の『下北半島史』『菊池家記』『郡内郷村志』、そして幕末期の松浦武四郎の『東奥沿海日誌』があるばかりだが、その中から年代順に現在の大間町の人口を抜粋してみよう。

享保五年（一七二〇） 〓一五七四人（大間四七一人、奥戸一一〇三人）

元文五年（一七四〇） 〓一二四四人（大間四三四人、奥戸八一〇人）

安永九年（一七八〇） 〓八六一人（大間三三三人、奥戸五二八人）

『東奥沿海日誌』による幕末期の田名部通村落の戸数調査には人口が記されていないが、大間は六〇〇～七〇〇戸、奥戸は一〇〇戸、材木は一八、九戸となっていて、大体の平均家族数を五、六人とみると、大間が三〇〇～四二〇人、奥戸は五〇〇～六〇〇人、材木は一〇〇人前後という見当をつけることができる。

このように見てくると、享保五年から年代が新しくなるに従って、大間・奥戸両地区の人口はだんだん減少していることと、大間と奥戸の人口差が次第に小さくなっていることが目につく。これは田名部通がもともと田畑

の实りを阻害する「やませ」の常習地帯であり、生産性の低い地域であるため、一定限度以上の人口を増加させることができなかつたという基本的な原因に加えて、飢饉や疫病による人口減が重なつたものと推測されている。

大間周辺の この江戸時代の大間の人口を周辺の村々と比較してみると、やはり同じような人口減少の数字が村との比較 いやでも目につく。そして隣村の佐井村が、大間周辺では圧倒的に人口が多かつたことがわかる。

安永九年（一七八〇）までは、ヒバの伐採が自由な佐井の全盛期と呼ばれた時代があつたからである。

佐井村 享保五年 \parallel 四四四四人（本村三四三〇人、その他一〇一四人）

風間浦村 享保五年 \parallel 一四〇八人（下風呂三二六人、異国間六八五人、蛇浦三九七人）

佐井村 元文五年 \parallel 二四七九人（本村二三一〇人、その他一六九人）

風間浦村 元文五年 \parallel 一一〇三人（下風呂三七二人、異国間四四一人、蛇浦二九〇人）

佐井村 安永九年 \parallel 一四〇七人（本村一二一五人、その他一九二人）

風間浦村 安永九年 \parallel 八九七人（下風呂三二五人、異国間三七一人、蛇浦二二一人）

佐井村の人口が圧倒的に多かつたと書いたが、安永九年以降の激減も大いに注目しなければなるまい。確かに全盛期には五〇〇人以上という人口を誇つた佐井村も、南部藩が田名部通の二〇八のヒバ山を留山とみやまとしたため、ヒバ材従業者が大幅に減少したと、飢饉の影響、さらに後に詳しく述べる北前船の寄港の減少によつて、見る影もないほどの人口減に追い込まれたのであつた。

大間周辺の 下北半島の近世史を考える上で、出稼ぎはどうしても見過ごすことのできない重要な問題といわなければならない。あらためていうまでもなく、寒冷地帯で土地は狭く、資源が限られている下北半島の各地は、漁業・農業・林業だけで人々が生活するには、あまりにも厳しい環境下であり、それは現代に

まで尾を引く問題だからである。

そこで近世の下北半島の農・漁民、ヌカ樵夫たちは、収入を得るための出稼ぎに活路を見いださなければならなかった。その出稼ぎ先は、「松前稼ぎ」とも呼ばれる北海道、つまり当時の蝦夷地であり、特に江戸時代の寛政期以降、文化期、幕末にかけて、出稼ぎは下北半島の経済にとって大きな比重を占めるまでになっている。そしてこれは江戸中期から財政が困窮した南部藩が田名部通の檜山の藩有林化を図ったことに大きな原因があるといわなければならぬ。

先に述べた大間周辺の各村の人口で、減少が特に著しかったのは佐井村だったが、これは南部藩が享保五年（一七二〇）にヒバの繁茂する三八か山を留山とし、さらに宝暦十年（一七六〇）には、林政の大改革という建前でもって檜山二〇八か山をすべて留山としてしまったため、人々は生活権を奪われてしまい、離散を余儀なくされたためである。

そこへ襲ってきた天明の大飢饉を中心とする大小飢饉が下北半島の人々に与えた打撃は、まさに壊滅的といってもよかった。地元で稼ぐことができなばかりか、生きることさえ困難な状況下において、下北半島の人々が取った行動は、移住か出稼ぎである。『下北半島史』によれば、天明の大飢饉のときには佐井村の農民が北海道江差に大挙して渡り、そこに一町内をつくったとしているが、これが事実とすると、まさに下北半島から集団脱走するぐらいの規模での出稼ぎや移住が行われていたことになる。

飢饉の時代が去っても、下北半島の人々の蝦夷地出稼ぎは恒常化し、ことに大間周辺の村々では、長後村・大畑村はほとんど出稼ぎの村と呼んでもいいほどに出稼ぎに依存する村であり、労働力となる男はすべて北海道に渡っているため、村には女子と老人しかないという状態であった。

「松前稼ぎ」と 下北半島の出稼ぎ労働の歴史は、先に述べた大間の漁師司馬宇兵衛が北海道南部の鹿部村漁場の労働力へ移住する以前から、仲間とともに昆布を採取していたという記録から、一七世紀初頭から既にあったと思われるが、江戸中期からの蝦夷地出稼ぎの労働力動員は、大畑に本拠を置いた場所請負商人・飛驒屋久兵衛によって仕切られていた。この飛驒屋は、元禄十三年（一七〇〇）に大畑で材木商を開き、二年後には松前へ進出して蝦夷檜の伐採に着手したのをはじめ、北海道各地に手を広げて巨利を得た商人である。

だから大畑を中心とする下北半島の出稼ぎ人は、最初は漁業従事者ではなく、材木伐採人夫であった。現地の労働力であるアイヌ人が山仕事ができなため、和人の労働力を求めたのだといわれるが、飛驒屋は松前藩から企業権とアイヌ支配権を掌握し、場所請負商人としての権力を存分に振るうことになる。

やがて安永三年（一七七四）に至って、飛驒屋は北海道での山林事業から漁業経営に転換し、従来は山稼ぎの出稼ぎ人を漁場労働力に移行させていく。そして寛政元年（一七八九）、飛驒屋の請負場所である国後島のアイヌに目梨のアイヌが合流して造反を起こし、和人の出稼ぎ七一人が殺されるという大事件が発生した。それまでアイヌは松前藩独特の商場知行制によって交易人としての地位にあったものが、飛驒屋の場所請負人としての進出によって、漁場労働力として酷使されるようになったからである。さらに激増する和人出稼ぎ者によって圧迫され、少数派のアイヌとしては、たまりにたまった不満を爆発させずにはいられなかつたのであろう。

このように流血の惨事を含めながら、和人の蝦夷地出稼ぎは進められていくわけだが、この事件で下北半島の出稼ぎの人々は四二人が殺害されている。中でも大間周辺の大畑からの出稼ぎの人々が最も多く、支配人一人、番人二人、水主六人の計二十九人がその犠牲者で、下風呂からの出稼ぎの人も三人を救えることができる。

大間・奥戸からの出稼ぎ人は、この中には見えないが、松浦武四郎の『東奥沿海日誌』では奥戸村をはっきり

と出稼ぎ村としているし、これは明治に入っても続いている。大間周辺では下風呂や易国間が多く、「北海道へ九分通り出稼ぎす」という記録もあり、近世から近代にかけて、大間周辺の成年男子のほとんどは、北海道での漁場労働力の中で大きな存在だったことが知れる。

松浦武四郎の 『東奥沿海日誌』の著者として知られる松浦武四郎は弘化元年（一八四四）の秋から冬にかけて

見た大間周辺 て、下北半島の一帯を歩いた。若いころから六回にわたって蝦夷地を探検した彼が北方探検家として下北半島に興味を持ったのは、むしろ当然のことである。当時の下北半島は、海運交易で開けている数えるほどの地域以外は、「恐ろしいことに他国の者を、とび口で打ち殺し、物品を略奪したあげくに、真夜中にはかがり火をたいて殊更に往來の船をたぶらかした」（『東奥沿海日誌』）というデマが流されている辺地だったが、むしろその方が探検家としての血を燃え上がらせるものだったに違いない。

このような偏見を松浦武四郎は田名部通の各地を縦横に踏査することによって否定し、下北半島の当時のありのままの姿を記し、各地の伝説や風俗を丹念に拾い上げていく旅をしている。この松浦武四郎が見た田名部通の中の大間周辺は、どのようなものであったかについて『東奥沿海日誌』を通じて眺めてみよう。

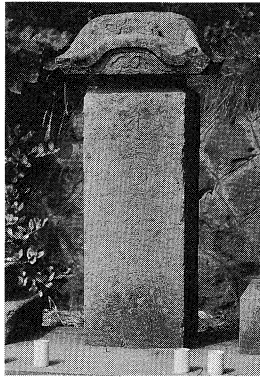


写真 2-14 天草六十六部
納経碑

其岬にならびて又島有、弁天島といへり、船は皆この島かげに
有、人家六七十軒、上町と下町と並ぶ、此所へも又近年船番所を
たて、出入りの船を改む。村内庵二カ所、氏神社有、ここへ九州
天草の六十六部住庵致しける故、そのかたにいたりて一宿す。

という記述は、現在の大間町そのものである。大間崎と弁天島、まさに本州の最北端の地を巡って松浦武四郎はこの地に一泊した。それ

も大間町に今も残る天草六十六部住庵にである。

この天草六十六部住庵については、福蔵寺境内に享保二年（一七一七）六十六部納経碑が立っている。これが寛永十四年（一六三七）に起こった肥後天草村の農民がキリシタン信者とともに幕府と戦った島原の乱と、その首領となった天草四郎時貞に関連するものであることはいままでもない。戦いには敗れたが、その信仰は生き残り、文化二年（一八〇五）になっても天草の各村に五〇〇〇人に及ぶキリシタンが発見され、幕府はこれを弾圧する。こうした背景から、難を逃れた天草のキリシタンたちが山伏修験者の六十六部姿となって、最南端の地から最北端の地へはるばる渡り住んでいたことも、あり得るだろうとみられている。

伊能勘解由の 幕府の命によって「大日本沿海輿地全図」を完成させた伊能勘解由が下北半島に入ったのは、

見た大間周辺 享和元年（一八〇一）十月のことであった。勘解由というのは晩年の名で、一般には忠敬で知

られるが、この年には既に五六歳で勘解由を名乗っていたのである。いずれにしても一七年の歳月を費やして、ざっと三万三〇〇〇キロメートルを踏破したこの大事業は、まさに苦難の連続であったといっている。その測量の記録は『沿海測量日記』二六冊に残されているが、淡々とした筆致の行間に、この大事業がいかに大変なものであったかをうかがい知ることができる。

まず下北半島の白糠・老部を経て小田野沢の肝入甚四郎方に一泊したのが十月十六日、翌十七日は猿ヶ森から尻屋、そして十八日は岩屋から大畑に進み、いよいよ大間に近づいてくるので、その部分を全文引用しよう。

同十九日 朝六ツ頃、大畑出立、二枚橋村、木野部村、赤川村、下風呂村、異国間村桑畑、異国間村、七ツ半後に着（予は七ツ後に着）、此日昼後 暮迄中雨、夜も雨、宿市左衛門

同廿日 朝六ツ頃、異国間出立、蛇浦村、大間村、奥戸村（同村赤石、同村材木）、佐井村原田、佐井村、



写真2-15 菅江真澄

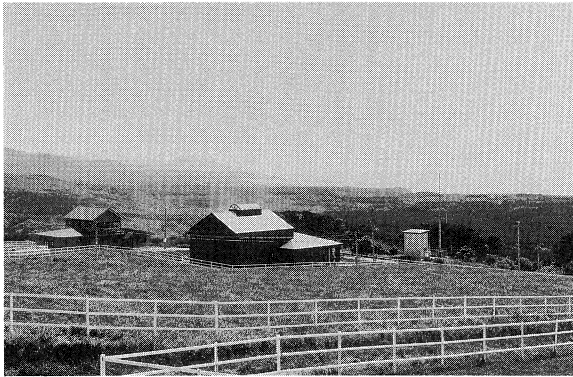


写真2-16 現在の牧の風景

七ツ後に着、此日朝 大雹^{ひま}、終日雪雹、又大風、夜亦大風、是 宗平、慶助を分けて長後村、牛滝村、脇野沢村より田名部村までを測らしむ、我等は田名部 野辺地を測

同廿一日 朝六ツ頃、佐井村出立、奥戸村、大間村、蛇浦村、異国間村、下風呂村七ツ半後に着、止宿長右衛、夜曇晴、此日雪、時雨度々あり

その几帳面な行動と健脚ぶりには驚くばかりだが、特に十月二十日の大間町周辺の測量ぶりは、ものすごいとしかいようがない。この日は終日荒天で、夜には大風雪となつたようだが、伊能勘解由は随員の門倉隼太・平山宗平・伊能秀藏と下男慶助・嘉助とともに獅子奮迅の作業を行っている。そして大間の地を「一極高四十一度三分なり」と位置づけたのだった。

菅江真澄の 漂泊の文人として見た大間周辺 て知られる菅江真澄が下北半島の大間周辺に足跡を残したのは、寛政四年（一七九



写真 2-17 『牧の朝露』

二) のことである。松浦武四郎の下北探検や伊能勘解由の測量よりなお早く、この放浪詩人は下北半島の各地を歩き回っていたことになる。それ以前は、北海道の松前城下福山に四年も滞在していて、北海道から下北半島に向かうという前二者とは逆のコースの来訪であった。

『奥の浦うら』は、北海道側から南部路の下北半島へ向かう記録の最初のものであるといってもいい。続いて菅江真澄は、やはり下北半島遊覧の日記『牧の朝露』も書いていて、その序文には次のように記されている。

みちのおく北の海へたにある大畑のさと、また易国間の浦つたひて、大間のうまき、奥の戸の牧の馬ひくを見、ことばはかなう見るにたらざる心もて、牧の朝露とはつけたり。

そして、この年、菅江真澄は一通り下北半島を巡って田名部で新年を迎え、今度は尻屋崎を回って北岸沿いに佐井を訪ね、そこから脇野沢・川内を経て田名部に戻っている。そのため、田名部に関する記述は多く、田名部を中心とした正月行事はことに日記に詳しく見ることがができる。

しかし菅江真澄は、いつまでも一か所にじっとしていることができない人だったらしい。夏になるとまた、大間の放牧を見るために北通りを遊覧したという。その放牧に関する記述は見当たらないが、日記の絵図には大間の浦と奥戸の湊を一緒に描いたものがあり、その絵図には次のように記されている。

大間の浦、いなりのもり、天妃のほくら、奥戸のみなどのわかみや観世音の堂、この二つの浦のうまきの

かた。

絵図は柵を張り巡らせた牧場の左右に大間と奥戸の民家、その中央には弁天島と思われる島が描かれていて、大間側の森の中には稲荷の社と天妃のほくらとみられる建物らしきものが配置されている。この絵図を見る限り菅江真澄は、大間周辺をくまなく歩き回り、目に映るものを一つ一つ刻明に文と絵とで記録したことがわかる。それには人々の生活の細部に至るものまでが含まれていた。

大間周辺の 江戸時代に下北半島を縦横に踏破した探検家と測量家、そして漂泊の文人の三人によって、**田名村勢と生活** 部通のほぼ全域、大間周辺は、中世とは違って大きく明らかな素顔を見せ始めた。松浦武四郎は、

それまで異境の地のように思われていた下北半島の秘密のベールを引きはがしたし、伊能忠敬はさらに各地を科学的に実測した。そして菅江真澄は、そこに住む人々の習俗までも事細かに明らかにしたのである。

松浦武四郎の『東奥沿海日誌』から大間周辺のことを記した部分は先にも引用したが、材木・奥戸・大間の各地の記述を抜粋してみると、彼がいかにかに丹念にこの地を歩き、その素顔を記録していたかがわかる。

材木村 原田より半里といえり。此間海岸通行なし。西には材木崎を受けて一小湾をなして、五六百石より七八百石位の船は十艘斗はちも入るによろし。人家十八九軒。前に同じく漁者にて農業を致し、又檜山稼等有故に人家至って富るよし也。

奥戸村 材木村より一里。此處濱形北向。前に少の船溜有。六百石より千石の船十五六艘も入ル。然し一向に風かこゝるハ無き也。只其船を繋ぐのミ也。余も昨己酉の六月ハ此處へ箱館より渡りしに、其己前とは違ふて上り切手といふものを拵えて壹人前百五十文ツツ取りたり。又出帆の節も三百五十文とるよし。是は弘化丙午の年より初りしと。故に村々船の入るべき所に番所を立たり。人家百軒斗。一條の町をなせり。小商

人。漁者。檜山稼ぎ。松前稼のミ也。

大潤浦 従二奥戸一里少し餘。此處濱形北向少の濱有。其岬に竝て又島有。辨天島といへり。船は皆此島陰に有。六百石、千石の船も少しかかれり。人家六七十軒。上町下町と二丁に並び町内に川有。細流也。

漁者、農家、船夫、小商人の接り。此所へも又此近年船番所を立て出入の船を改。

簡潔な筆致だが、これによって、わが郷土・大間町の江戸時代の姿が目の前に浮かんでくるほど要を得ている。当時は奥戸が三地区の中で最も人家が多く、三地区とも出稼ぎはあるものの、比較的豊かな生活を送っていたといえるようである。

若い男女のラブレター このようにして下北半島各地の村勢や人々の生活が明らかとなり、未開の地といわれた田名部通女がどのような日々を送っていたかということも気になってくる。

材木も奥戸も大間も漁業・農業・檜山稼ぎ・松前稼ぎが中心で、商人の活動も見られるが、若い男女は、その家業の大きな労働力であったに違いない。そのような日々の生活の中で、若い男女の間には恋も生まれる。その点にも注目したのは、やはり放浪の詩人・菅江真澄であった。

彼が描いた絵図の中に「懸想書のかた」と題したものがあがるが、これは若い男女が交わす恋文の一種である。

みちのおくの国南部のはまやかたにて、けそうしける女のもとに、むすびふみ左右よりさし合たることにて、紙を引きむすびさしてやれば、女の心によしと思えば、そのむすびを一とこゝろに引寄せて男に返しぬ。

又否という返しには、男のくれたるままに返しけるとなる。

という説明が付けられたこの絵図は、南部のはまやかたというから、奥戸から大畑付近までの大間周辺で見か

けたものを描いたものだろうと思われるが、このラブレターは文字を書かなくても相手に思いを伝え、その応諾を伝えることのできる「恋結び」ともいえる性質を持っている。恋文を丸い筒にして、その左右を別紙で結んで渡し、渡された女性が応ずるなら左右の紙結びを中央に寄せて返せばいいのである。このようなラブレターの形式は全国各地にあり、特に大間周辺の特別なものではなかったにしても、当時の大間周辺の若者たちが行っていたということは、非常に興味深い。

四 田名部通の産業と大間周辺

南部藩の伝統

北奥の地は、古くから名馬の産地としてその名を知られてきた。その歴史は古墳時代にまでさかのぼる。南部藩の駿馬 かのぼらなければならぬが、奈良・平安と時代が下っても蝦夷と奥州の名馬は朝廷・貴族の間で珍重され、貢金と並んで陸奥国の貢馬の制が恒例化し、奥州政権藤原氏の時代を経て、この地の産馬は最高の銘柄としての地位を確立したのである。

そして以後、鎌倉・南北朝・室町の各時代を通じて「糠部駿馬」の名は全国に知られ、糠部の所領経営は貢馬が第一の責務となり、糠部の領主は「馬の領主」としての側面を持っていた。

糠部の領主といえば、すなわち南部氏であり、既に平安時代にまでさかのぼる古い時代から糠部郡の地域編成を独特の九戸四門制として貢馬置牧法に基づく体制を整えてきた。これらのことは史料的には確かなものではないが、馬産の伝統は脈々と受け継がれ、江戸時代に入っても南部馬は南部藩にとって最も重要な産業であった。その南部藩の北辺の地である田名部通も例外ではなく、馬の南部藩の一翼を担っている。

南部の地^{へんび}辺鄙ながら、馬の能きには皆驚きし事にて、日々数百匹の馬を見る事になるに、見苦敷馬は更になし。南部立の馬を以て、海内第一と称せる事、尤道理也。

と、天明八年（一七八八）、古河古松軒が南部領内を巡見したときの記録『東遊雜記』に記されているとおり、田名部・恐山・小田野沢を見聞した古河古松軒の目のみならず、南部の辺鄙な場所でも、南部の馬は海内第一と評されていたのである。ことに田名部馬は古来から有名で、蛎崎藏人による蒙古韃靼^{だたん}からの輸入とも、南部光行の奥州移封の際、甲斐から連れてきたともいわれる軍馬をもとに繁殖し、産馬の改良を加えてきたもので、歴史の中で乗用馬として最高といわれるまでになった逸品であった。

南部藩の馬政 南部藩が馬政に力を入れたことはいうまでもなく、この馬の生産によって藩が得る収益には莫と**と**牧畜の流れ 大なものがあつた。藩で直轄する牧場で飼育する官馬はもちろんのこと、一般の民家でも里馬と称して馬を飼育させ、それを管理する係を置いて管轄したのだから、南部の領地には官牧と民牧とが至るところにあつた。

馬ばかりでなく牛の牧畜も盛んに行われ、牛馬の育成地帯としての田名部通には牧畜村落が多く、牛馬小作という制度も普及していた。これは、自力で牛馬を持つことのできない農民が雌の牛馬を借り受けて、子が産まれた場合、その利益の四分の一を貸りた方へ戻すというシステムである。

各村には馬肝入が置かれ、村内の馬に関する売買、生死に関するすべての報告を代官所にさせている。そして毎年決められた期日に二歳の牡馬を強制競売させ、その半分は藩の収入となった。

では、田名部通にはどのくらいの牛馬がいたのだろうか。「菊池家記」にある元文五年（一七四〇）の数字を見ると、その総数は馬が二六四頭、牛が一七三六頭のほか、藩用の精良馬で御野馬と呼ばれる馬が一六七頭と

なっている。

これより五〇年余り後の寛政三年（一七九二）になると、馬より牛の方が増えて、馬が二四五〇頭、牛が三五九八頭となっているが、あくまで南部藩の売り物は馬であった。そしてこの馬の牧場として、後に述べる大間野・奥戸野は、田名部通の中で重要な位置を占めるわけだが、牛の方も決して軽んじられていたわけではない。ことに黒なし牡牛は珍重されたし、一般農民には忌み嫌われていたとはいっても、牛乳が大名たちの養生用の健康飲料として高く評価されていた。『盛岡市史』によれば、盛岡から牛乳調達のために田名部へ出向いたり、飛脚が盛岡城まで竹筒に牛乳を入れて届けた記録が残っている。

大間と奥戸の 田名部通の馬の産地は、「菊池家記」によれば三七か所に分けられているが、その中で数は田**精良馬の飼育** 名部が断然他を引き離してトップだが、続いて川内村・大畑村・関根村・佐井村などが大量の馬産地となっている。しかし、奥戸と大間は、頭数こそ田名部村や川内村には及ばないとはいっても、ある意味では田名部通の中で最も重要な位置にあった。というのは、奥戸と大間だけが藩用の精良馬である御野馬の飼育に当たっていたからである。

これも先に挙げた元文五年（一七四〇）の「菊池家記」に見られる数字だが、奥戸の通常馬は七九頭に對し御野馬は八六頭、計一六五頭となり、合わせると川内村に次ぐ第三位になる。大間村も通常馬の五二頭に對し、御野馬は八一頭、計一三三頭となり、関根村に次ぐ第六位に浮上する。奥戸と大間とを合わせると総計二九八頭となるから、問題なく田名部に次ぐ第二位であり、現在の大間町域で田名部通の優秀馬が飼育されていたことになる。紛れもなくわが郷土・大間町は、南部藩の重要な産業である馬の中核的な存在だったのである。

馬は上・中・下の三等に区別され、このうち上・中の馬は他領への持ち出しが厳禁され、もし持ち出さなければ

ばならない場合は代官の許可を必要とし、その許可証と他領への通行証がなければならなかった。いつてみれば、奥戸・大間は、このような精良馬の方を数多く飼育していたのである。これらを行つた牧場は奥戸野・大間野と呼ばれ、古来からの名牧だが、これについて『奥羽観蹟聞老誌』の記述を抜粋してみよう。

奥戸野 古牧の一なり。寛永十六年（二六三九）、村民四郎右衛門に野守を命じ、野扶持一日三合割を以て与える。享保五年（一七二〇）、大間野と合し、一連の牧となるも、宝暦年間（一七五一―六四）分かれて二牧となる。海に面し、渡島箱館と相対す。背後は連山連つて灌木森々平野広がり。生草青々して天然の好牧地たり。田名部代官所に属して区域延長一里余、横二十四丁余なり。

大間野 古来の牧地なれど、年久しく廃棄の状態にあるを正保三年（二六四六）に至りさらに興し、村民源一郎を野守に命じ、野扶持一日三合の割をもつて与えたり。地勢奥戸牧に同じ。田名部代官所の管下にして延長一里半、横二十丁余なり。附近村落の民情性質素直にして、能く勤勞す。馬は右耳を割きて野印とす。馬数大間野一一二、奥戸野一二七。

奥戸野と大間野 奥戸野と大間野についても少し詳しく見てみよう。いずれも「古来の牧場」とあるが、この両牧については鎌倉時代からの奥州九牧を意味する。今ではこの九牧を確認する資料はないが、永正五年（一五〇八）に八条近江守房繁が書いた「糠部九の部の焼印図」によると、糠部郡内に九つの牧場があり、六の部と九の部の中に北郡の牧場があつたとされている。これを南部藩の九牧と対比すると、木崎牧・住谷牧・蟻戸（有戸）牧・奥戸牧・大間牧が北部の牧場であり、あとは三戸の相内牧・又重牧、九戸の北野牧・三崎牧となる。このうち室町時代からの継承がはっきりしているものは少なく、奥戸牧も大間牧も再興された年だけが明確で、それまでの経緯は「古来からの牧場」という呼び方で言い習わすようになった。

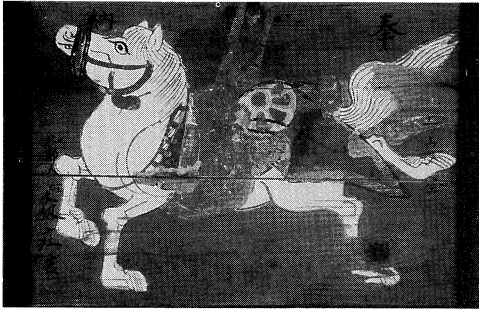


写真 2-18 奉納絵馬

奥戸牧と大間牧の馬の違いは、奥戸が左耳を割いて目印としたのに対し、大間は右耳を割いて目印とし、一時この両牧が合併し、三〇年間一牧となったこともあるが、再び別々の牧場となり、ともに優良馬生産を競うようにある。この両牧での出来事を年代を追って、年表的に眺めてみよう。

- ・寛永十六年（一六三九）、奥戸野、南部九牧の一つとして再興。
- ・正保三年（一六四六）、大間野、南部九牧の一つとして再興。
- ・元禄四年（一六九一）、南部藩で牛馬改め。
- ・元禄五年（一六九二）、狼による害が多く、大間野・奥戸野とも願い出て、筒薬三〇目が渡された。
- ・元禄六年（一六九三）、狼狩りをして、捕獲した狼を漁師に払い下げている。
- ・正徳四年（一七一四）、奥戸野・大間野の野馬改め帳作成。
- ・享保五年（一七二〇）、大間野・奥戸野が合併。三〇年間続き、宝暦年間に再び別々になる。
- ・享保二十年（一七三五）、両牧で狼狩りを奨励、狼の皮を持参すると、女狼七〇〇文、男狼五〇〇文、子狼二〇〇文の奨励金を出す。
- ・元文元年（一七三六）、両牧では冬期は各村に馬を預けて飼育していたが、この年あたりから自然の冬飼を見込み野飼をするようになる。
- ・寛保三年（一七四三）、田名部詰の伊藤五左衛門が大間野馬御用願書を作成。
- ・宝暦三年（一七五三）、大間野の柵を新しく作り変える。この材料は大畑から積み出したが、嵐のために寺屋敷前浜へ揚げたという報告書を伊藤五右衛

表212

宝暦五年九牧父馬表(産町名盛岡)

所名	尺	毛	産	歳	数
住谷	四寸	鹿	住谷	一三	一
相内	四寸	黒鹿	馬町	六	一
木崎	六寸	白栗	材木町	一三	一
又重	三寸	青	町	一三	一
三崎	四寸	栗	北野	七	一
北野	五寸	栗星	北野	一三	一
蟻渡	六寸	栗	吉里	一六	一
大間	六寸	青	紺屋町	二〇	一
奥戸	三寸	青	北野	一一	一

宝暦五年十二月九日

所名	母	二歳雄	当歳雌	当歳雄	合計
住谷	二八	三	四	四	三九
相内	二六	八	七		四三
木崎	八九	六	一〇	六	一一一
又重	五八	一〇	二	五	八五
三崎	二七	四	三		三四
北野	一〇	三	三	五	三二
蟻渡	二七	一	三	一	三三
大間	八〇	一〇	九	一三	一一二
奥戸	八五	一六	一六	一〇	一二七
九合	五二一	五四	七七	六一	七四四

明和六年惣馬表(宝暦より一五年後)

所名	父	母	雌二歳	雌当歳	雄当歳	合計
住谷	一	三二	二	三	四	四二
相内	一	二六	五	一	二	三五
木崎	二	二三六	三五	二六	二六	三三五
又重	一	六七	九	八	六	九一
三崎	一	五九	八	九	九	八六
北野	一	一〇八	一〇	一五	二一	一五五
蟻渡	一	五四	五	九	八	七七
大間	一	八一	二	一六	一九	二二九
奥戸	一	七三	七	一九	一三	二二三
九合	一〇	七三六	九五	一〇六	一〇八	一〇五三

『奥隅馬誌』より

門が詳しく書いている。

・宝暦四年(一七五四)、両牧で秋駒捕りのとき、鹿や狼を捕獲している。鹿の皮は商品価値が高く、また鹿の角はイカ釣りの針の材料にしたといわれる。

・宝暦五年(一七五五)、馬匹調査によると、藩内九牧の総馬数七一頭のうち、大間野一二頭、奥戸野一

二七頭と三割以上を占める。

・宝曆九年（一七五九）、大間野の馬が劣等になったので、七戸産の民有馬九六頭を入れている。

・明和元年（一七六四）、両牧の馬がそれぞれ九一頭と馬数が減る。

・明和五年（一七六八）、大間野御用控作成。

・寛政五年（一七九三）、大間野・奥戸野両牧とも劣等馬を取り除く。

・寛政十二年（一八〇〇）、三戸・七戸の馬三〇頭を大間港より松前へ渡す。

・慶応二年（一八六六）、奥戸村の福神丸と幸福丸が長弘軒に船絵馬を奉納。

・慶応三年（一八六七）、大間野の馬総数一〇四頭、奥戸野の馬総数一四三頭。

稲作の不振 北辺の「やませ」の常習地である下北半島は、稲作の好適地であるはずはなく、稗ひえを耕作するの

と**稗作農業**が農民たちの基本であった。自然災害と農耕法の未発達という両面の原因によって、下北半島の

稲作不振は江戸時代を通して続き、近江商人が船によって白米を田名部に運び込んだため、一層稲作は敬遠され、比較的自然災害にも強い稗を中心とする農業が下北半島の主流となったのである。

稗に対する稲の作付けは九対一程度だったといわれ、稗も稲と同じ水田に苗代から移植するという育成・収穫の方法を採った。菅江真澄は『牧の冬枯』の中で「五倫田のくぐり岩などくれば、山田あり。こは、稲てふものううるにはあらず。田稗とて、ひえかりたるくち根のみ残りぬるに、霜ふかくさむし」と述べているが、田名部通各地の水田のほとんどは、稲作ではなく稗作だったのである。

しかし、この稗作も大きな収穫があるわけではなく、四段階に等級された稗田からは、反当たり五斗五升から七斗というのが普通であり、冷害によってこれを下回ることもまれではなかった。下北半島の農民たちはこのよ

うな現実の中で、とても農業だけで生活していくことはできず、漁業、林業、そして出稼ぎへと生きる道を切り開かなければならなかったのである。

『むつ市史』には正保四年（一六四七）の調査といわれる「奥州之内南部領高郷村帳」に田名部通の農業生産力を各村別に記した数字があるが、これによると、大間の村高はわずかに六・二五二石（田六・一六五石、畑〇・〇八七石）にすぎず、奥戸の二・三・四六六石（田一・三六五石、畑二・一〇一石）と合わせても、大畑の六〇・八二八石（田三七・一七六石、畑二・三・六六二石）の半分にも至っていない。これによって、大間には稗田が多く、畑作が極端に少ないことがわかり、奥戸は逆に畑作が多く稗田が少ない。そしてこれらの農業は、漁業・林業・出稼ぎに励む成人男子に代わって、女子労働力によって支えられていたものと思われる。

ヒバ山大改革 下北半島の林業は、ヒバの密生地帯であるところから、古くから重要な産業の一つであった。と**林業の盛衰** それは江戸時代に入ってから変わりがなく、南部檜と呼ばれて、全国各地へ積み出され珍重されている。最初は加賀・越中・能登など、北陸方面が中心だったが、明暦三年（一六五七）の江戸大火による復興のために、下北の木材は江戸へも大量に輸出されるようになる。

このように南部檜の需要が大きくなると、当然のことながら乱伐されるようになり、現代の熱帯雨林のように、田名部通のヒバ山も荒廃してくる。いかに密生地帯だといっても、伐採された後、木はすぐに大きく生長するはずはない。なにしろ一説によれば年間、立木本数にして八万八〇〇〇本が伐採され、輸送されたというから、半世紀以上も乱伐されるとその量は天文学的な数字になる。南部藩が将来を考えて何らかの手を打たなければならなかったのも、また当然のことであった。それが林政の大改革と称する、これまで何度も述べてきた留山制度である。寛文四年（一六六四）に一三のヒバ山伐採を禁止し、享保五年（一七二〇）には三八の山々を留山とし

たのに続いて宝暦十年（一七六〇）には、檜山二〇八を留山とした林政大改革の断行が林業に携わる人々に大きな影響を与えたことも既に述べた。

それまでにヒバ山の伐採は地元住民の自由に任されていたのだから、田名部通の柚夫たちにとっては、生活権を奪われたのと同様である。しかし、留山にすることは、南部藩にとっても財政上大きな痛手を伴うものであった。南部藩はヒバ材の輸出については、代価の二分の一を徴税し、最盛期には二〇〇〇〜四〇〇〇両の出材による徴税収入があったというから、留山にすることによって輸出家が減少することは、藩の財政上にも大きな影響があったのである。それでも、それは田名部通各村の農民・柚夫たちに与えた打撃とは根本的に違っていた。

『むつ市史』によれば、「大間村、佐井村の百姓は群をなして、北海に流亡し無縁の仏墓のみ廃村に残された。その中で大畑村のみは檜山が多いため、檜の伐り出しも盛んに行われ、村人の多くは依然柚働きによって生計を立てていた。しかし田名部通の大部分の村落は、その生活の資を失い、離散したと推測するに難くない。かくして、幕末における田名部通の山林衰弊の挽回策も結果的に即効薬とはならなかった」というように、下北半島の林業の盛衰は、村そのものの形を変えてしまうほどの大変革をもたらしたのである。

漁業の変遷 林政の大改革によって生計を奪われた田名部通の各村の人々が、豊作を期待できぬ農業より漁業と大間周辺 や出稼ぎに活路を求めたのは、当然の成り行きであった。そういう意味で林政の大改革は地元住民の生活権を奪ったというものの、下北半島の漁業を産業として本格的に展開させるといふ皮肉な結果をもたらしたのである。しかし生業の転換は、それほど生易しいものではない。漁業技術の発達していなかった田名部通各村の人々は、現在の千葉県南部に当たる房州から漁師を招き、新漁労法を学ぶという第一歩から始め、改良された網漁業や釣り漁業などの先進技術を取り入れ、身につけるようになったという。

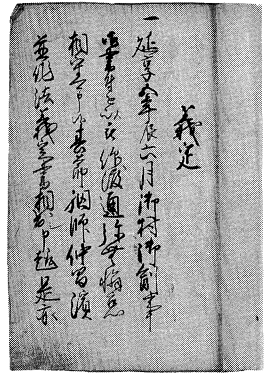


写真 2-19 鯛網義定

漁はたびたびあり、本格的な漁業展開以前からの大間周辺の豊漁の歴史をまとめてみると、次のようになる。

- ・元禄十二年（二六九九）、大間浦、鱒なろ、鮒ぶな多く上りて遠国へも売、漁家潤り。
- ・寛政十一年（二七九九）、大間に鯨おおくまの大群来、二日後に岩屋の浜に群来。
- ・文化十年（一八一三）、安渡、大間両湊に鮒多し。
- ・文化十一年（一八一四）、外浜沖、鮒群来しが、藻への数の子、餅花の如く、大間、安渡にも鮒多し。
- ・文化十二年（二八一五）、四月、岩谷、蛇浦、大間、奥戸鮒魚二百石目余り。

大間独特の大間湊のイワシ網漁では、網元と乗子の分化が既に見られ、漁労は船頭の指揮で行われていた。イワシ網漁「武内家文書」によれば、大間の肝煎五左衛門あてに網師宇右衛門・治郎兵衛、ほか網師一統連名によって出された「大間鯛網仲間義定」が掲げられているが、イワシ網漁についてのさまざまなことがかなり詳しく規定されている。

乗子が他網に変わるときは「暇切手」を出すことや、遅刻者は減給され、身勝手な者は仲間外しにすることなどの規律の問題から、船頭は網元の代行者として乗子を差配し、若干の骨折り料が与えられること、魚粕売却は

林業から漁業への転換で幸いしたことは、下北半島が「やませ」の常習地であるということも皮肉である。やませが吹くと農作物は冷害によって凶作となるが、漁業生産は豊漁になるという自然の成り行きが、田名部通各村の新しい漁民たちに大きな希望の灯を与えた。ことに宝暦五年（一七五五）の四月から十月までは、下北半島の沿岸一帯ではイワシの豊漁が続き、各浦々で一〇〇〇釜のしめかす糟を焚いたという。このような豊

網元一同の評定により、抜け売りは許されないとか、すべての調停は「年行司」が行うとか、漁役は網数船数ごとに一步を割り当て、残余はメ糟在高にかけ、メ糟は納屋渡しで、搬出費用は買手負担となることなど、操業システムや売買に関するに至るまで明記されているのである。しかし配分の状況は不明で、単なる貸金支給ではなかったと思われるところから、米酒その他の現物の「仕込み」と相殺されていたのではないかと思われる。こうした大間湊のイワシ網漁は独特のもので、東通り一帯では明治に及んでも網元と乗子の分化は見られず、仲間網の形で仕込問屋に隷属していた。大間湊の網師は網株所有者であり、「仕込みオヤカタ」としてメ糟製造にも当たっていたとみられるが、網師と地元問屋の分化は生じていたのかどうかの詳細はわからない。

イワシメ糟は延享元年（一七四四）以前から既に江戸に出荷されていて、宝暦・文化の豊漁によってイワシ地曳網漁は下北漁業全体の支柱の一つとなったが、それはメ糟出荷の可能性に依存していた。むしろイワシ漁は明治時代に入ってその重要性を増してくるのである。いずれにしても、江戸時代のイワシ地曳網の乗子労働は、米穀の乏しい下北にあっては、何よりその獲得手段として重要であり、いわゆる仕込制度を広く生じさせた。そして地元問屋商人の支配がその土台の上に久しく続いたのである。

イワシ以外 イワシ以外の下北漁業には、さまざまなものがある。先にも述べたように、ニシンの大群が大間の漁獲生産 や安渡に押し寄せてきた記録からもわかるように、これを刺網漁によって捕獲し、イワシと同じくメ糟に焚いたと思われるが、これも詳しいことはわからない。

このほか、西南の半島突端部では冬のタラ漁が主で、獲物は加工されて廻船によって遠国市場に積み出された。そこに地元集荷問屋商人の活躍が見られ、いわゆる仕込制度による漁民支配も始まっていたと推測される。また荒磯の続く半島の東西突端部は、貝や海藻類の宝庫である。アワビ・コンブ・ナマコ・ガゼ（ウニ）・ワカメ・

ノリなどの磯物も大きな産業の一つとなった。

『風土年表』によると、干アワビの年産は宝暦のころは六万斤に及び、天明（一七八一〜八九）のころでも三万斤ある。寛政年間（一七八九〜一八〇一）に一斤元代八五文で買い取られ、干アワビ・イリコは幕府に買い占められて中国貿易品ともなった。こうした仕組みの中で、田名部の山本理左衛門のような有力商人が成長し、浦方に君臨するようになるのである。

下北半島の漁業は、先進の漁業地域に比べて漁船漁具の発達は遅れていても、磯の漁利の豊かさは群を抜いており、海の生業は農耕の乏しさを補ってきた。「海辺中小肴取候漁船定御役」によれば、享保十三年（一七二八）の漁獲高によって、下北の各村は上・中・下の浦に分けられているが、大間浦・奥戸浦とも上浦の中に区分されている。そのころの大間村の持ち船は八艘、奥戸村は九艘であった。『田名部録』によると、幕末期の漁船数が大間村六艘、奥戸村は三艘となつて、大きく減っているが、ともにイワシ・ニシン・タラなどの漁獲に重要な位置にあった。

『内史略』や「南部盛岡藩御領分産物書上帳」などに見られる田名部通物産調べには、なぜか奥戸村のものが挙げられていないが、大間村は白干鮑あぢ・串貝あぢ・海苔のりなどが挙げられており、イワシ・ニシン・タラなどのほか、磯物と呼ばれる貝・海藻も有名だったようである。

田名部通の廻船問屋 下北半島の商業は、田名部通の各所にある船の碇泊に便利な海港をバックに発展したといつても船着湊に指定し、元禄十二年（一六九九）には、佐井・牛滝・川内を加えて田名部通七湊とした。これは後に脇野沢・異国間を加えて、大間・奥戸を除くというように、めまぐるしく変遷するが、いずれにしても、これらの

良港が田名部通のすべての産業を支え、経済活動の拠点となったのである。

そして先にも述べたように、田名部には山本理左衛門と称する有力商人がいて、文政年間（一八一八―二九）に川内に出店を置いた大商人銭屋五兵衛とも結び、田名部通の各湊の廻船問屋の総元締となっていた。

もともと田名部通は室町末期から北陸地方との海運があり、後に詳述する松前船・上方船・仙台船・酒田船・秋田船・北国船などが下北半島に往来し、それぞれの湊には交易を取り仕切る廻船問屋がいたが、山本理左衛門は、天正以来廻船問屋を営む代表的な商人である。このほか田名部には佐藤庄左衛門という問屋商人がいて、山本理左衛門とともに大坂廻船御用懸大問屋となり、田名部通の問屋を総支配する双壁となった。

田名部以外には、太平・安渡・川内・脇野沢・大畑・大間・佐井・蛸崎・異国間・奥戸・牛滝などに廻船問屋が置かれ、享和二年（一八〇二）の田名部廻船問屋の中で、大間周辺の湊の問屋名は、次の通りである。

異国間問屋Ⅱ市左衛門・孫治

大間問屋Ⅱ左衛門太・作右衛門

奥戸問屋Ⅱ安兵衛・嘉兵衛

佐井問屋Ⅱ伝兵衛・三治、太左兵衛

また、文政十二年（一八二九）の船問屋として、大間では能登屋市左衛門、奥戸では小谷七右衛門の名が知られ、大間・奥戸ともこの時代の商業が活発だったことがわかる。

五 下北半島の海運と繁栄

海上交通と 下北半島の海上交通は、これまで述べてきたように、田名部通の各湊から全国へ向けて展開され船の変遷 ってきた。しかし、これは江戸時代だけのものではなく、もつと以前から全国ばかりでなく北方の外国領とも盛んに交易があり、海の玄関口としての位置にあったことも既に述べた。ここではまず、下北半島に往来したさまざまな船の変遷について眺めてみよう。

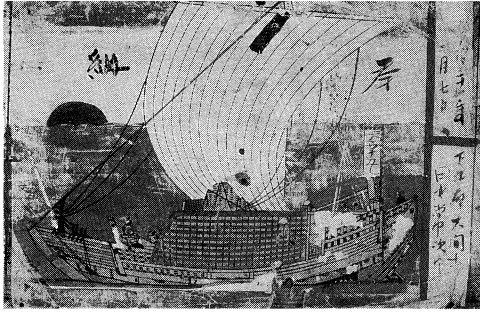


写真2-20 北前船（奉納絵馬）

縄綴船なわとじぶね 下北半島の北通りと呼ばれる一帯は、津軽海峡を挟んで北海道と面しているため、古くから丸木船や蝦夷船と呼ばれる船が使われてきた。三〇〇年以上前から使われているという蝦夷船は、丸木舟に薄板を継ぎ足してツタ縄などで綴じ合わせ、山の苔こひや水草などで穴をふさいだ脆弱な船であるため、縄綴船ともいわれる。懼おそはくるまがい、帆は扇帆を使い、船の大きさは二〇〇石から五〇〇石程度である。しかし、釘を使わず、板が薄いため、船体が軽く扱いやすいので、荒磯の多い蝦夷地の海岸では、大きな時化しげのとき以外は波をスムーズに乗り越えることができた。また、長期間使われない冬場は、縄を切り捨て、船板を積んで保管しておくことができる便利さから、比較的近年まで利用されていたようである。この縄綴船は、永禄八年（一五六五）にキリスト教宣教師が本国に報告した記録では、「津軽や南部だけでなく、出羽の秋田に来て

交易している」と書かれているから、相当広範囲に活動していたことがわかる。

北国船 || 北陸道の諸国からの回船が下北半島の南部檣（ヒバ）を買い取りに来たのは、永祿年間（一五五八―六九）とされているが、この時期は戦国時代も治まり、諸国の城主が城郭を造るようになったところで、藩船や藩の雇船である上方船が田名部湊に詰めかけた。さまざまな種類があるが、北国筋からの船であるため、北国船と呼ばれる。三〇〇〜五〇〇石、中には一〇〇〇石以上の大型船もあったといわれる。

弁賤船・北前船 || 北国船の活躍は江戸時代初期までで、一八世紀末には姿を消す。これは順風るとき以外は「權が主、帆が従」の造りであり、水主（かこ）が大勢必要だったばかりか、風待ちのために湊に停泊する日が多かったのが原因である。弁賤船も瀬戸内海で初めて使われたころは、「權が主」だったが、江戸時代中期以降は、航海技術や造船技術の発達により「帆が主、權は従」の弁賤船が登場し、これが江戸時代中期以降大いに活躍した北前船である。帆を利用することで航海期間も非常に短縮され、酒田から江戸まで西廻りの航路で、従来は三か月要したのが二か月に短縮され、早いものは三二日という記録も生まれた。江戸時代の後期になると、主力は一〇〇〇石積みで、大は二〇〇〇石、小は一〇〇〇石までの弁賤船が日本の海を走り回ることになる。北前船の経済形態は買積制を採用することが特色で、船主は産物問屋が兼任し、船頭はその代理人が多かったため、船頭上がりの北前船主が大勢出現した。

御用押切船 || 幕末になって、異国船の往来が盛んになると、幕府の要人が緊急の用事で箱館と大間の間を頻繁に往来するようになる。この航海は櫓で漕ぎ、身体を船の一端に縄で縛りくくるといふ必死のものだったといわれる。万延元年と慶応四年（一八六〇―六八）までの九年間、勝山藩の大地主で蝦夷地に渡った醍醐新兵衛という人が箱館奉行の命で、押し送り御用方として箱館と大間の「押し送り船」を運行させていた。船名を見る

と「恵比寿丸」「大黒丸」「弁天丸」「寿老人丸」など、七福神に由来したものが多く、權は二四挺で、船長を含めた船員は、一〇〇石積の船で一三人だったという記録もある。また、箱館の沖の口役所への届書が残っており、それによると最上徳内などの幕府の役人の名があり、いつ何名を運んだかも記録されている。運賃は一人運べば二分、四人運べば二両だったらしい。

江戸初期の 下北半島が八戸根城南部氏によって、室町時代から重要な拠点となり、続いて盛岡南部氏がそれに恵まれて、それ以前から北海道や北方諸外国との船による交易があったとはいうものの、生産力の発展に基づく経済の確立のために国内諸国との商業取引を行うようになったのは、室町時代末期からなのである。

文禄二年（一五九三）には、既に南部候手判書のない商船から船役銭を徴収する記録が残されているし、秋田領から仙北米を蝦夷船で輸入することを希望する文書も残されている。また、その三年後には、下北半島への入津船役免除の特権を与えて、商船誘致に力を入れ、下北半島を南部領内の自由商業の場としようとする意図もうかがえるようになった。このようにして酒田や加賀、若狭など、北陸地方の商船と下北半島は密接に交流するようになるのである。

北陸の各地との取引は、南部馬の優秀さを広く遠隔地に知らせることになったし、仇敵である津軽にあって南部にはない米を下北地方が購入するにも大いに役立った。天正十八年（一五九〇）に、遠隔地から田名部馬を所望する大名たちがいたのも、海運による見聞の成果といえるし、文禄四年（一五九五）には、小浜の廻船業者・組屋甚四郎が津軽米を仕入れて南部で売り、南部領の米不足を補っていることも、津軽対南部の間柄では、とてもできないことだったろう。また、文禄の役折、南部信直が嗣子利直とともに名護屋に向かい、豊臣秀吉に拝

謁した折、越前敦賀の船で田名部から武具を運搬したことも知られていて、その縁で下北半島と敦賀の交易が盛んだったことも忘れてはなるまい。

こうした下北半島との交流の深い各地の豪商には、先に述べた小浜の銭屋のほか、酒田の加賀屋、敦賀の道川氏、越前の久米氏などがいて、それぞれの商船は免石船めいせきせんとして下北半島に往来し、南部藩に協力して大きな功績と利益を挙げるのである。

下北の諸港 江戸時代に栄えた田名部通の各湊について、寛政年間（一七八九—一八〇〇）に改補したといわ**と流通体制** れる『増補日本汐路之記』には、簡単ながら、齒に衣を着せぬ筆致で次のように紹介している。

大畑 川港・港悪く川浅し。官船にて入れば、面楫にぬか森といふ小島あり。材木の積所、沖仕立なり。

異国の間 此所も材木場所、東風悪し。この辺にても日和悪くば、佐井の港へ逃るがよし。

大間 港の内浅き方なり。

奥戸 この港浅き方なり、五、六艘は入港可、材木の出るところなり。

佐井 上下入港、この港も大間、奥戸と同じ入海の内なり。

安渡 この港最好の囲場。

大平 この港絶好の所なり。問屋、船宿多し。

といった具合である。安渡湊と大平湊の評価が高く、大畑と異国間の両湊の評価はあまり良くない。大間・奥戸・佐井の三湊はその中間というところだが、この中では佐井湊が一步抜き出でて、「日和悪くば佐井の港へ逃ぐるがよし」となっている。そして、大畑・異国間・奥戸の三湊は、材木の積み出しを中心とした湊であったことがわかる。

評価の高い安渡湊と大平湊は、陸奥湾の中の波静かな天然の良港であり、今ではこの両湊が一つになって大湊港となっているが、下北半島の江戸時代の海運の中心となったのは、この二湊だったといっても過言ではない。安渡湊には小宿、大平湊には大宿が置かれ、その業務は多忙を極めた。この両湊を支配したのは大平問屋であり、安渡湊の小宿は大平湊の大宿の指示によって、その業務を行う。大宿は商船の出入りについての一切を仕切り、船頭は船の停泊中はここで寝食を行うという問屋機能と船宿機能とを兼ね合わせたところであり、小宿はその補助的な業務を行った。いずれも問屋の流通体制を強化するための機構である。

廻船問屋の もともと廻船問屋の本来の業務は、他国からやってくる船の積荷などの取り扱いについて、さまざまの業務の拡大 さまざまな手助けをして、その口銭を収入の中心とするものだが、それぞれの問屋としての流通機能の拡大により大きな力を持つようになると、各自が船を持つようになり、交易の商売そのものを行うようになる。いずれの時代も流通の業務が巨大な利を生み、その資本力が大きくものをいうのである。

先に田名部通の廻船問屋の中でも触れたが、山本理左衛門と佐藤庄佐衛門の二大問屋は、その代表であり、これに続く小問屋も着々と利と勢力を蓄えていくのである。

三陸地方の砂子浜を開拓した千田屋の古文書「廻船碇泊留」には、宝暦三年（一七五三）から明和七年（一七七〇）までに入港した下北半島の船が詳しく記録されているが、これには田名部はもちろんのこと、大畑・易国間・脇野沢の各港の船が来航していることが記されている。また、もっと近くの八戸の鮫浦には、寛文年間（一六六一―一七二二）から下北半島の船が頻繁に出入りするようになっていて、文化・文政年間（一八〇四―一八九）ともなると、遠く茨城県的那珂湊に下北の廻船が寄港している史料もあり、江戸初期の北陸と上方、瀬戸内海沿岸から、広く太平洋側の遠近両方にその足跡を記すようになった。

三陸の廻船問屋・前川善兵衛家の文書には、当時の下北の廻船問屋として、田名部の二大問屋のほか、川内の木津屋久兵衛、佐井の品田太治兵衛、大畑の菊池与左衛門の名があり、下北各地の廻船問屋が日本の各地で活躍していることがわかる。

大間の廻船問屋としては、『茨城那珂湊郷土資料集成』の中に「帆印徳一丸、所属港南部田名部、船主清五郎十人乗」という記録があり、この徳一丸は大間の熊谷屋であることが確認されている。このほか、大間の廻船問屋として知られているのは、伝法屋・淡路屋・能登屋・若狭屋があり、奥戸では小谷屋・黄金屋・紀国屋などがある。その多くは地元出身者ではなく、その屋号が示すように、北陸各地の他国者が海運の隆盛とともに下北半島に往来し、定着して廻船問屋の事業拡大とともに活躍したのだった。

下北半島と 下北半島の海運は、北陸を中心とする日本の全国各地へ向けてだけのものではない。いうまでもなく、古来からの正当な海運路である北回り、すなわち蝦夷地との海運も、江戸時代に入ってからに新たな発展を遂げていた。そこでも多くの廻船問屋の活躍があることはいうまでもない。

北回り海運 まず、寛永十一年（一七九九）、これまで松前との航路しかなかった佐井湊と箱館間の航路が開かれ、大きな脚光を浴びた。特に冬期において荒波が多く、危険の多い海路だったが、海の商人たちは幕府が東蝦夷地経営に乗り出したこともあって、積極的に新航路を切り開く努力を続け、船乗りたちの技術の練磨によってついにこれを実現したのである。

また、これより前、正徳元年（一七一）には大畑と北海道の厚岸間の新しい航路ができていた。これは先にも述べたように、大畑に拠点を置いた飛驒屋久兵衛が北海道に蝦夷檜山を開き、その伐採人夫を大畑から集めて出稼ぎさせるルートと関係していたのではないかと思われる。つまり新しい海運は、出稼ぎの人々の運搬も兼ね

て開かれるという事情もあったわけである。

飛騨屋久兵衛だけではない。やはり大畑の田村屋重次や川内の仙台屋重兵衛も蝦夷松を伐採した記録が残っていて、これによると、田村屋は松前領で二年間で八〇〇〇石、四〇〇〇両の運上金を支払い、仙台屋は三年間で二万四〇〇〇石、二〇〇〇両を支払っている。蝦夷地と下北半島の交易は、当然のことはいうものの、非常に盛んな勢いで展開されていたのである。

『風土年表』によれば、寛政十二年（一八〇〇）には、わが郷土・大間から馬を三〇頭と檜苗三〇〇〇本を松前に渡したなどが記されていて、下北半島と北海道との海運は、江戸時代を通じてフル回転していたということが出来る。そういう意味で田名部通の各湊は、日本海海運を通して北陸・上方と直結し、一方では蝦夷地と直結するという日本全体の交易の中継点でもあった。

大間と奥戸 田名部通の各湊の中で、地味な存在と見られる大間・奥戸の両湊も、その規模さえ小さかったと

両湊の発展 いうものの、江戸時代の下北半島で重要な位置を占める海港である。これまでもこの両湊についてはしばしば触れてきたが、近隣の佐井湊や大畑湊と同様に、津軽海峡に突き出ている下北半島の最北端部にあ
ることはもちろん、潮流や風の関係からも、北海道へ渡る中継地として、古くから重要視されてきた。

南部藩の日誌である「雑書」には、寛文十三年（一六七三）六月二十六日の記録として「田名部奥戸浦へ上方船四艘、松前船五艘」と記されているから、既に江戸初期から上方や蝦夷地からの船がやってきたことがわかるし、大間に関しては、享和二年（一八〇二）四月に、大間湊で奥戸の廻船問屋安兵衛・嘉兵衛、大間の廻船問屋左衛門太・作右衛門などが会合して、大変な威勢だったという。これらの廻船問屋は、形が似ているところからドングリ船と呼ばれる北前船を一年に二回、上方へ就航させ、「夏登り・秋登り」といわれる交易を展開して大

きな利益を挙げていた。また、このほかに大間湊には小廻船と呼ばれるものもあって、これは津軽の大浜・小浜・鯨ヶ沢などの近距離の交易をしていたというから、佐井湊や大間湊に比べて決してひけを取らない発展と活動をしていたといえる。

蝦夷地との交流も田名部通の中で至近距離にあるだけに、佐井湊に続いて箱館との航路が開かれ、享和三年（二八〇三）にはそれが本格化した。佐井と箱館を結ぶルートは冬場の荒波が大きな障害だったが、大間と箱館のルートは「弁天島、立石此ハ海中へ五里ノ間、岩ツツキ舟不通」と「南部領郡村全図」に記されているように、暗礁の多い海路である。この障害を克服して、大間は箱館とも直結し、蝦夷地との交易にも大きく前進した。もともと、これには交易の目的だけではなく、後に詳しく述べる幕府の北方警備が大きな力になっているわけだが、大間湊は古くから遠隔地から船の往来がある奥戸湊とともに、下北の海運の要衝となったのである。

長崎俵物の移出と大間 下北半島から全国各地に積み出す「上り荷」は、主としてヒバ材と海産物であった。材木の移出（二七八五）以降、急速に多量に移出されるようになっていく。そして、この海産物は、大間周辺の人々を中心に収穫され、加工され、移出されていったのである。

海産物の中でも特に珍重されたのは干鮑ほしあわびと海參いりこで、これは長崎会所を経由して清国に輸出される外国向けの商品であった。日本では鎖国以来、諸外国との交易は禁止され、異国の船が日本に往来すること、日本の船が他国と交流することを一切禁じていたが、清国とオランダはその例外であり、長崎の出島で両国との貿易が続けられている。そして、下北半島の大間を中心とした周辺の湊から積み出された干鮑や海參は、清国へ俵に詰められて送られたので、「長崎俵物」と呼ばれた。

表2-3 長崎俵物海商一覧

出	身	呼	称
大	間	伊藤屋	右エ門
大	畑	丸屋	治助
霜	風呂	八屋	右エ門
異	国	林屋	清助
蛇	浦	鈴木屋	右エ門
奥	戸	伊勢屋	右エ門

『下北の海運と文化』より

干鮑は文字通り鮑の干物であり、海參はナマコの内蔵を取ったものを茹でて素干しにしたもので、いずれも中国料理の重要な素材である。清国では特に下北沿岸のものに品質良好の折り紙を付け、これを高価に買い入れたのだから、下北半島は蝦夷地と日本全国の交易の中継点であるばかりでなく、当時としてはまれな外国交易の実績を挙げていることにもなる。

幕府も南部藩も、この大きな経済資源となる下北の海産物に注目しなればならなかった。清国からの好評と注文の増加にも原因があったのだろうが、天明五年には、長崎会所から幕府の普請役・青島俊蔵がわざわざ下北半島まで来航し、干鮑三万斤、海參一五〇〇斤の増産指導を行ったという記録があるから、干鮑と海參に対しての力の入れ方がわかるといえる。

である。
長崎俵物と呼ばれるこれらの下北海産物のうち、大間俵物というのが干鮑のことであり、その特産品ともいえるべき干鮑の歴史と伝統は、以後、現代にまで引き継がれている。

大間の海商 大間の海商については、既に下北半島の廻船問屋のところで述べたとおり、伝法屋・熊谷屋・淡と漁民たち 路屋・能登屋・若狭屋・佐渡屋、そして奥戸の小谷屋・黄金屋・紀国屋が知られているが、中でも大間の伝法屋と熊谷屋は松前藩主の休憩所に指定され、その格式と繁栄がしのばれる商人たちであった。安政四年（一八五七）五月の恐山地蔵尊本堂庫院再建に当たっても、大間の伝法屋、奥戸の紀国屋は、多額の寄付をしていることでも、これらの海商たちの羽振りの良さが想像できる。

海商たちは、これまで述べてきたように、主としてヒバ材と長崎俵物を積み出し、帰りには米・酒・砂糖・醬油・煙草たばこ・木綿・古着・繩・筵むしろ・ローソク・瀬戸物・塗物・石材・梵鐘などを下り荷として運び、巨大な利益を得ていた。特に上り荷の方では、干鮑・海參のほかに海苔や串鮑などがあり、いずれも大間産のものは清国向けの輸出高級品だったというから、それだけ利益も大きい。

大間や奥戸の海商たちばかりでなく、田名部通の総問屋である山本理左衛門も、これを扱うべく、その支配の下に大間周辺に長崎俵物を専門に担当する海商たちを配置した。これらの海商たちの名は表2-13の通りだが、大間周辺の海産物がいかに幕府や南部藩、そして下北半島の海商たちを潤していたかがわかる。

これに対して、直接の生産者である漁民たちはどうだったのだろうか。これだけ品質の良い海産物に恵まれていたのだから、漁民たちの生活も大いに潤ったかというところではない。漁獲物の自由売買は一切封じられ、強制供出させられたからである。

かつて宝暦五年（一七五五）を中心とするイワシやニシンの豊漁のときには、鰯糟や魚油にしたものが高く買い取られ、漁民たちの生活は豊かになったが、長崎俵物という高級輸出品は問屋が独占的流通システムを築き上げ、世話人・下請人などを支配して漁民たちから搾取するという形を完成していた。大間をはじめ下北半島の各港と海商たちの繁栄は、このように漁民たちの犠牲によって成り立っていたのである。

このような社会体制の矛盾や不公平があったにしても、下北半島の海運の発展は、江戸時代の下北半島と大間を語る上に欠かすことのできない歴史であり、正保年間（一六四四〜四八）には、大間村から蝦夷地の森へ渡って、その有力者となった菊池紋兵衛や、万延元年（一八六〇）にやはり大間村から箱館へ渡り、後に日高幌泉の開発者となって成功した林重吉などの有能な人々を運んだのも、下北半島の海路だったことを忘れてはなるまい。

六 北方警備体制と幕末の動向

異国船の出没 寛永十一年（一六三四）、幕府が鎖国体制を強化し、異国との往来を禁止してから、下北半島と遠見御番所 は北方警備の最先端として位置づけられ、まず異国船の接近を見張る遠見浦番所が南部藩によって設置されることになる。正保二年（一六四五）の南部藩の絵図「書上船遠見」によれば、田名部代官所管内に四か所の望楼が設けられたことが記されている。その四か所とは、次のとおりである。

尻屋岡ノ上（尻屋村）

あおべさき（尻勞村）

大間崎（大間村）

おきな（脇野沢村）

この中で大間崎が最北端に位置することはいうまでもない。わが郷土・大間町は、この時期、日本防衛上の最前線にあったことは、現代から考えると奇異に思えるかもしれないが、これは幕末に至るまで続く事実としてはつきりと見据えておく必要がある。そしてこの北方警備体制は、幕府の鎖国体制が強固なものになっていくにつれて、次第に確立されていった。

最初は遠見浦番所と呼ばれていたのが遠見御番所となった看視所の変遷を眺めてみると、元禄十二年（一六九九）には大畑村の焼山崎と宿野辺村の品の木崎が加わり、寛政五年（一七九三）には取据番所として、志利屋村の尻屋崎、大畑村の大畑陣屋、佐井村の黒岩、牛滝村の牛滝が設けられ、さらに文化元年（一八〇三）には、書

上番所が志利屋村の尻屋崎、佐井村の黒岩、牛滝村の牛滝に設置されている。

遠見御番所には武士一人に足軽一〇人が配置され、交代制で厳しく見張っていたが、最初のうちは沿岸に近く異国船はなく、下北半島は鎖国体制の中で外敵に脅かされることなく過ごしたのが現実であった。

沿岸警備の強化と台場 延享二年（一七四五）になると、平穏な状況を打ち破る事件が発生する。田名部通沿岸にロシア船が接近したのである。『風土年表』によれば、「尻矢へ異国船見ゆるとて、望遠局よりの注進に

より、僚属福士源五衛門、迅速に駈出せしに、其衛悠に漕行り。此唐船番処と称るは、尻矢、牛滝両局にて、松前灘走來れる」と、このことを記しているが、そのときの異国船騒動は何事もなく終わったようである。

しかし一八世紀末期から一九世紀に入ると、異国船の接近はしばしば起こるようになってくる。寛政九年（一七九七）の『風土年表』を再び引用すると、「諸厄利亜なるや、魯西亜ならん、教帆懸たりし船一艘尻矢洋より見へたりしが、当灘二里ほど漕行るを望遠鏡にて騒し後は大間荖門和布瀬に仮繫し、一漁人、米を手拭い包て投せしかハ銅銭を与へ、翌朝にハ松前城下近く漕寄しか、地方より大銃の備汀の鱒鱸大方ならざる騒の中、行方悠に津軽灘、秋田洋より西蝦夷灘を漕行り」と、イギリスとロシアともわからぬ異国船の接近による騒動が記されている。

鎖国政策を推進してきた幕府にとって、異国船の接近ほど忌避したいものではなく、それは幕藩体制下にある南部藩にとつても同様であった。そして、それは下北半島の民衆にも浸透し、寛政年間（一七八九〜一八〇〇）に異国船が出没するようになると、人々は「赤人が来た」と叫んで山の中へ逃走するのが常だったという。

このような背景から南部藩による沿岸警備はさらに強化されるようになり、先にも述べた田名部通上地事件を回避する代わりに、自ら北方警備の任を背負い、松前出兵の犠牲も払うようになるのである。遠見御番所の設置



写真2-21 狼煙台跡

からさらに警備を強化することは、武装しかない。後に大間周辺の北方警備のところで述べるが、南部藩は遠見御番所の強化のほかに砲台を設けて下北半島の守備を固めなければならなかった。

箱館航路と 一九世紀の初めの文化年間（一八〇四～一八）は、北方警備の議論が全国的に高まり、下北半島**砲台の設置**でもその具体的な動きがあったが、それは幕府が蝦夷地を正式に永久土地にしたことと無関係ではない。そして享和二年（一八〇二）に箱館奉行二名を任命し、蝦夷地の直轄を推進したのである。

このため、大間湊は北辺警備のために箱館に渡る要津となり、御用押切船の往来が頻繁になった。従来の三厩～松前航路に比べれば、大間または佐井からの箱館航路の方が比較的困難を伴わないから、大間湊と箱館のルートが多用されるようになったわけだが、やはり多彩な海流が渦巻く津軽海峡を渡ることは容易なことではない。特に何日も風が吹き荒れると日和待ちをしなければならぬのだが、後になって北辺警備がさらに緊迫してくるようになると、風を無視して押切船は強引に航海を強行した。先に下北海運の船の変遷のところでも触れたが、これは櫓を多数用いて、文字通りがむしやりに押し切って渡る船であり、幕府の要人たちは、まさに命がけの航海を続けて北辺警備の任に当たったのである。

しかし、大間周辺の具体的な北方警備の強化といえば、この御用押切船より大砲台場が文化五年（一八〇八）に五か所設けられたことであろう。大砲の数は大間八、材木一、大間峰煙台に一というから、これは相当な数

といわなければならぬ。この大間に配置された大砲を含めて、北部の各砲台に備えられた大砲の数は、全部で三七挺である。つまり約三分の一の大砲が大間に集中している。

大間湊や奥戸湊の繁栄で海商たちが豪奢な生活をしていたころ、大間一帯は、北方警備の要衝としての道を歩んでいたわけである。このころ、大間は戸数四四、奥戸は一二九となっていて、まだ三倍近く奥戸の方の集落の方が大きかった。

大間周辺の 北方警備に対する激動の時期ともいえる文化年間（一八〇四―一八）は、大間周辺には、慌ただしい人馬の往来があった。先に述べたような大間湊と箱館を結ぶ航路が活発になったことや、砲台の設置に伴う幕府の要人たち、南部藩士たちによる動きがそれだが、それは既に享和二年（一八〇二）の箱館奉行の通行から予感されていたことでもあった。

箱館奉行戸川筑前守の一行が大間周辺を通行したのは、同年四月のことである。蝦夷奉行を任命され、任地向かうための田名部通入りだったが、それは風雲急を告げる北方警備の先触れといってもよかった。「箱館奉行通行御心得回状」によれば、田名部を四月二十一日に立って大畑に入り、異国間を同二十二日に立って大間で休憩を取り、佐井で一泊という行程である。つまり、このときは大間湊からではなく、佐井湊から箱館へ渡ったことになる。大間は一時の休憩という通過地点だったが、以後、文化年間に入って蝦夷地警備の人士の往来は次第に激しくなり、大間湊・佐井湊からの箱館へのルートは、ともに頻繁に利用されるようになった。

文化四年（一八〇七）には、幕府目付遠山金四郎、普請役最上徳内の一行がにぎにぎしくこの地を通ったことも記録に残っているが、いずれにしても沿道の北郡の郷民たちにとって、これらの人馬の往来は大きな負担を背負わされるため、歓迎されるものではなかった。文化元年と同八年の二回、北郡の郷民たちは検断・宿老を通じ

て南部藩に救済を訴えている。

しかし、この間にも、蛇浦沖にロシア船が出没したり、ロシア人が北方領土の択捉えとろふに來襲、日本人越冬番人四人を捕らえ、食糧を略奪したり番屋倉庫に放火するという事件が起こり、南部藩としても手の打ちようがなかった。つまり、事実上、北海道では日本とロシアの紛争が起こっていたのである。

和親条約と 安政元年（一八五四）、日本はついに諸外国の圧力に屈して、日米、日英、日露の和親条約を結ぶ。**異国人上陸** ぶ。アメリカのペリー提督が艦隊を率いて浦賀に來航し、幕府に通商を迫り、ロシアのプチャーチン提督がやはり艦隊を率いて長崎で日露国境問題を談判した翌年のことである。いずれにしても、これらは和親条約と呼べるものではなく、脅迫に近い開国への交渉であった。

そのため、三国との和親条約が結ばれたとはいっても、幕府の北方警備は少しでも緩められるはずはなく、安政二年にはその警備を仙台・秋田・南部・津軽・松前の五藩に命じている。

しかし、和親条約が結ばれているため、下北半島にも黒船をはじめ各国の異国船が出入りし、異国人の上陸も数多くなってきた。安政二年だけを取ってみても、南部藩の「異国船一応控」には、これまでにない異国船の接近と異国人の下北半島への上陸が記されている。

一、四月二日昼、エサン崎より異国船見ゆる

一、同五日、大畑湊より北の方三四里沖合に異国船見ゆる

一、同十五日、異国船壹艘大畑湊より東北の間沖合へ接近海岸壹里半計り沖合に碇泊、本船より伝馬船二艘にて湊川口へ五人上陸別条之無 但シ大畑市町ノ男女見内之者□□□

一、四月十七日、佐井浦へ異国人上陸

一、四月十六日、異国間村江イギリス六人上陸

一、蛇浦村前同所上陸を計り別条無之事

一、十七日、アメリカ人異国間村江九人上陸致し(略) 同十七日蛇浦村江アメリカ人九人上陸

一、同十七日、イギリス人大間村江拾人上陸

一、同十七日、奥戸之先キ材木村江昼時よりイギリス六人上陸

また、『大間町沿革史年表』によれば、安政三年五月七日「イギリス人矢越へ伝馬船にて上陸。佐井村宿老緊張す」とあり、イギリス人とアメリカ人がこの時期、下北半島各地に上陸していることを示している。しかし、第四〇代南部藩主利剛は、この年北通り海岸を巡視し、大間沖で砲鑑演習も行っているから、警備についての体制は決して緩めたわけではなかった。とはいうものの、現実の問題として、鎖国政策は既に崩れていたものであり、それは封建制度そのものの瓦解の過程を意味するものでもあった。

異国船遭難と 北方警備の問題とは別に、外国船の下北半島における座礁遭難と日本人との交流も、江戸時代

海難史の異聞 には数多かった。この中から大間の関係深い異国船の遭難の二例と、大間の人間が遭難し、外国人に救助されたエピソードを一つ挙げておこう。

異国船の遭難の例の一つは、元治元年(一八六四)十月三十日、イギリスの商船「アスモール号」が弁天島周辺に暗礁に乗り上げて遭難した。イギリスの領事館員が急いで救助のために大間に駆け付けてきたが、その際、大間の村人たちは積極的に救助作業に当たった。そのお礼として、イギリス政府は翌年の慶応元年(一八六五)六月、南部藩に対して時計を贈っている。

そしてもう一つは慶応元年七月二十一日、大間沖貝殻瀬でアメリカ船が遭難した話である。この遭難について

も、大間の村人たちは救助活動に携わったのであろう。乗組員が一五〇人ほどだったことや、船の中には二歩金ばかりで八〇万両ほど積まれていたという話が評判になったという。

日本人が外国人に救助されたというエピソードは、これらよりもっと古く、延享元年（一七四四）のことである。佐井の伊勢屋の持ち船・多賀丸が大畑から江戸に向かって出帆したが、強風によって遭難し、北千島オネコタンに漂着した。乗組員はロシアで保護され、クーツクやイルクーツクに永住することになるのだが、その中に大間村出身の長助がいる。長助はロシアの女性と結婚し、子どもをもうけ、その子はイワン・フィリップovich・トラベニコフを名乗った。

イワンはすすくと成長し、やがてロシアでの有能な人物として出世していく。そして寛政四年（一七九二）九月、日本に通商を求めるために根室に來航したラックスマンとともに、第一回対日使節団の総理となつて同行する。イワンが父の長助の縁者を訪ねて奥戸の信願寺を訪れ、過去帳を見ると、「長助尋信男、延享元年十一月二十八日死去」と記されていて、既に遭難によって死んだものとされていたのである。

外国船の遭難救助の話も、ロシアに保護された日本人の子どものエピソードも、血なまぐさい異国と敵対する江戸時代の日本の状況ばかりが目につく中で、美しく、心温まる内容を持っている。

下北半島の 安政元年（一八五四）の日米、日英、日露の和親条約の締結から始まった幕藩社会体制の崩壊は、幕末の動向 五年後の日米修好通商条約によって決定的なものとなった。この通商条約はアメリカばかりではなく、オランダ・ロシア・イギリス・フランスとも結ばれたのだから、江戸幕府の根幹ともいえる鎖国政策は、完全に崩れ去ってしまったのである。

こうした背景から倒幕の気運は急速に高まり、慶応二年（一八六六）には薩長連合が成立し、武力倒幕の密議

はなつた。そして、その翌年には徳川慶喜よしのぶによる大政奉還、王政復古と続き、三〇〇年の歴史を誇つた江戸幕府はついに終わりを告げるのである。しかし、幕藩体制下にあつた南部藩やその北辺の領土である下北半島は、この社会の一大転換についていく情報があまりにも不足していた。そういう意味で幕末の下北半島は、流言蜚語ひびごの世界で右往左往していたといつても、決して過言ではない。

慶応三年九月九日、つまり明治元年の前年の秋、田名部は、その歴史始まって以来の大事件に直面した。奥羽鎮撫總督の命令により、肥前藩の海軍隊長・中牟田倉之助の一隊が陽春艦に乗り込み、安渡港へ上陸し、田名部代官所へ幕府直轄の田名部五〇〇〇石の無抵抗引き渡しを要求したのがそれである。これによって田名部通一帯が大混乱に陥つたことはいふまでもない。そして、このとき、一つのもつともらしいデマが流され、これがさらに混乱に拍車をかけた。

仇敵、津軽の軍勢が下北半島の西北端の大間に上陸し、沿道の民火に放火しながら田名部に攻め入る。

この流言蜚語は、田名部通一帯を騒乱状態に引き込んだといつてもいい。仇敵津軽との開戦ということで、町家は兵火を恐れて財を埋めて恐山街道を逃げ、藩士は水盃を妻子と交わして代官所と女館に詰め、大砲数門を構えて緊張感はいやが上にも高まつた。しかし、その臨時体制の中に大間からの飛脚が到着し、次のような報告があつて、この騒乱事件は一挙に空気の抜けた風船のようにならぶんでしまうのである。

大間に上陸したのは、たしかに津軽の者なれど、津軽の軍勢に非ず。津軽船が難船し、水主たちが上陸したるものなり。

当時としては笑えない話ながら、このような明治前夜の悲喜劇が下北半島における幕末の動向の現実であり、そこにわが郷土・大間が登場することも興味深い。いずれにしても幕府と南部藩が営々として築いた北辺警備の

大砲も最後には国内の流言蜚語に向けられた形になったのも皮肉だが、このようにして下北半島もその中間も、新しい近代の明治時代を迎えるのである。